

群墳跡
吉山丸邑田
遺跡
山丸邑田

—津山総合流通センター埋蔵文化財発掘調査報告5—

2000

津山市土地開発公社
津山市教育委員会

田邑丸山古墳群 田邑丸山遺跡

—津山総合流通センター埋蔵文化財発掘調査報告 5 —



2000

津山市土地開発公社
津山市教育委員会



1. 田邑丸山古墳群全景（左が1号墳、右が2号墳）



2. 1号墳竪穴式石槨



1. 1号墳竪穴式石槨西小口



2. 1号墳木棺



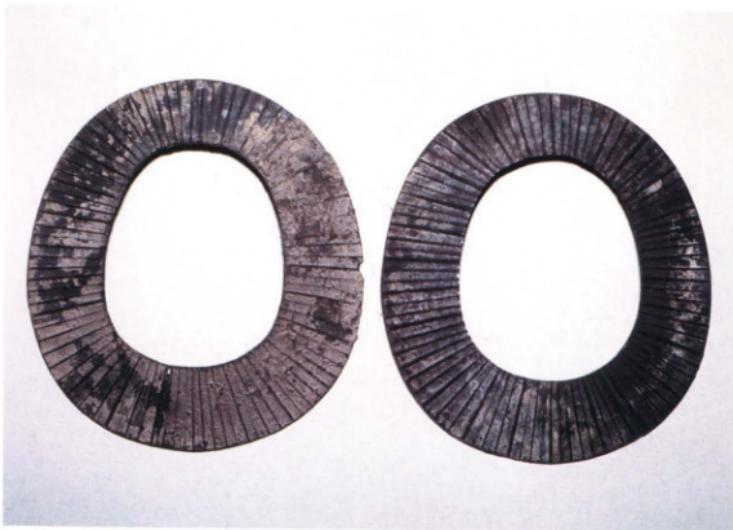
1. 2号墳葺石と土師器



2. 2号墳くびれ部葺石



1. 1号墳出土乳文鏡（東京国立博物館所蔵）



2. 1号墳出土車輪石形銅器（東京国立博物館所蔵）

序

津山市は岡山県の北部、古井川流域の盆地に位置します。本市は津山城下町の町並みを中心へ発展してまいりましたが、近年の開発の波はより郊外へと波及しております。市内を横切る形で中国自動車道が開通し、市内には工業団地が造成され、津山総合流通センターも中国自動車道沿いインター近くに計画されたものであります。流通センター建設予定地の93haの中には、全部で8遺跡が存在しましたが、そのほとんどが記録保存と言う形で、開発に伴い消滅してしまいました。その中で唯一田邑丸山古墳群一帯は古墳公園として保存される事となり、開発と文化財保護の立場から言えば、このうえない事であります。

また、これら調査の記録をまとめた報告書もすでに4冊が刊行され、本報告書は最後の5冊目にあたります。

さて、田邑丸山古墳群は、円墳と前方後方墳で構成されております。この前方後方墳という墳形は、津山市内では始めて確認されたものであります。また、1号墳からは、新たな埋葬施設が確認され、2号墳からは土師器の壺が多数出土しております。これら今回の調査結果から、古墳の規模や埋葬施設の構造などが部分的ではありますが判明しております。さらにこれら調査結果は、美作地方の古墳社会研究の一助となるものと期待しております。

なお、末筆ではございますが、発掘調査から報告書作成に至るまで多大なるご協力をいたいたいた津山市土地開発公社、津山市シルバー人材センター並びに関係各位に対し厚く御礼申し上げます。

平成12年3月31日

津市教育委員会
教育長 松尾 康義

例　　言

1. 本書は津山総合流通センター造成に伴う田邑丸山（たのむらまるやま）占墳群・田邑丸山遺跡の発掘調査報告書である。
1. 津山総合流通センター造成事業で8遺跡が調査された。報告書は5冊にまとめて刊行する予定であり、本書はその第5冊目である。
1. 発掘調査経費はすべて、原団者である津山市土地開発公社の負担によるものである。
1. 発掘調査は津山市教育委員会・津山弥生の里文化財センター安川豊史、小郷利幸が担当した。
1. 本書の執筆・編集は小鷹がおこなった。
1. 本書に用いたレベル高は海拔高である。また、方位は平面直角座標系第V系の北である。
1. 本書第3図に使用した「津山総合流通センター内遺跡と周辺の遺跡分布図」は建設省国土地理院発行5万分の1（津山西部）を複製したものである。
1. 本書には挿図に遺構等の略称を用いている。略称は次のとおりである。
S H：住居跡 S K：土塙 T：トレンチ
1. 整理作業から報告書作成に至るまで、小澤かおり、大谷みゆき、丸干佳苗、橋本玲恵、浅岡美恵、広政美智子、八幡佳奈絵、山本有希、上原香里、三谷順子、仁木智子、上原恵美、岩本美紀、野上恭子、岩本えり子、家元博子各諸氏の協力を得た。
1. 自然科学的分析として、奈良国立文化財研究所肥塚降保氏に「有本遺跡出土ガラス遺物の科学的調査」、岡山理科大学自然科学研究所白石純氏に「田邑丸山2号墳出土土器の胎土分析」、「田邑丸山1号、2号墳出土の赤色顔料」の玉稿をいただいた。また、田邑丸山1号墳出土遺物の写真掲載については、東京国立博物館の掲載許可（平成11年11月7日付け、東博資特第1217号）を得ている。また、2号墳の鏡の写真については、今井堯氏から写真の提供をいただいた。記して謝意を表します。
1. 出土遺物及び図面類は津山弥生の里文化財センター（岡山県津山市沼600-1）に保管している。

本文目次

I	津山総合流通センター造成と発掘調査に至る経過	1
1.	津山総合流通センター造成に至る経過	1
2.	発掘調査に至る経過	1
II	津山総合流通センター内の遺跡と周辺の遺跡	2
1.	津山総合流通センター内の遺跡	2
2.	周辺の遺跡	6
III	遺跡の立地と調査の経過	8
1.	遺跡の位置と立地	8
2.	調査経過	8
(1)	調査に至る経過	8
(2)	調査の経過	8
(3)	調査体制	10
IV	調査の記録	12
1.	田邑丸山古墳群	12
(1)	1号墳	12
a.	墳形及び規模	12
b.	埋葬施設	23
c.	出土遺物	28
(2)	2号墳	29
a.	墳形及び規模	33
b.	外表施設	34
c.	埋葬施設	45
d.	出土遺物	46
(3)	5号墳	50
a.	墳形及び規模	50
b.	外表施設	52
2.	田邑丸山遺跡	53
(1)	住居跡	53
(2)	土塁	57
(3)	その他	57
(4)	小結	57
V	自然科学的分析	59
1.	田邑丸山2号墳出土土師器の胎土分析（岡山理科大学自然科学研究所 白石 純）	59
2.	田邑丸山1号、2号墳出土の赤色顔料（岡山理科大学自然科学研究所 白石 純）	61
3.	有本遺物出土ガラス遺物の科学的調査（奈良国立文化財研究所 肥塙隆保）	63
VI	まとめ	69
1.	田邑丸山古墳群の評価	69
(1)	墳形の復元について	69
(2)	埋葬施設について	74
(3)	出土遺物について	76
(4)	古墳群の形成と時期について	80

挿 図 目 次

第1図 津山市位置図	1
第2図 津山総合流通センター内周知の遺跡(左) と実際に調査した遺跡(右)	3
第3図 津山総合流通センター内遺跡と 周辺の遺跡分布図	5
第4図 田邑丸山1号墳竪穴式石槨	8
第5図 田邑丸山古墳群・遺跡周辺地形図 及びグリッド配置図	11
第6図 田邑丸山古墳群調査前墳丘測量図	13~14
第7図 田邑丸山古墳群トレンチ配置図	15~16
第8図 田邑丸山1号墳トレンチ配置図	17~18
第9図 田邑丸山1号墳土層図	19~20
第10図 第1主体平・断面図	21~22
第11図 第2主体平・断面図	25
第12図 墳丘外埋葬施設平・断面図	26
第13図 1号墳出土遺物	27
第14図 田邑丸山2号墳トレンチ配置図	29~30
第15図 田邑丸山2号墳墳丘上層図	31~32
第16図 トレンチ1~4平・断・立面図	35~36
第17図 トレンチ7~10平・断・立面図	37~38
第18図 トレンチ11・12・15平・断・立面図	39~40
第19図 トレンチ13・21・22平・断面図	41
第20図 トレンチ13・14・16~20・23土層図	42
第21図 トレンチ5平・断・立面図	43~44
第22図 竹管文による二重口縁塗分類図	46
第23図 2号墳出土遺物	47
第24図 土師器出土位置図	49
第25図 田邑丸山5号墳トレンチ配置図	50
第26図 田邑丸山5号墳墳丘上層図	51
第27図 トレンチ3層溝内石出土状況	52
第28図 田邑丸山遺跡A・B地点位置図	53
第29図 住居跡1平・断面図及び出土遺物	54
第30図 住居跡2平・断面図及び出土遺物	55
第31図 住居跡3、土壤1・2平・断面図及び 出土遺物	56
第1図 K-C a 敷布図 田邑丸山2号墳と 津山市内の各遺跡出土上器との比較	60
第2図 S-r-R b 敷布図 田邑丸山2号墳と 津山市内の各遺跡出土土器との比較	60
図1 蛍光X線分析装置	63
図2 各資料の蛍光X線スペクトル図	64
図3 有本遺跡B地区から出土した青色 鉛バリウムガラスに含有する「漢青」	65
図4 有本遺跡B地区出土 鉛バリウムガラス管玉	66
図5 六ツ塚古墳群出土小玉類のX線 透過写真	66
図6 日本・中国・韓国で出土した鉛バリウム ガラスの鉛同位体比と有本遺跡出土の 鉛バリウムガラス管玉	67
第32図 田邑丸山1号墳復元図	69
第33図 田邑丸山2号墳復元図	70
第34図 岡山県内前方後方墳集成	71~72
第35図 竪穴式石棺床面構造比較図	75
第36図 古墳地方竪穴式石槨の規模の比較と 美作地方等主要石槨床面平面図	75
第37図 車輪石形銅器比較図	77
第38図 竹管文を施す土器	79
第39図 「畿内系」二重口縁塗の基本型式	80
第40図 県内と岡山県内出土二重口縁塗	81

表 目 次

第1表 津山総合流通センター地内遺跡調査 一覧表	4
第1表 田邑丸山2号墳出土土師器の胎土分析	59
第1表 分析試料一覧と蛍光X線分析および X線回析分析結果	61
表1 岡山県津山市有本遺跡B地区出土 鉛バリウムガラス管玉の同位体比	67
第2表 岡山県内前方後方墳一覧表	73
第3表 竹管文を施す土器一覧表	79

図版目次

卷頭図版 1-1 田邑丸山古墳群全景	図版11-1 トレンチ3
2 1号墳竪穴式石室	2 トレンチ3遺物出土状況
2-1 1号墳竪穴式石室西小口	図版12-1 トレンチ4
2 1号墳木棺	2 トレンチ7くびれ部
3-1 2号墳葺石と土器	3 トレンチ7くびれ部
2 2号墳くびれ部葺石	図版13-1 トレンチ7・8
4-1 1号墳出土乳文鏡	2 トレンチ7・8
2 1号墳出土車輪石形調器	3 トレンチ7遺物出土状況
図版1-1 田邑丸山古墳群遠景	図版14-1 トレンチ8
2 田邑丸山古墳群遠景	2 トレンチ8
3 田邑丸山古墳群全景	図版15-1 トレンチ9
図版2-1 田邑丸山1号墳	2 トレンチ9上段葺石
2 田邑丸山1号墳	図版16-1 トレンチ10
3 1号墳調査風景	2 トレンチ11
図版3-1 1号墳トレンチ1調査風景	3 トレンチ12
2 トレンチ5上層	図版17-1 トレンチ11遺物出土状況
3 埋葬施設全景	2 トレンチ15
図版4-1 第1主体	3 トレンチ17
2 第1主体東小口	図版18-1 トレンチ10~17
図版5-1 第1主体西小口	2 トレンチ18
2 第1主体北側壁	3 トレンチ19
3 第1主体下部構造	図版19-1 トレンチ21・22
図版6-1 第2主体検出状況	2 トレンチ22上層
2 第2主体	3 前方部から後方部を望む
3 第2主体土壙	図版20-1 前方部からくびれ部を望む
図版7-1 第2主体東小口	2 トレンチ23
2 第2主体粘土断面	3 トレンチ1から望む後方部
3 第2主体遺物出土状況	図版21-1 トレンチ1上層
図版8-1 墳丘外埋葬施設検出状況	2 トレンチ17上層
2 墳丘外埋葬施設	3 トレンチ6の外側葺石
図版9-1 田邑丸山2号墳	図版22-1 埋葬施設
2 田邑丸山2号墳	2 埋葬施設
3 2号墳トレンチ3調査風景	3 西側小口
図版10-1 トレンチ1	図版23-1 田邑丸山5号墳調査前
2 トレンチ2	2 5号墳調査風景
3 トレンチ2遺物出土状況	3 5号墳全景

図版24-1	トレンチ2土層	図版28-1	土堆1上層
2	トレンチ3土層	2	土壤1
3	トレンチ3石出土状況	3	土壤2
図版25-1	田舎丸山遺跡住居跡1調査風景	図版29-1	埋めもどし風景
2	住居跡1土層	2	埋めもどし風景
3	住居跡1	3	埋めもどし風景
図版26-1	住居跡2土層	図版30	出土遺物(1)
2	住居跡2中央穴上層	図版31	出土遺物(2)
3	住居跡2	図版32	出土遺物(3)
図版27-1	住居跡2遺物出土状況	図版33	出土遺物(4)
2	住居跡3上層	図版34	出土遺物(5)
3	住居跡3柱穴	図版35	出土遺物(6)

I 津山総合流通センター造成と発掘調査に至る経過

1. 津山総合流通センター造成に至る経過

津山市は、岡山県の北部、中国山地と吉備高原の中間に位置し人口約9万人、南北19km、東西15km、面積約185km²、面積の約54%を山林・原野が占め、宅地となっているのは約12%ほどである。市内の西から南へと県内三大河川の吉井川が、加茂川や広戸川など多くの支流をしたがえて流れている。本市の地質は、主に古生層と第三紀層、第四紀層で構成されている。また、市内最高峰は加茂町との境にある天狗寺山(831.8m)である。

この盆地をぬうように昭和50年中国自動車道が開通し、市内に2つのインターチェンジ(津山・院庄)が設けられる。これが産業・教育・文化等あらゆる面に多大なる影響を与え、これを契機に工業団地(院庄工業団地、綾部工業団地、草加部工業団地、国分寺工業団地、高野工業団地、津山中核工業団地)の造成が各地で行われた。この事により阪神地域や九州地域などとの物流の拠点として、中国地方内陸部の中核都市としてますますの発展が期待された。その後、中国横断道が米子さらには総社まで開通し、瀬戸大橋を経由する事により山陰・四国地方を含めた高速交通網が整い、さらに広範囲の物流も可能となる。また、岡山空港の整備からさらに広域流通網が徐々にではあるが整いつつある。その中で、21世紀へ飛躍する物流・情報の発信基地、情報により高度化した流通団地の形成と情報ネットワークによる配達システムの確立をめざし、中国自動車道院庄インターチェンジ近くに計画されたのが、津山総合流通センターである。

2. 発掘調査に至る経過

津山総合流通センター建設予定地は、津山市と鏡野町との境に位置する約93haである。そのほとんどが津山市域であるものの鏡野町域もあるため、開発主体の津山市土地開発公社、鏡野町教育委員会、津山市教育委員会の三者が、埋蔵文化財の取り扱いについて事前に協議を行った。その結果敷地内の鏡野町域については同町教育委員会が、他の津山市域については同市教育委員会が、埋蔵文化財



第1図 津山市位置図

の有無を確認し、あわせて発掘調査も担当する事とした。その後平成7年3月に造成計画の工程が確定したため、その工程計画に合わせ、埋蔵文化財の調査を実施する事とした。

平成7年6月26日付津土公第17号で文化財保護法第57条の3第1項に基づき、津山市土地開発公社理事長中尾嘉伸から「埋蔵文化財発掘の通知」が文化庁長官に提出された。この段階では周知の遺跡として認識されていたのは、田邑丸山古墳群と戸島・戸島B遺跡だけであった。しかし、開発面積が広いため、これら以外についても地形的に遺跡の立地が予想される部分については、立木伐採後に分布調査を実施する事とした。この分布調査の結果、遺跡の立地が広範囲に及ぶと予測されたので、必要箇所については確認調査を実施する事とした。確認調査はバックホーを借り上げ、幅2m程のトレーナーを尾根の稜線に直行するように設定した。その結果、遺跡は敷地の東側丘陵に存在する事が判明したため、全面発掘調査は避けられない結果となった。発掘調査の対象となったのは、有本古墳群、有本遺跡（A・B地区）、上達戸島遺跡、男戸島遺跡、男戸島古墳、荒神崎遺跡、有元遺跡の7遺跡である。発掘調査に先立ち平成7年7月11日付、津教委文第48号により津山市教育委員会教育長藤原修己から文化財保護法第98条の2第1項に基づく「埋蔵文化財発掘調査の通知」が文化庁長官宛に提出された。なお、田邑丸山古墳群については現状のまま保存される事となった。

II 津山総合流通センター内の遺跡と周辺の遺跡

1. 津山総合流通センター内の遺跡

津山総合流通センターは、津山市上田邑、下田邑、戸島、鏡野町布原、沖にまたがる約93haが建設予定の敷地である。その大半を占める津山市域の中に、周知の遺跡として認識されていたのは、第2回左のとおり戸島・戸島B遺跡（男戸島遺跡の一部）と田邑丸山古墳群だけであった。今回の調査に先立ち立木伐採前に事前に分布調査を行い、その最新たに有本古墳群の一部を確認した。さらに立木伐採前の段階では樹木の繁茂がはげしく古墳の確認も困難であり、集落遺跡の存在する可能性の大きい丘陵も存在する事から、立木伐採後に再度分布調査を行い、あわせてトレーナー調査による確認調査を実施する事とした。その際の調査面積は約153,000m²である。その結果第2回右のとおり6遺跡（有本遺跡、上戸島遺跡、男戸島古墳、男戸島遺跡、有元遺跡、荒神崎遺跡）を新たに確認し、結局流通センター建設予定地内の遺跡（津山市域）は合計8遺跡となり、田邑丸山古墳群が保存される以外はすべて発掘調査が行われる結果となり、発掘調査面積は約36,700m²である。なお、鏡野町域については葡萄田頭遺跡と植木本郷古墳の2遺跡が発掘調査の対象となった。

以下、各遺跡の概要を記す事にする。

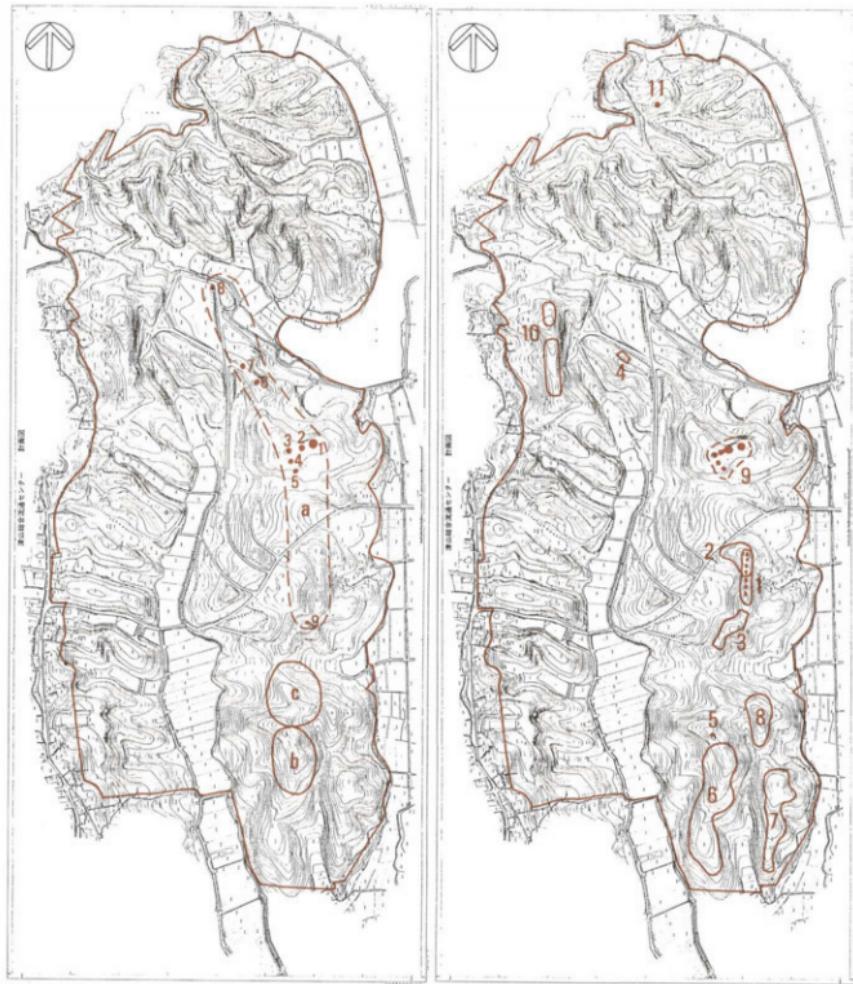
（1）有本古墳群（ありもと、第2回1）

方墳7基からなる古墳群である。埋葬施設はいずれも東西方向を向いており、竪穴式石室が1基ある以外はほとんど木棺を使用している。内部に枕石を置くもの他に鼓形器台を転用しているものもある。副葬品としては、鉄剣、鉄鎌などの鉄製品の他、ヒスイ製勾玉、碧玉製管玉、ガラス製勾玉などの装身具が出土している。これら出土遺物から時期は古墳時代前期と考えられる。

〔有本古墳群〕『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第59集』津山市土地開発公社・津山市教育委員会 1997

（2）有本遺跡（ありもと、同2・3）

弥生時代後期の集落遺跡が中心であり、便宜的にA・B両地区にわけている。A地区は住居跡4軒、



a. 田邑丸山古墳群（1～9号墳）
 b. 戸島遺跡
 c. 戸島B遺跡

- | | |
|--------------|------------|
| 1. 有本古墳群 | 7. 荒神鉈遺跡 |
| 2. 有本道路（A地区） | 8. 有元遺跡 |
| 3. ◯（B地区） | 9. 田邑丸山古墳群 |
| 4. 上造戸鷦遺跡 | 10. 葡萄田頭遺跡 |
| 5. 男戸鷦古墳 | 11. 横之木船古墳 |
| 6. 男戸鷦遺跡 | |

第2図 津山総合流通センター内周知の遺跡（左）と実際に調査した遺跡（右）（S = 1 : 10,000）

建物跡6軒、貯蔵穴4基などがある。B地区は集団墓地である。溝や石列による区画が3基ありこの区画内外で約140基の上塙墓を検出した。鉄鎌、ガラス製管玉の他特殊器台の破片が出土している。これ以外に江戸時代の近世墓16基と弥生時代中期の段状遺構も検出している。

「有本遺跡他」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第62集』津山市教育委員会・津山市土地開発公社1998
(3) 上遠戸島遺跡（かみおんどしま、同4)

弥生時代中期の集落遺跡であり、住居跡1軒を確認した。この住居から石斧、石錘、砥石などが出土している。

「上述戸島遺跡他」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第62集』津山市教育委員会・津山市土地開発公社1998
(4) 男戸島古墳（おんどしま、同5）

直径15.5m、高さ1.5m程の円墳で、周溝が部分的にめぐっている。埋葬施設は木棺1基で主軸は北東方向に向いている。副葬品として鉄刀2、鉄鎌がある。特に鉄鎌は複数が東となってまとまって出土している。また、周溝外に土帥器の甕に赤色顔料を詰め高杯で蓋をしたものがあり、その周辺から滑石製の小玉も1点出土している。

「男戸島古墳他」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第62集』津山市教育委員会・津山市土地開発公社1998

(5) 男戸島遺跡（おんどしま、同6）

弥生時代中期の集落遺跡と近世墓からなる。弥生時代の集落は、住居跡18軒、建物跡7軒、貯蔵穴などからなる。住居跡から碧玉製の管玉が出土している。近世墓は10基あり、寛永通宝、くしなどが出土している。

番号	遺跡名	調査面積(m ²)	調査期間	調査担当者	報告書刊行予定
1	有本古墳群	4,000	H7.8.1~12.4	安川・小郷	平成8年度(既刊)
2	有本遺跡(A地区)	4,500	H7.9.1~10.13	〃	平成9年度(既刊)
3	〃(B地区)	2,800	H7.10.13~ H8.4.10	小郷	〃(〃)
4	上遠戸島遺跡	400	H7.12.12~12.15	安川・小郷	〃(〃)
5	男戸島古墳	650	H8.2.16~2.28 5.7~6.14	小郷	〃(〃)
6	男戸島遺跡	14,000	H8.2.29~10.8	安川・小郷	平成10年度(既刊)
7	荒神船遺跡	6,800	H8.5.15~12.24	小郷	〃(〃)
8	有元遺跡	3,200	H8.10.4~H9.1.20	安川	〃(〃)
9	田邑丸山古墳群 ○遺跡	350	H9.1.21~4.9	小郷	平成11年度(本書)

第1表 津山総合流通センター地内遺跡調査一覧表(番号は第2図に対応)

(6) 荒神峪遺跡（こうじんがく、同7）

弥生時代後期の集落遺跡。住居跡18軒、建物跡6軒、貯蔵穴などからなる。住居跡には直径が11mを測る大形住居もある。石包丁や青銅製の釧、ガラス製の勾玉、小玉などが出土している。その他、縄文時代と考えられる落とし穴や近世墓などがある。

(7) 有元遺跡（ありもと、同8）

弥生時代後期と古墳時代後期の集落遺跡である。弥生時代は住居跡2軒、貯蔵穴などを検出した。



- | | | | |
|------------------|-------------|------------|-----------|
| 1. 津山総合流通センター内遺跡 | 8. 九番丁場遺跡 | 15. 古川3号墳 | 22. 美作国府跡 |
| 2. 大開遺跡 | 9. 田邑丸山古墳群 | 16. 大開遺跡 | 23. 久米廃寺 |
| 3. 竹田遺跡 | 10. 萬花穴古墳群 | 17. 郷観音山古墳 | 24. 宮尾遺跡 |
| 4. アモウラ東遺跡 | 11. 赤鉢古墳 | 18. 美和山古墳群 | 25. 鶴庄駕跡 |
| 5. アモウラ遺跡 | 12. 土居天王山古墳 | 19. 狐塚古墳 | 26. 神楽尾城跡 |
| 6. 二宮大成遺跡 | 13. 土居妙見山古墳 | 20. 門の山古墳群 | |
| 7. 二宮遺跡 | 14. 竹田妙見山古墳 | 21. 寺山古墳群 | |

第3図 津山総合流通センター内遺跡（トーン部分）と周辺の遺跡分布図（S=1:50,000）

古墳時代としては、住居跡4軒、建物跡2軒、段状遺構などを検出し、須恵器、土師器、鉄滓が出土している。

「有元遺跡他」[津山市埋蔵文化財発掘調査報告第65集] 津山市教育委員会・津山市土地開発公社 1999

(8) 田邑丸山古墳群・遺跡（たのむらまるやま、同9）

円墳9基で構成されていたが現存するのは5基である。その内1号墳は直径36mの円墳で竪穴式石室から乳文鏡1面、鉄斧、剣、車輪石形銅器2点が出土している。2号墳は、円墳と考えられていたが、確認調査の結果全長40m程の前方後方墳で竪穴式石室から鏡が4面出土したと伝えられているが、所在は不明である。3～5号墳については出土遺物は知られていない。また、9号墳（古墳がどうかは不明）から鼓形器台の破片が発見されている（註1）。木古墳群（1～5号墳）は緑地公園として整備された。また、古墳の東側の丘陵斜面から弥生時代の住居跡2軒が検出された。（本報告書参照）

(9) 葡萄田頭遺跡（ぶどうだがしら、鏡野町、同10、註2）

弥生時代中期から後期の集落遺跡。住居跡、建物跡、貯蔵穴、木棺墓などを検出。

(10) 横之木詫古墳（まさきのきざこ、鏡野町、同11、註2）

円墳で埋葬施設は木棺と推定される。須恵器が出土しており、6世紀中頃の古墳である。

2. 周辺の遺跡

津山総合流通センターは、吉井川の支流戸鳥川右岸の南北に長い低丘陵一帯が敷地であり、樹枝状に小さな丘陵が派生している。周辺では西側の鏡野町布原地区にかなり広い平野部が存在するが、反対の東側は西側ほど広くはなく、どちらかと言えば奥まった地形である。そのため集落としての生活基盤を周辺に求めるに西側の布原地域の方が重要視されていたと考えられる。この事が周辺の遺跡の分布状況（西側の鏡野町側に多い）からも伺える。

以下周辺の遺跡を時代別に概観してみる（第3図参照）。

(旧石器・縄文時代)

旧石器時代の遺跡としては、大開遺跡（津山市、註3）が知られており、ナイフ形石器が1点出土している。この遺跡では縄文時代早期の押型文土器や石鏃などが出土しているが明確な遺構は確認されていない。同じく早期の遺跡として、竹田遺跡（註4）がある。この遺跡では住居跡6軒などの遺構が検出され、数多くの土器片と石鏃などが出土している。流通センター内の遺跡では遺物の出土はほとんどないが、狩猟用の落とし穴と考えられる遺構が多数検出されている。

(弥生時代)

この時代は丘陵上に集落が営まれている事が多い。中国自動車道建設などに伴い調査された二宮大成遺跡（註5）、二宮遺跡（註6）、アモウラ遺跡（註7）などがあり、大開遺跡（津山市）では、住居跡4軒が検出され板状鉄斧が出土している。また竹田遺跡（註8）では、列石による区画をもつ墳墓が調査されている。この墳墓は埋葬施設として土壙墓14基、土器棺4基があり、後期前半頃の所産である。また、九番丁場遺跡（註9）では、直径11.9mの大形住居からガラス製の管玉が出土している。

(古墳時代)

集落遺跡としては西側布原地域の平野部に大開遺跡（鏡野町、註10）があり古墳時代初頭の住居跡が検出されている。また、アモウラ東遺跡（註11）では、住居跡や段状遺構が検出され鉄滓や須恵器、土師器が多量に出土し、6世紀末から7世紀初頭頃と考えられている。古墳では吉井川の流域と内陸

部では、古墳群の構成が大きく異なっている。内陸部では円・方を主体とした古墳群であるのに対し、流域では前方後円墳が一定間隔に築かれている。内陸部では流通センター内の有本古墳群（方墳）、東花穴古墳群（方墳7基、註12）などがあり、前方後円墳は見られない。逆に吉井川流域では、美作最大の美和山1号墳（全長80m、註13）、孤塚古墳（全長60m、註14）、鶴観音山古墳（全長43m、註15）、古川3号墳（全長30m、註16）、赤堀古墳（全長45m、註17）、土居妙見山古墳（全長25m、註18）、上居天王山古墳（全長27m、註19）などがあり、首長の系譜がある程度たどれる地域である。

（古代以降）

古代になり東4kmに美作国府（註20）が沖積地を臨む段丘上につくられると、南西3kmには出雲街道沿いに久米郡街に比定されている宮尾遺跡（註21）、久米庵寺（註22）が隣接して存在する。また、中世になると院庄館跡（註23）が南1.5kmに置かれる。この事から、おそらくこの辺りが古代～中世にかけて交通の要所であった事が伺える。ただ近世になるとこの院庄もお城の候補地としてあげられるが、東5kmの鶴山に津山城が築かれ、同時に城下町や街道が整備されていく。

- （註1）上居徹他「田邑丸山古墳群」『津山市文化財年報1』津山市教育委員会 1975
（註2）立石盛詞「菊畠田原遺跡」『鏡野町埋蔵文化財発掘調査報告第4集』岡山県吉田郡鏡野町教育委員会 1999
（註3）平岡正宏「大崩古墳群・大崩遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第51集』津山市教育委員会 1994
（註4）土居徹「竹田遺跡」『岡山県史考古資料』岡山県史編纂委員会 1986
（註5）栗野克巳「二宮大崩遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告6』岡山県教育委員会 1973
（註6）高畠知功他「二宮遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告28』岡山県教育委員会 1979
（註7）1981～1982年広域林業構造改善事業文化財発掘調査委員会が調査を実施。報告書未刊。
（註8）今井亮他「竹田埴跡」『鏡野町教育委員会 1984
（註9）氏半昭則「丸番丁場遺跡」「最近の岡山県下における埋蔵文化財発掘調査概要の報告会』 1996
（註10）鏡野町教育委員会が1994年～1995年、岡山県教育委員会が1995年に調査。

- 片上弘「国道179号改良工事に伴う発掘調査」『岡山県埋蔵文化財報告26』岡山県教育委員会 1996
（註11）行田裕美「アモウラ東遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第36集』津山市教育委員会 1990
（註12）立石盛詞「鏡野町東花穴古墳群の調査」『調査団ニュース第3号』岡山県遺跡保護調査会 1992
（註13）中山俊紀「史跡美和山古墳群」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第42集』津山市教育委員会 1992
（註14）小郷利幸「孤塚古墳」「前方後円墳集成中國・四国編」山川出版社 1991
（註15）梅原末治「美作郷村觀音山古墳」『日本古文化研究報告9』日本古文化研究所 1938
土居徹「郷観音山古墳」『岡山県史考古資料』岡山県史編纂委員会 1986
渡哲大「觀音山古墳」「美作の鏡と古墳」津山郷土博物館 1990
（註16）安川豊史「古川3号墳」「前方後円墳集成中國・四国編」山川出版社 1991
（註17）近藤義郎「赤堀古墳」『岡山県史考古資料』岡山県史編纂委員会 1986
（註18）土居徹「美作鏡野町土居妙見山古墳」「古代古墳第六集」古代古墳研究会 1969
（註19）安川豊史「十居天王山古墳」『前方後円墳集成中國・四国編』山川出版社 1991
（註20）岡田博他「天作国府」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告6」岡山県教育委員会 1973
岡田博「天作国府跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告24』岡山県教育委員会 1978
安川豊史「天作国府跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第50集』津山市教育委員会 1994
安川豊史「天作国府跡－日本生命社宅新築に伴う発掘調査－」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第56集』津山市教育委員会 1995
安川豊史「天作国府跡(總社33番地-1)発掘調査概要」「年報津山弥生の里第6号』津山弥生の里文化センター 1999
（註21）橋本惣司他「宮尾遺跡」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告4」岡山県教育委員会 1973
（註22）栗野克巳「久米庵寺」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告4」岡山県教育委員会 1973
栗野克巳「久米庵寺」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告24」岡山県教育委員会 1978
（註23）河本清「史跡院庄館跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告7集』津山市教育委員会 1974
行田裕美「史跡院庄館跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第7集』津山市教育委員会 1981

III 遺跡の立地と調査の経過

1. 遺跡の位置と立地

田邑丸山古墳群・田邑丸山遺跡は岡山県津市下田邑2377番地他に所在する。津山総合流通センター内の遺跡は、約93haの敷地内の中間に南北存在する小枝谷を挟んで東西に分布し、その中でも遺跡の多くは比較的なだらかな丘陵の続く東側一帯に存在する。西側の丘陵は馬の背状のものが幾重にも続いており、比較的急な斜面であるため遺跡はほとんど立地していない。この東側の中央北寄りの丘陵頂部に位置するのが、本古墳群及び遺跡である（第2図参照）。流通センター敷地の東側には南北方向のこの辺りでは唯一の平野部が存在する大枝谷がある。これのつきあたりには灘池があり、これの南側の丘陵に本古墳群は立地する。本古墳群からのながめは北側については灘池や山並を望み、西側については小さな谷を挟んで痩せた丘陵が続き、南側についても標高的には高い丘陵が続くため視界はあまりよくない。唯一東側は谷の平野部が見渡すことができ、この部分を意識した立地の感がある。ただ吉川川本流からは3kmも入っているため、吉川川から見渡せる美和山古墳群（第3図18）と比べると、非常に奥まった立地である事は否めない。

2. 調査経過

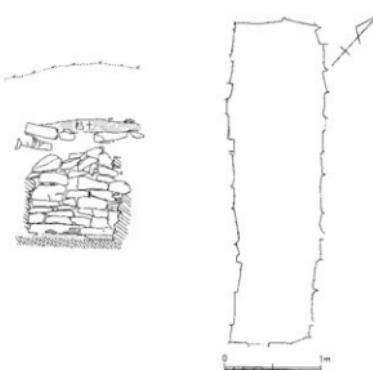
（1）調査に至る経過

流通センター建設予定地内で周知の遺跡は田邑丸山古墳群と男戸鷲遺跡だけで、その他の遺跡については樹木伐採後の分布調査や確認調査によって確認されたものである。今回新たに確認された遺跡は有本遺跡、有本古墳群、上達戸鷲遺跡、男戸鷲古墳、荒神峯遺跡、有元遺跡、田邑丸山遺跡の7遺跡と周知の男戸鷲遺跡の範囲が広範囲に及ぶ事が確認された。そのため、これら8遺跡の調査面積は約36,700m²にも及び、調査期間も限られているため、年間の調査計画を立て、造成工事計画にも合わせて調査を実施していった。まず、有本古墳群から調査を開始し、随時継続して各遺跡の調査を実施した。各遺跡の調査期間などについては第1表を参照していただきたい。

以下、田邑丸山古墳群及び田邑丸山遺跡を中心調査の経過などを述べる。

（2）調査の経過

田邑丸山古墳群の調査歴について簡単に述べる。1号墳については大正時代に中心部が掘られ、竪穴式石槨から乳文鏡や車輪石形銅器、鉄劍、鉄斧などの出土が知られていた。これら出土遺物は現在東京国立博物館に所蔵されている。また、この竪穴式石槨について昭和40年に再調査され測量図も一部公表されている（第4図、註1）。そのため、1号墳については墳形及び規模などの確認と、外表施設や他の埋葬施設の確認等を実施した。



第4図 田邑丸山1号墳竪穴式石槨（註1より引用）

また、2号墳については、未買収地があり古墳の全面を調査できないため部分的な調査となった。この古墳の中心部も昭和34～35年頃に掘られ、竪穴式石槨がかなり破壊されている。またこの竪穴式石槨も1号墳と同時期に清掃調査されたが、出土遺物は無かったとの事である（註2）。この内部から鏡が4面出土したとされ、その内の1面（波文帶二神二獣博山形鏡）については追跡調査され写真撮影されている（註3）。その他の鏡については鏡式、所在とも不明である。そのため2号墳についても、墳形及び規模など可能な限り調査した。また、4号墳はすべてが、3号墳はほとんどが未買収地内である。そのため3号墳については部分的にトレンチを入れ、買取済みの5号墳については墳形、規模、埋葬施設などを確認した。また、地元の話では、本古墳群の東側の用水の蓋に、竪穴式石槨の蓋石を使用しているとの事であり確認した。平らな石を使用している箇所もあり、蓋石の可能性は十分ある。

平成8年10月24日、2号墳の墳丘上に重機が通り墳丘の一部が削平され、葺石などが散乱しているのを発見する。そのため、この破壊行為に対し、開発事業者津山市土地開発公社から事績を開き、顛末書を提出してもらう。原因は、遊歩道整備に伴う樹木搬出用の道を重機がつくったためであった。古墳の位置や遊歩道の位置等を市教育委員会と開発事業者、実際に工事を行った施工業者の三者が互いに確認していなかったために起こったものである。この削平で、かなりの数の石が散乱し、葺石の存在が認められた。また、の中には以前に破壊された竪穴式石槨のものと思われるかなり大きめの石も含まれていた。

平成9年1月21日、田邑丸山古墳群の確認調査を開始した。1号墳に9箇所、2号墳に17箇所、3号墳（後に古墳では無い事が判明）に2箇所、5号墳に5箇所のトレンチを入れた。その結果、円墳のみで構成されると考えられていた本古墳群が円墳（1・5号墳）と前方後方墳（2号墳）で構成される事、また従来3号墳とされていた部分は自然地形であり、2号墳を構築した際の残丘である事がほぼ判明した。ただこれについては未買収地に統くため詳細は不明である。また、外表施設として2号墳に葺石が伴い、土師器の壺も出土している。この2号墳については2段に葺石が巡り、くびれ部が非常に鋭角である事が判明したが、それが全周するかは未買収地があり明瞭でない。また、2号墳の前方部について可能な限りトレンチを入れて墳端を確認したが、葺石が全周はしていないようであり、北側については一部で省略されている可能性もある。さらに2号墳や5号墳の下層には弥生時代の遺構が存在する事、1号墳の墳丘外に竪穴式石槨が存在する事も新たに判明した。この竪穴式石槨についても1号墳に伴うものは、判断できない。これら調査は2月18日にほぼ終了したため、ラジコンのヘリコプターで航空写真を撮影し、個々のトレンチの写真撮影も順次おこなった。その後、2号墳の補足調査及び各トレンチの測量調査を学生アルバイトの応援を得ておこなった。測量調査が終了し、3月18日から各トレンチの埋めもどしを実施した。埋めもどし作業は3月21日には終了したが、古墳群の南側丘陵斜面で造成工事中に弥生時代の住居跡が2軒新たに見つかり、急遽この部分の調査を実施した。また、先の2号墳の削平された部分についても、なるべく現況に復旧させた。これら調査は3月27日には終了し、流通センター内のすべての発掘調査が終了した。その後、平成8年度に「有本古墳群」、平成9年度に「有木遺跡・上遠戸鷲遺跡・男戸鷲遺跡」、平成10年度に「荒神嶽遺跡」、「有元遺跡・男戸鷲遺跡」の報告書を作成し、平成11年度に本報告書（田邑丸山古墳群・田邑丸山遺跡）を作成して、報告書の刊行もすべて終了した。尚、本古墳群には現在遊歩道が整備されていて、自由に散策する事ができる。

(3) 調査体制

発掘調査は津山市教育委員会が主体となり実施した。調査体制は以下の通りである。

津山市教育委員会 教育長	藤原修己（～H8.9.30）
〃	松尾康義（H8.10.1～）
教育次長	内田康雄（～H8.3.31）
〃	中尾義明（H8.4.1～H9.3.31）
〃	山本直樹（H9.4.1～H10.3.31）
〃	菊島俊明（H10.4.1～）
文化課長	朝山三千穂（～H9.3.31）
〃	永禮宣子（H9.4.1～H11.3.31）
〃	森元弘之（H11.4.1～）
文化財センター所長	神田久遠（～H10.3.31）
〃	中山俊紀（H10.4.1～）
次長	安川豊史（調査担当）
主任 小郷利幸（　　）	
主任 青木睦子（事務担当、～H8.9.30）	
主事 坂本裕子（　　、H9.4.1～H10.3.31）	
主事 川村雪絵（　　、H10.4.1～）	

整理作業は文化財センター野上恭子、岩本えり子、家元弘子、小澤かおり、大谷ゆかり、丸下佳苗、橋本玲恵、浅岡美恵、広政美智子、八幡佳奈絵、山本有希、上原香里、三谷順子、上原恵美、仁木智子、岩本美紀が担当した。

発掘作業は社団法人津山市シルバー人材センターにお願いした。作業従事者は下記の方々である。

（敬称略）

（調査作業員）青木 保、内田克巳、内田久仁男、沢 保、柴山揚一、杉山由和、高山 実、田口晴道、田中琢志、中尾一雄、中村 信、西本 徳、橋本 満、平林 好、広野 守、細川憲一、三好昭二、水島友一、木杉暁四、横部 明、米井英祐、鶴山 康、脇山静馬、青木敬子、青木照美、青木敏子、福村奈美子、右近冬子、内田秀子、内山英喜子、坂手美恵子、高橋不三子、高山祥子、田渕高子、橋本琴枝

（学生アルバイト他）赤坂健太郎、為貞義弘、仁木良知、藤本 優、片岡大助、田渕芳宣、熊代昌之、細川 浩、八木利恵、春名葉子

なお、発掘調査から報告書作成に至るまで、津山弥生の甲文化財センター職員及び下記の方々の指導、助言、協力を得た。記して厚く御礼申し上げます。（敬称略）

足立克己、綾野早苗、今井 充、葛原克人、倉林浜砂斗、肥塚降保、河本 清、近藤義郎、佐藤寛介、澤田秀実、島崎 東、白石 純、立石盛洞、上居 徹、弘田和司、福田正継

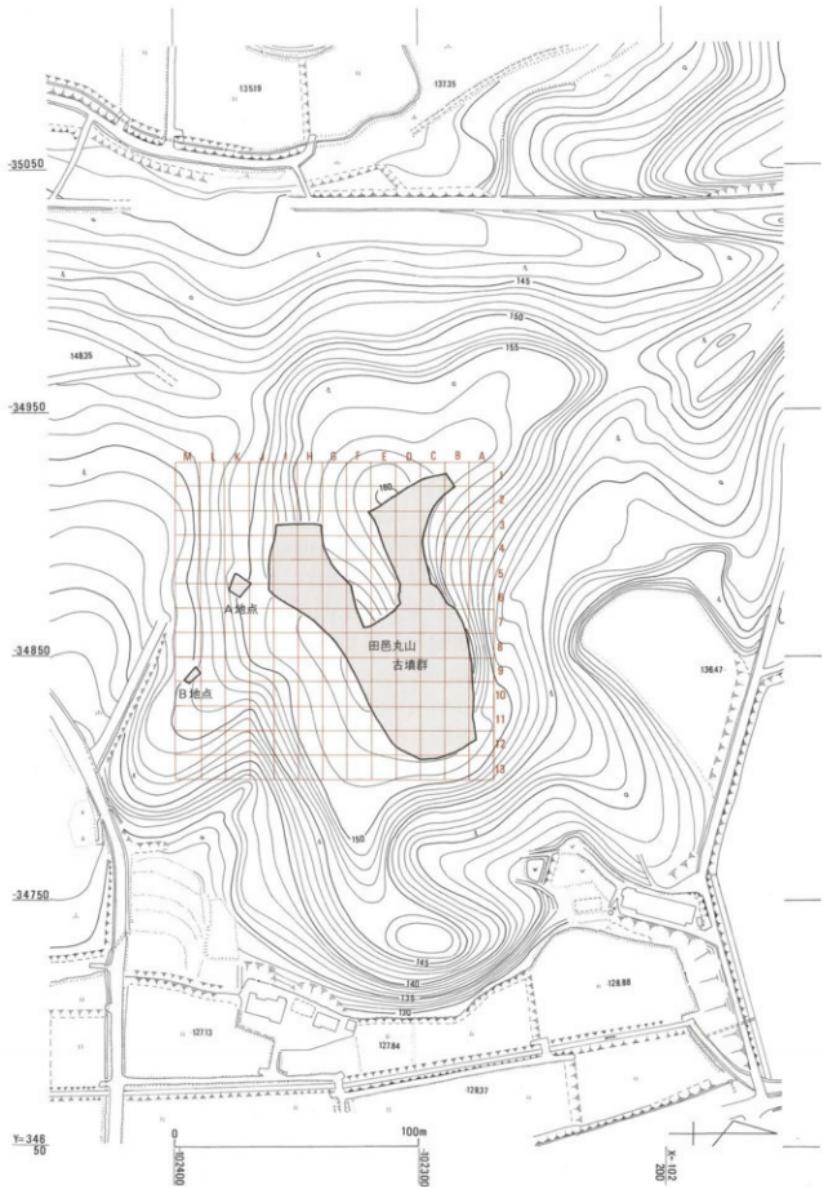
（註1）土居 徹「田邑丸山古墳群」『津山市文化財年報1』津山市教育委員会 1975

土居 徹「田邑丸山古墳群」岡山県史 考古資料 岡山県史編纂委員会 1986

（註2）調査を担当した今井充氏にご教示を得た。

（註3）鏡については今井充氏にご教示をいただき、写真を提供していただいた。

今井 充「原始社会から古代国家の成立へ」『津山市史 第1巻原始・古代』津山市史編さん委員会 1972



第5図 田邑丸山古墳群・遺跡周辺地形図及びグリッド配置図 (S = 1 : 2000)

IV 調査の記録

1. 田邑丸山古墳群

(1) 1号墳 (第8~13図)

1号墳については、墳丘を十字に切る形でトレントを設定し、墳端については各トレントの間に補足的に設定した。各トレントは1~9の番号をつけている。また、従来知られていた埋葬施設についても再度調査をおこなった。

a. 墳形及び規模 (第8・9図)

トレント1・2

このトレントは埋葬施設に直交する形で墳丘の構築や墳丘端などを確認するために設定した。第9図に上層図を載せている。いずれのトレントも傾斜変換点があり墳端を確認した。また墳丘は大部分は自然地形を利用し、標高159mあたりより上部は盛土によって構築している。トレント1ではこの158.5~159mあたりが長さ4m程平らになってテラスのようになっている。墳丘測量図を見ても、この辺りがやや幅広の等高線となっているが、逆に北側には見られないため2段築成とするにはやや難がある。ただこの南西部分にのみテラスが存在している可能性は十分考えられる。また、盛土は1~2層が基本で、トレント2の部分のみ互層である。この事はこの部分がかなり急な傾斜であるため、比較的丁寧に構築しているものと推測される。埋葬施設は2基検出した。その内第1主体は過去に掘られておりかなり混亂を受けている。この埋葬施設は竪穴式石棺で、これの掘り方を求めたが、奥ごめの石や粘土がありすべてを検出できていない。後で述べるがトレント4では地山面を掘りこんだ掘り方が検出されているため、今回は確認できなかったが、この盛土の下に掘り方は存在しているものと推測される。また、第2主体は木棺で床面が第1主体に比べてかなり上にある。そのためこの盛土内に掘り方が存在するはずであるが、精査したにもかかわらず検出されていない。そのため、この第2主体は盛土構築時に作られているものと推測される。

トレント3・4

第1主体に平行する形で設定した。トレント1では墳端を検出したが、トレント3では墳丘が崩れしており、検出できなかった。盛土はトレント1・2と同様だが、1~2層で互層の部分は見られない。トレント3では検出していないが、4では第1主体の掘り方を検出している。掘り方は地山面を掘りこんでいる。

トレント5

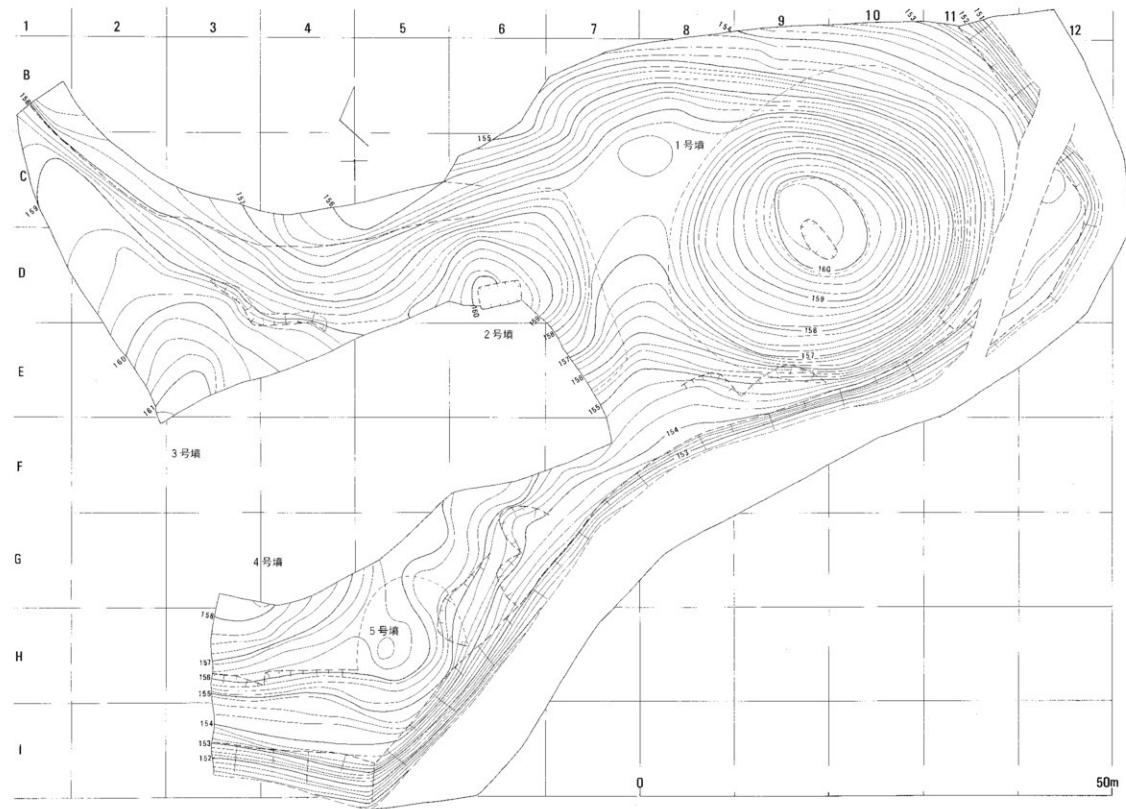
トレント1と2の間に設定した。この部分はテラス状になっているためこれの確認をおこなった。墳端部分はかなり明瞭に掘り込まれ墳外の地山面が平らになっているため墳端はたやすく確認できた。また、テラス部分はトレント1同様で平らになっているが、これが当時のものか後世に整形されたものかは明瞭でない。

トレント6

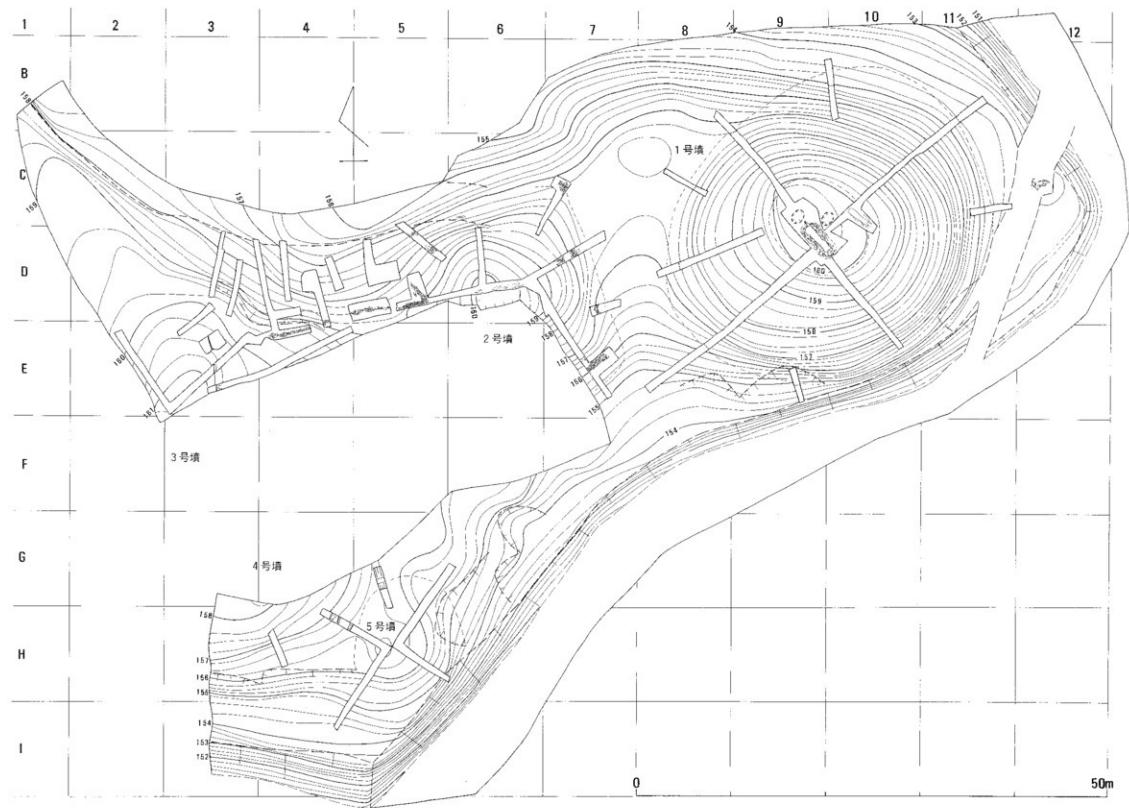
トレント4の西側に若干の高まりがあるのでこれとの関係を確認するために設定した。この部分は墳丘を整形するにあたり西側の丘陵と切断する幅5m程の溝状を呈している。

トレント7

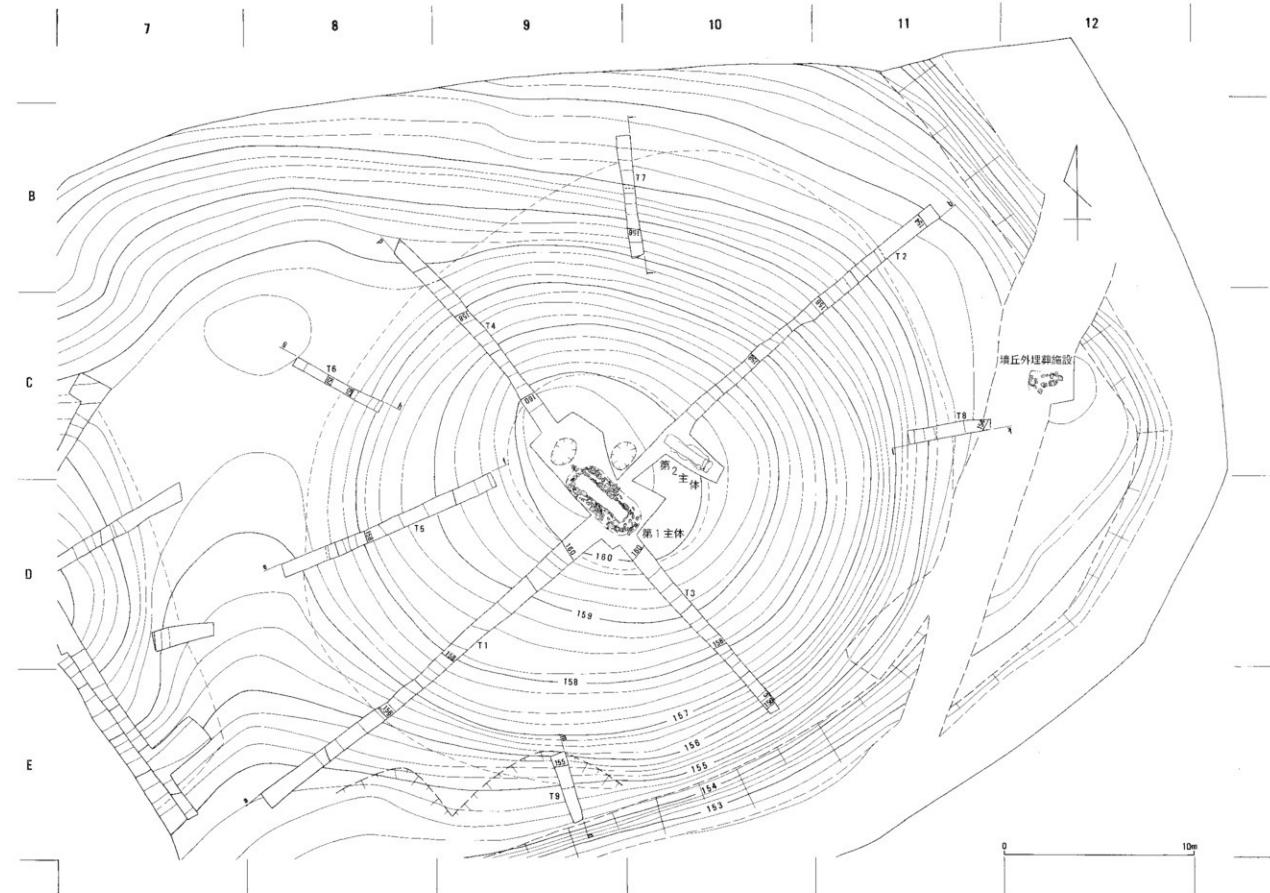
トレント2・4の間に墳端を確認するために設定した。若干の傾斜変換点があり、墳端は確認できた。



第6図 田舎丸山占須群調査前堤丘測量図 ($S = 1 : 400$)

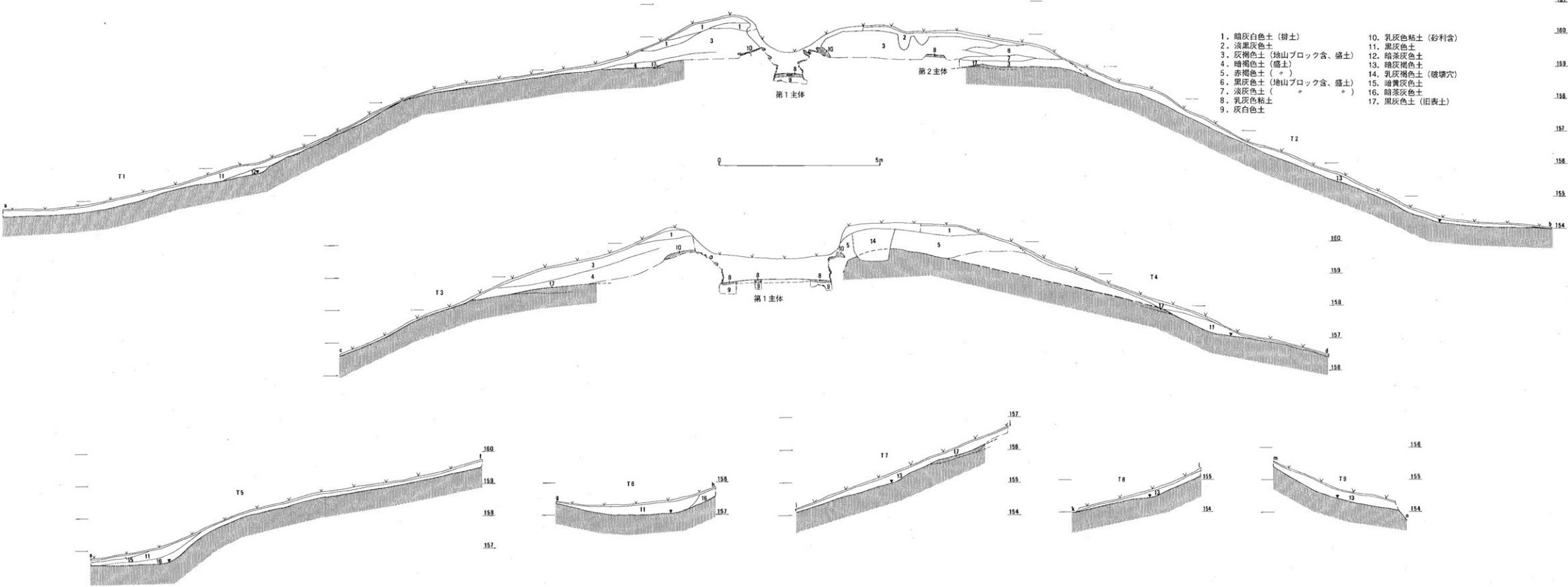


第7図 田辺丸山古墳群トレンチ配置図 ($S = 1 : 400$)

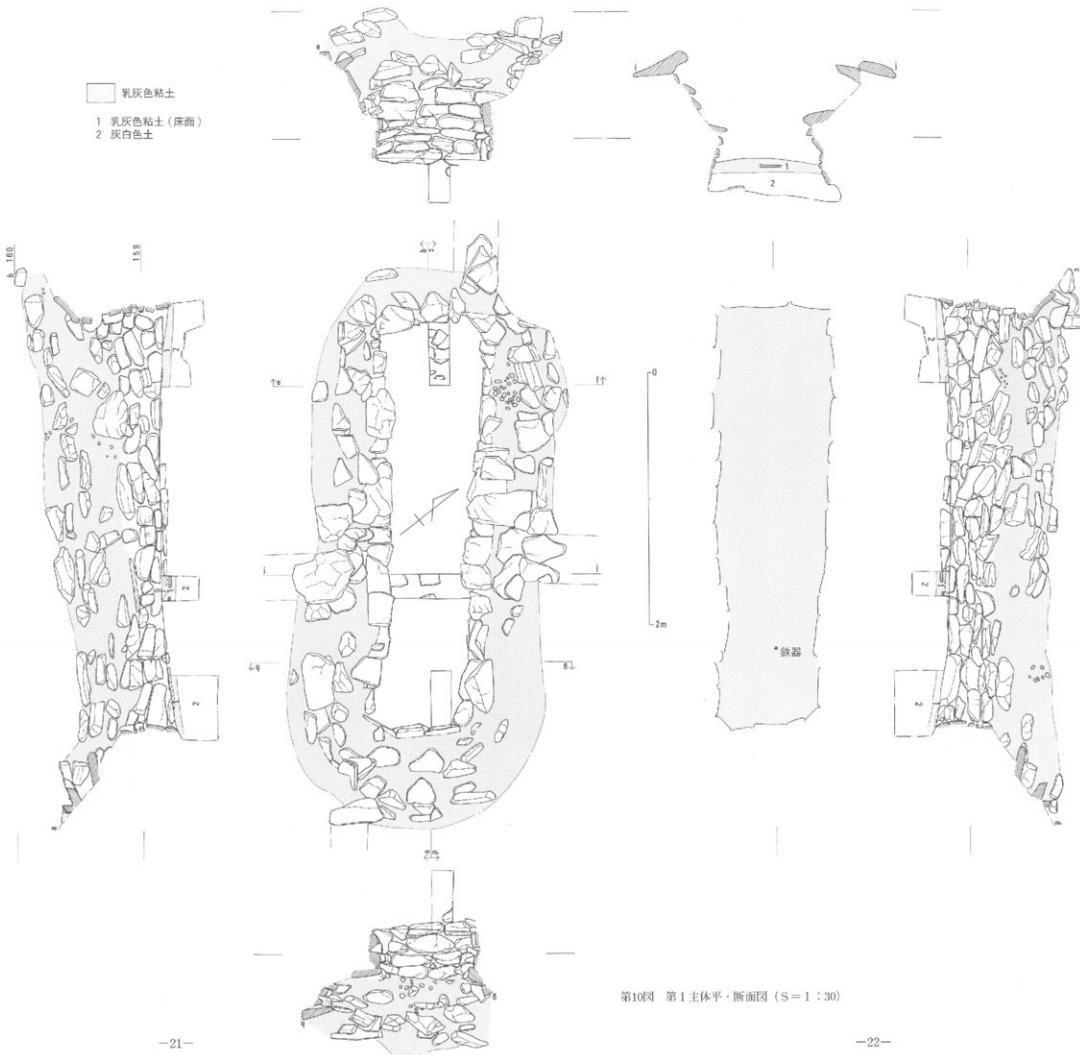


第8図 田舎丸山1号墳トレンチ配置図 ($S = 1 : 200$)

1. 鳞灰白色土(耕土)
2. 淡黑灰色土
3. 灰褐色土(地山ブロック含、盛土)
4. 増褐色土(盛土)
5. 赤褐色土()
6. 黑灰色土(地山ブロック含、盛土)
7. 淡灰色土()
8. 乳灰色粘土
9. 灰白色土
10. 乳灰白色土(砂利含)
11. 黑灰色土
12. 鳞灰白色土
13. 增灰白色土
14. 乳灰白色土(破壊穴)
15. 增黄白色土
16. 鳞茶灰白色土
17. 黑灰色土(旧表土)



第9図 田代丸山1号墳塚丘上層図 (S=1:80)



第10图 第1主体平·断面图 ($S=1:30$)

トレンチ 8

トレンチ 2・3 の間に墳端を確認するために設定した。傾斜変換点があり、墳端は確認できた。

トレンチ 9

トレンチ 1・3 の間に墳端を確認するために設定した。墳丘自体かなり崩れていたが、墳端は確認できた。

以上より、ほとんどのトレンチで墳端は確認できた。直径は30~36mの楕円形に近い墳形である。

トレンチ 1・5 で確認したテラス状の造構については、本墳に伴うものであれば南西側にのみ部分的に存在する。ただ、このテラス面より上の盛土である事からすれば、このテラス面は墳丘構築時の整形面で段築のテラスでは無い可能性が大きい。高さは、西側で3.2m、東側で最大6mを測る。また、外表施設としての葺石は無く、埴輪や土師器壺なども出土していない。墳頂平坦面は長径11m、短径9m程の楕円形であり、墳丘の主軸とは直交関係にある。

b. 埋葬施設（第10~12図）

埋葬施設として墳頂部に2基、墳丘外に1基検出した。墳頂部の2基は墳頂平坦面の中心からやや南東側にいずれ、両者の主軸がほぼ平行して存在するものの、北側の第2主体の方が、第1主体よりやや東南側に位置している。そのため、この第2主体の北西側にかなり空間ができているため、今回は確認していないが、この部分に他の埋葬施設が存在する可能性もある。

以下、検出した各埋葬施設について述べる。

第1主体（第10図）

墳頂部の中心からやや南西側に存在する竪穴式石槨である。墳丘の所でも述べたが、掘り方は地山面を掘り込んでいるようであるが、部分的にしか検出できていない。そのため掘り方の規模などは不明である。本埋葬施設は大正時代に掘られ、昭和40年に調査（第4図参照）されているため、蓋石もすでに無くなっているが、遺物はほとんど残っていないものと考えられている。そのため石槨内の掛土を除去し、再度石槨内の清掃と床面の下部構造や裏ごめの状況を可能な限り調査した。まず床面の下部構造は地山面まで検出していないので詳細は不明だが、床面を形成するにあたっては、灰白色土（第10図2）で埋め、その上に厚さ12cm程の乳灰色粘土（同1）をのせている。この両者には小さな石材が含まれているが、特に下層の石材が排水施設であったかは明瞭でない。床面は中央部分が緩やかに高い逆U字状である。また、各壁の石を2段程積んだ後にこの床面を作っている。蓋石もすでに無く多くの石が崩れ落ちはいるが、西小口は比較的石の積み方が明瞭にわかる。第4図が昭和40年当時の状況であるが、今回の実測図と比べても若干軽落石があるぐらいで、さほど変わっていない。石は割り石状の石を中心に、長辺の側面が見えるように積んだ小口積みであるが、中に川石の円礫が含まれている箇所もある。そのため、見た目にはやや隙間の多い乱雜な積み方である。基礎には比較的大きい石2個を使用している。現状で6~7段、高さ0.55~0.6m程に積まれ、最上段の幅はほぼそろっている。この事からこの上に蓋石がのっていた可能性が考えられる。また、床面の幅は0.9mを測り、蓋石部分の裏ごめには玉砂利を混ぜた粘土が使用されている。

東小口も同様の積み方であるが、基礎の石は比較的小さい石を使用し現状で4段、高さ0.4m程しか残っていない。床面の幅は0.82mで西小口と比べるとやや狭い。

北側壁も積み方は基本的には小口と同様であり、12個の石で基礎とし、4~5段程しか残っておらず、かなりが崩れているようである。

南側壁も基本的には小口と同様で12個の石で基礎とし、残りは悪く3~4段しか残っていない。西小口側の石の表面に赤色顔料が部分的に塗布されている箇所が確認できた。

また蓋石はすべて無くなっているが、それに付随していたと思われるかなり長い石が両側壁の中央付近で出土している。第10図の断面図i~jによれば、内部の高さが西小口のように約7段、0.6m程度であったとすると、その上の蓋石を置き、さらにその上を覆っていた石であった可能性が考えられる。使用している石材は、確認できたもので凝灰岩質のものと緑色片岩質がある。前者は上部の蓋石付近に多用されている。後者は数としては少なく部分的に使用されている。その他側壁などほんどの石が石材名は明瞭でなく、円錐を途中に使用するなど、隙間が多くやや乱雑に積まれているようである。裏ごめの状況は玉砂利を含む粘土で少なくとも蓋石より上は目張りされていたものと推測される。

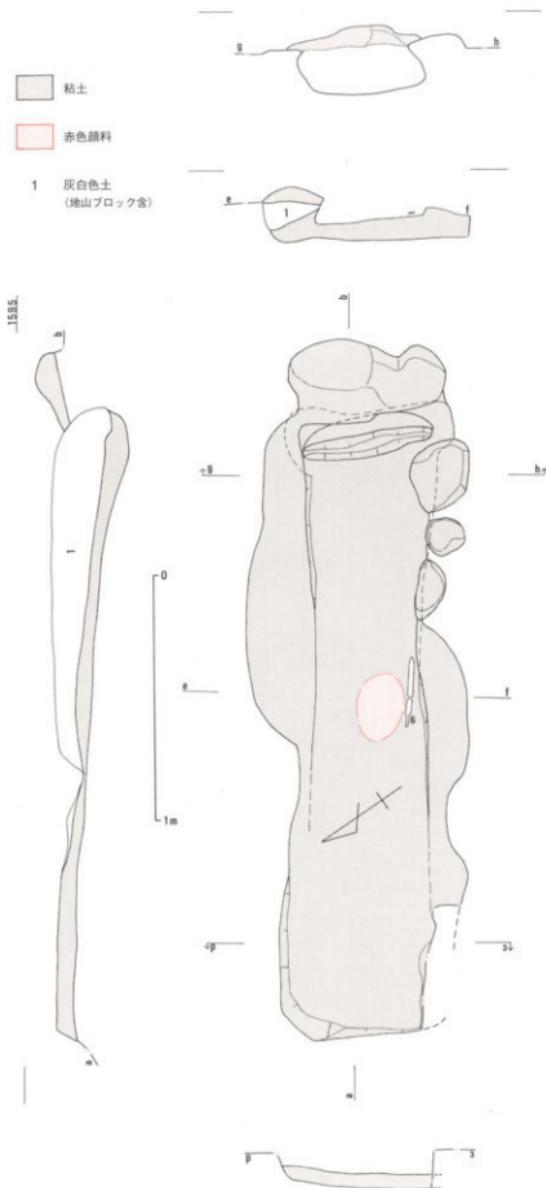
今回の調査で副葬品はほとんど残っていないかったが、床面東側から鉄器（第10図▲、第13図3）が1点出土した。また、排土から鉄器片が2点（同4・5）出土した。

本埋葬施設は内法で全長3.3m、東小口幅0.9m、中央幅0.88m、西小口幅0.82m、高さは西小口部分で最大0.6mを測り、西小口側の幅が若干広い事から、頭位は西側と考えられる。主軸方向はN-50°~Wである。また、排土の粘土に赤色顔料の付着があり、分析の結果ベンガラである（第V章参照）。

なお、本埋葬施設の蓋石は周辺の水田の側溝の蓋に使用されていたとの事であり、確認した所それらしき石（長さ0.95~1.6m、幅0.27~0.5m、厚さ10~20cm、凝灰岩質）が4枚現存する。

第2主体（第11図）

第1主体の北東に平行に作られているが中心はやや南にずれている。トレンチ2の検出時に新たに発見された埋葬施設である。トレンチで幅0.6m程の上面が平らな粘土の塊がみつかり、土層観察でもこれの掘り方は見つからず、レベル的にも第1主体よりはかなり上にあるため、最初は粘土塊の上部構造と考えた。その後南側に拡張して埋葬施設の全容が明らかとなったが、この粘土は上部ではなく床面である事が判明した。しかもこの床面は東に向かって傾斜している。この埋葬施設の掘り方については、埴丘土層の所でも述べたが掘り方は存在しない。つまり盛土構築時に同時に築かれた公算が大きい。本埋葬施設は粘土塊では無く、粘土床をもつ施設で部分的に小口や側壁に粘土塊を使用している。粘土床は全長2.53m、内法長2.35m、東小口幅54cm、西小口幅現存55cmを測り、床は平らである。そのため内部には組み合わせ式の木棺が入っていたものと考えられる。西小口側には何ら施設は無いが、東小口側は幅10cm程の小さな高まりがありその奥が、大きくえぐれる形となっている。第11図の断面図a~bでは上部の粘土塊が大きく迫り出す形となっているが、構造的に見てもこの粘土塊は木棺が朽ちるとともに若干北へ動いたものと考えられる。そのため本来は小口の掘り込み部分に木棺の小口材が立って、その外側を補強していたのがこの粘土塊と推測される。ただ同様な構造は西小口には見られない。また、床面が東小口に向かって傾斜しているのは、盛土内に構築されている本埋葬施設に土圧がかかるために東側が沈下したものと解釈したい。また、他の粘土も断面図e~fからも解るように床面とは一体となるものでは無く、別個体のものである。つまり床面以外は粘土の塊である。この粘土塊は東小口周辺を中心に置かれ西小口側には存在しない。この埋葬施設を復元すると、盛土構築時に厚さ5~12cm程の粘土で平らな床面を作り、特に東小口側はくぼむ形にして、そこに組み合わせ式の木棺を置く。この場合東小口の材のみ穴に差し込む形となる。そして木棺の周間に粘土の塊を置いて補強している。ただ現状では西小口側には置いていない。副葬品は床面中央南寄りに鉄剣1振りが出土したのみである。また、その北側周辺に赤色顔料が塗布されている。また、この鉄剣



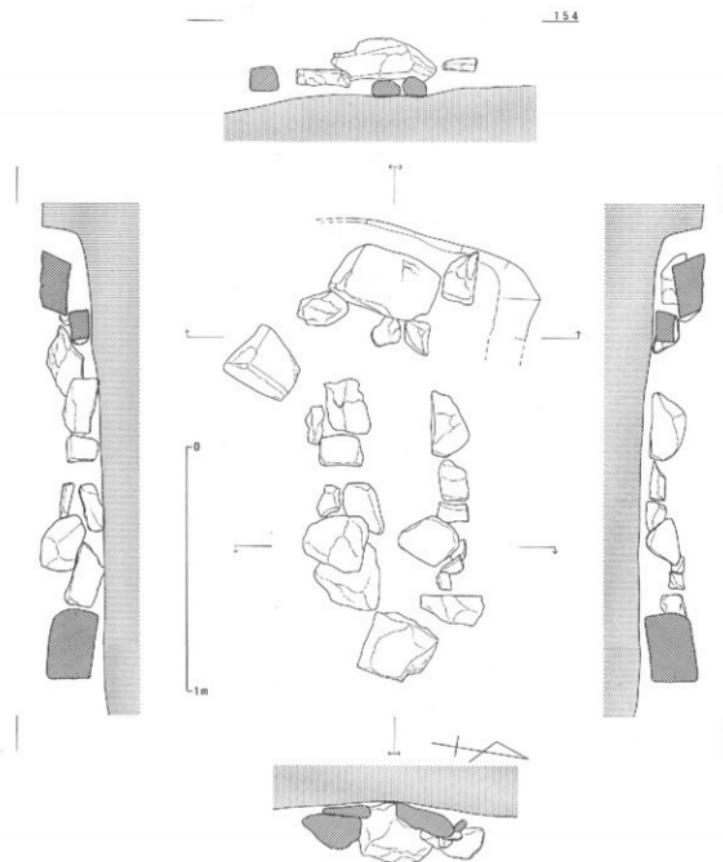
第11図 第2主体平・断面図 ($S = 1 : 20$)

は中央で折れており、これが最初から折れていたのか土圧によって埋葬施設の東側が沈む段階に折れたのかは明瞭でない。

以上から頭位を推測すれば、鉄剣の方向などから西側と推測されるが、東側のように粘土塊を使用していないのがやや気掛かりである。なお、赤色顔料は分析の結果未である（第V章参照）。

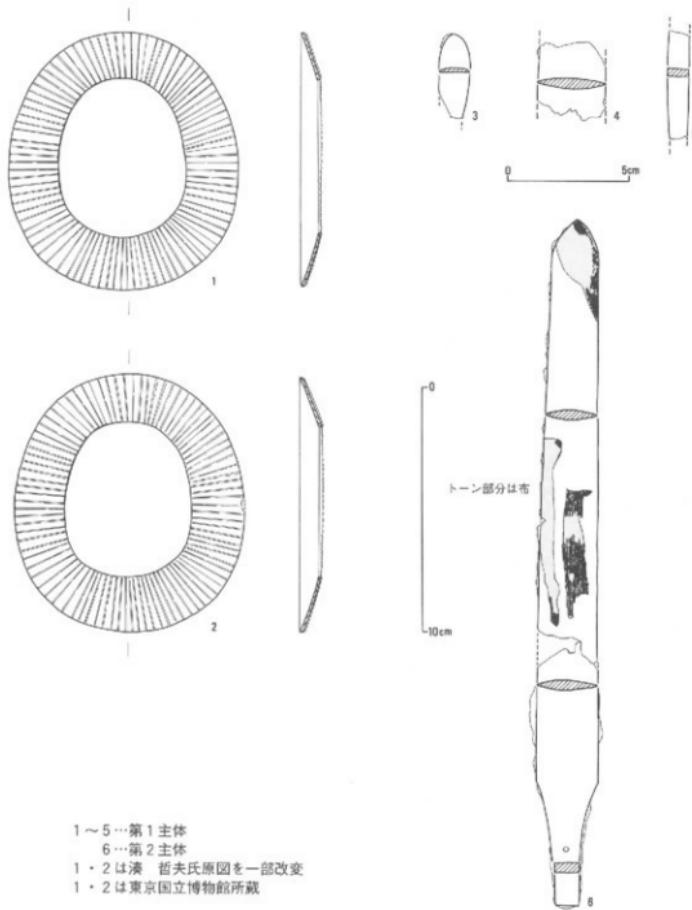
墳丘外埋葬施設（第12図）

トレンチ8の東、重機によって削平されている箇所に、やや大きめの石が存在するため調査区を設定した。精査の結果、両小口と側壁と思われる石の並びを検出し、とりあえず埋葬施設とした。これら石の中には重機により若干動いているものもある。掘り方は西側でのみ検出し地山面を掘り込んだ



第12図 墳丘外埋葬施設平・断面図 ($S = 1 : 20$)

落ち込みがある。西小口は大きめの石が1個あるが、断面図を見ると倒れてやや浮いた状態になっている。東小口も大きめの石が1個存在する。北側壁は大小8個の石が存在し、西側3個の石は内側の列がそろっている。南側壁は東側の2個の石が2段に積まれている。これが正しいとすると側壁は2段以上に積まれていた可能性があり、小形の竪穴式石槨のようなものであった可能性も指摘できる。また、西小口側の床面には2個の石がハの字に置かれ枕石のようでもある。現状での内法は全長1.2m、中央部で幅0.3mを測り主軸方向は東西に近い。内部からの副葬品は皆無である。なお、本施設は1号墳の墳丘外にあり出土遺物も無いため、1号墳に伴うものは明瞭でない。



第13図 1号墳出土遺物 (S=1:2)

c. 出土遺物

出土遺物として第1主体と第2主体から以下のものが出土している。

埋葬施設	大正時代	今回の調査
第1主体	鏡1、車輪石形銅器2、鉄剣1、鉄斧2	ヤリガンナ片1、鉄剣片1、鉄器片1
第2主体		鉄剣1

第1主体（第13図、図版30～33）

本埋葬施設は大正時代に掘られ鏡1、車輪石形銅器2、鉄剣1、鉄斧2が出土し、現物は東京国立博物館で所蔵されている。以上の遺物は実見していないので詳細は不明だが、現在までの知見をまとめる。

鏡（図版30）は乳文鏡で直径9.8cmを測り、表面の摩耗がいちじるしい。孔の数など詳細は明瞭でない。

車輪石形銅器は2点（第13図1・2、図版31）あり同范である。1の外形は長径10.6cm、短径9.4cm、孔は長径6.5cm、短径5.2cmの卵形で、2もほぼ同形で外形の長径10.6cm、短径9.4cm、孔の長径6.4cm、短径5.2cmを測る。環状部の幅は1.9～2.2cmで断面の厚さは1mm程で非常に薄い。2は外周部が一部欠損する。1・2とも環状部の外面には放射状に91条の突線が鋲出されている。

鉄斧は2点あり1点は短間形（図版32-2）で、もう1点は袋状鉄斧（同-1）である。いずれも數値など詳細は明瞭でない。

鉄剣は1点（図版32-3）あるが、切先部分が折れている。数値など詳細は明瞭でない。

今回の調査で鉄器片3点が出土している。その内1点（第13図3）は床面から出土し（第10図▲）、他の2点（同4・5）は耕上内からである。

3は断面を見る限りではヤリガンナの刃部片と考えられる。現長3.5cmを測る。

4は鉄剣片である。現状で長さ3.2cm、幅2.8cm、厚さ0.4cmを測る。

5は断面長方形の鉄器片で、ヤリガンナなどの茎部分と考えられる。

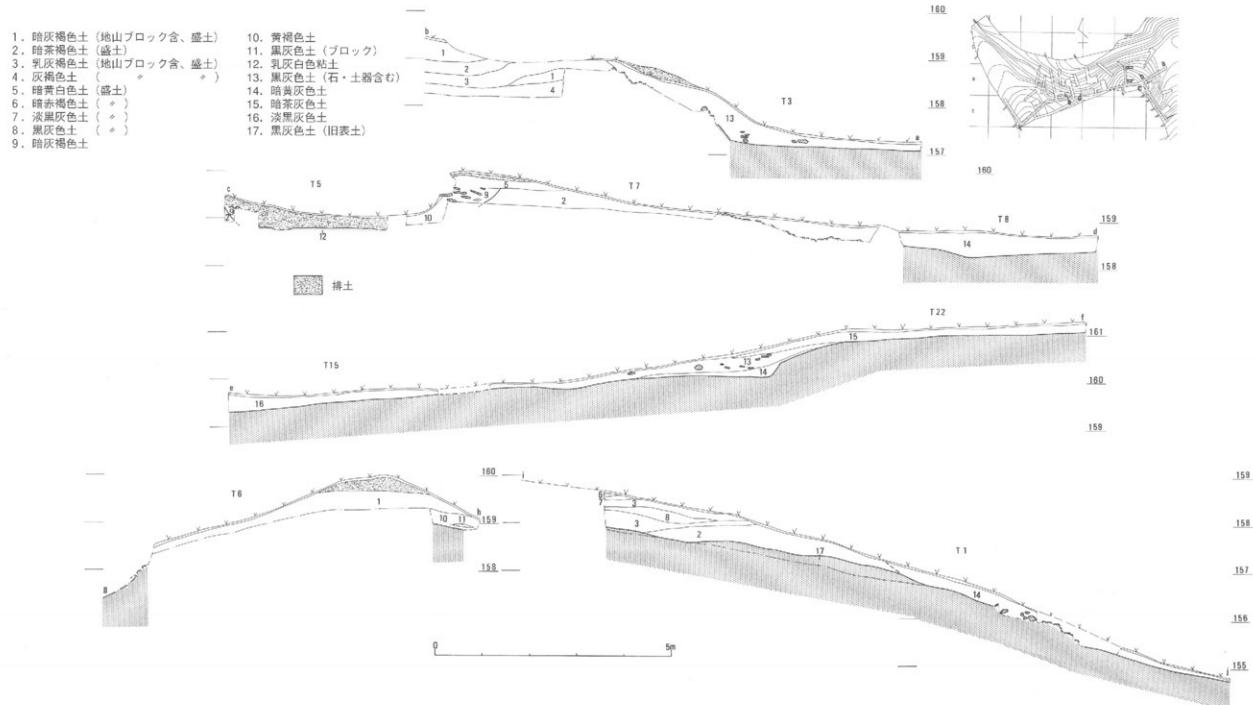
第2主体（第13図）

副葬品は鉄剣1振りのみである。

6は全長28cm、最大幅2.5cm、厚さ0.5cmで、刃部の表面には布の痕跡が切っ先と中央付近に部分的に残っている。そのため木製の鞘には入っておらず、布によって巻かれていたものと推測される。鞘の部分は角がなく内湾状に切れ込んでいる。また茎部分は刃部に比べ短く、この部分には木質や布の痕跡は見られない。中央付近に目釘の穴が1カ所存在する。



第14図 田邑丸山2号填トレンチ配置図 (S = 1 : 200)



第15図 田邑丸山2号墳墳丘土層図 (S = 1 : 80)

(2) 2号墳

2号墳は從来円墳、さらに西側にある高まりも3号墳として考えられていた。また、いずれも未買収地があるため全面の調査ができていない。そのため可能な限り各古墳にトレンチをいれた。まず2号墳についてはトレンチ1・3・6・7、3号墳についてはトレンチ22・23を入れ、墳端などを確認して調査を終了する予定であった。しかし、トレンチ7でくびれ部らしきものが出土したため、さらに西側にトレンチを拡張した。また墳形が円で無く方の可能性がでたため、トレンチ2・4・9なども設定した。さらに、前方後方墳の可能性があるため前方部とおぼしき西側にもトレンチを数箇所いた。埋葬施設についてもかなり大きい破壊穴が存在し、從来の知見から大規模に破壊されていると考えられていたので、可能な限りトレンチをいれ内部の状況を確認した。

a. 墳形及び規模 (第14～15図)

墳形及び規模などを確認するために墳丘に十字のトレンチをいれた。第15図に土肩岡がある。

トレンチ3(a-b)で墳丘の東端を確認した。墳端部分には大きめの石を立てて立石風にしている。この上にも続いて何段か石が葺かれている。さらに空白の部分がありさらに小さな石が葺かれている。この空白の部分がテラス状になっているかは、断ち割っていないため明瞭でないが、両者が上段と下段の葺石であった可能性が考えられる。また、墳丘の大部分が盛土によっている。地山面まで掘り下げていないため明瞭でないが、少なくとも4～5層による盛土で丁寧に作られているようである。

トレンチ1(i-j)は南端を確認した。トレンチ3同様葺石は存在したが、立石は見られない。また、156.7mあたりで若干のテラス面が存在する。その上には葺石らしきものは存在しない。このトレンチではかなりの転落石が存在したため本来は存在していた可能性もある。このテラス面より上の墳丘の大部分は、地山面の上に盛土をおこなっている。地山面には弥生土器を含む旧表土層(第15図17)が存在し、盛土は現状で6層である。いったん暗茶褐色土で平にした後に、その上に地山ブロックを含む互層で丁寧に構築している。

トレンチ6(g-h)は北端を確認したが、削平されていたため上段の葺石部分まで調査した。この下に下段の葺石が存在することは周辺の様相から解っている。この部分の盛土は現状で1層のみである。また、埋葬施設の埋土部分を検出したが掘り方は明瞭でない。また後で述べるがこの埋葬施設の掘り方は盛土内に存在する。

トレンチ7・8(e-d)はトレンチ7の部分でくびれ部らしきものが存在し、さらにトレンチ8でさらに統く事が判明した。また、埋葬施設の一部がこのトレンチにかかっている。ただ、この埋葬施設は昭和34～35年頃に盗掘されほとんどの石が持ち出されている。さらに未買収地との境界があり埋葬施設の一部分しか調査できていない。埋葬施設は竪穴式石槨で西小口部分の掘り方を検出した。盛土内から掘り込まれており、東小口の掘り方もかろうじて確認できた。詳細は埋葬施設の項で述べる。

トレンチ15・22(e-f)は前方部らしき部分の端を確認するために設定した。もともとトレンチ22は、西側の丘陵(旧3号墳)の墳端を求めるために設定したが、この丘陵は自然地形で盛土も無い。そのかわり、溝状の落ち込みが存在する。この落ち込みがトレンチ13・21でも検出し、ほぼ直線的に存在する。そのためこの溝が西側の丘陵を切削したもので、2号墳の前方部の溝と考えられる。この部分にも若干の石が見られるがいずれも転落石で明瞭な葺石ではない。

以上の結果を補足的に補うために、トレンチを各所にいれた。その結果、本墳はくびれ部の存在、墳端が直線的である事から前方後方墳と推測される。ただ未買収地があり半分しか調査していないの

で詳細は明瞭でないが本墳の規模など求めると全長40m、後方部長20×23m、同高さ1.5～3.5m程である。

b. 外表施設

外表施設として後方部（トレンチ1～4）、くびれ部（トレンチ7～10）、前方部側面（トレンチ11・12・15）、前方部前端（トレンチ13・21・22）にわけて説明する。

後方部（トレンチ1～4・9、第16・17図）

トレンチ3には立石が見られ、長さ16～35cm程の石を立てている。さらにその上に小さい石を葺いている。その上はやや空白の部分があり、また小さい石が幅1m程葺かれている。本墳の葺石が上下2段に葺かれている事は埴丘の所でも述べた。そのため両者がこの2段の葺石である可能性があるが、両者の間がテラスとなっていたかは明瞭でない。この下段の様に立石をもつものは他のトレンチではほとんど見られず、これら埴端ラインを結ぶと明確には直線とはならない。特にトレンチ2・3とをむすび、さらに1と結ぶと角が鈍角となって直角より広がってしまう。この事は埴端が直線的ではなく若干弧状を描いていた可能性とトレンチ1の埴端のコーナーの石が現状では転落してしまっている可能性を考えられる。さらにトレンチ4とむすぶとさらに直線的ではなくなり、かなり広がっている。このトレンチの右はほとんどが転落石ではあるが、土層（m-n）観察では、傾斜変換点がこの部分で見られる。そのためこの部分にコーナーがあるものと推測される。

トレンチ9では上下2段の葺石があり、特に上段の石は大きめの石を立てると言うよりは横に置く事によって基底石としている。この両者間が土層図（a-b）をみる限りでは明確にテラス状にはなっていない。この2段のラインを復元すると先のトレンチ3につながる。さらにくびれ部につなげる土段がトレンチ7・8のくびれ部につながるようである。

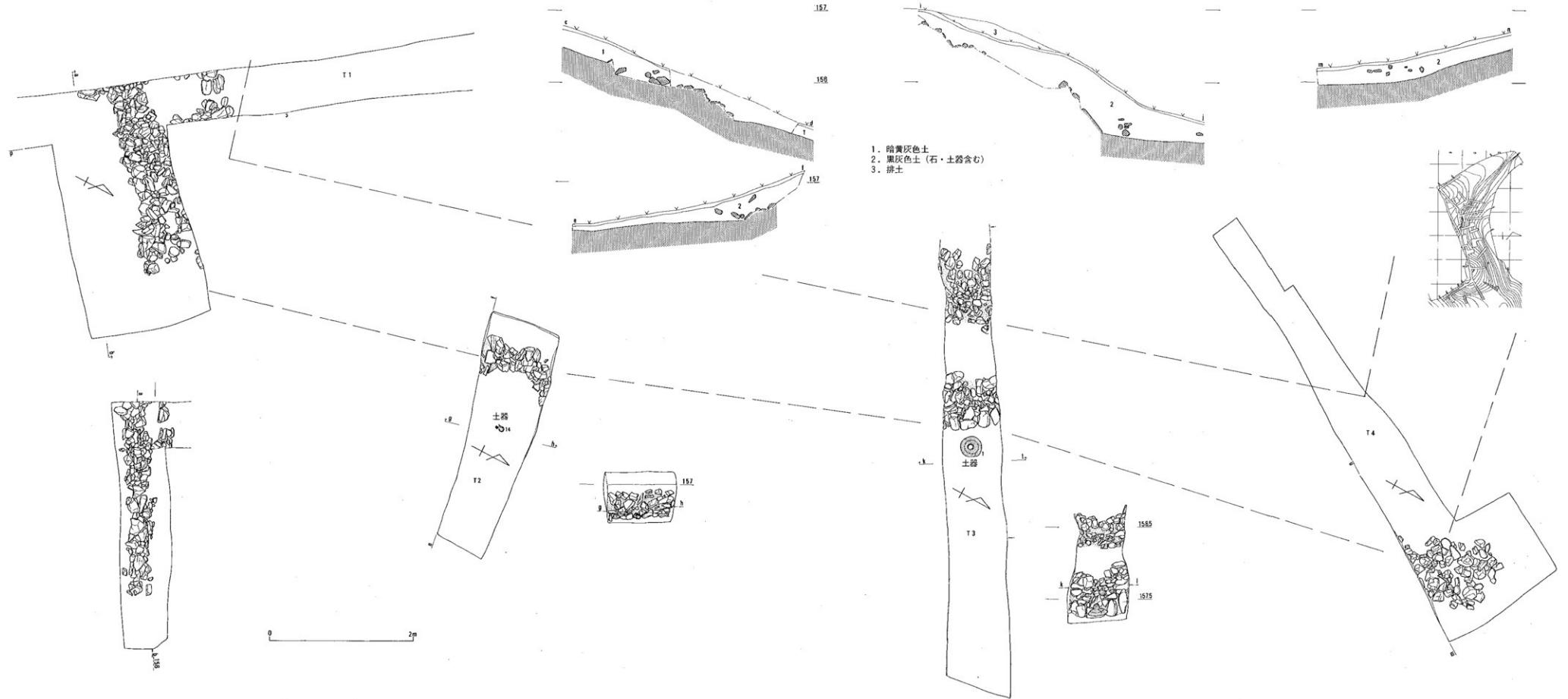
また各トレンチから上師器が出土している。特に3からは二重口縁の壺の口縁部が逆さまの状態で検出されている。その事から埴丘上に置かれたものが転落したと推測される。また、トレンチ2からは直口壺が埴端からやや離れて出土している。

くびれ部（トレンチ7～10、第17図）

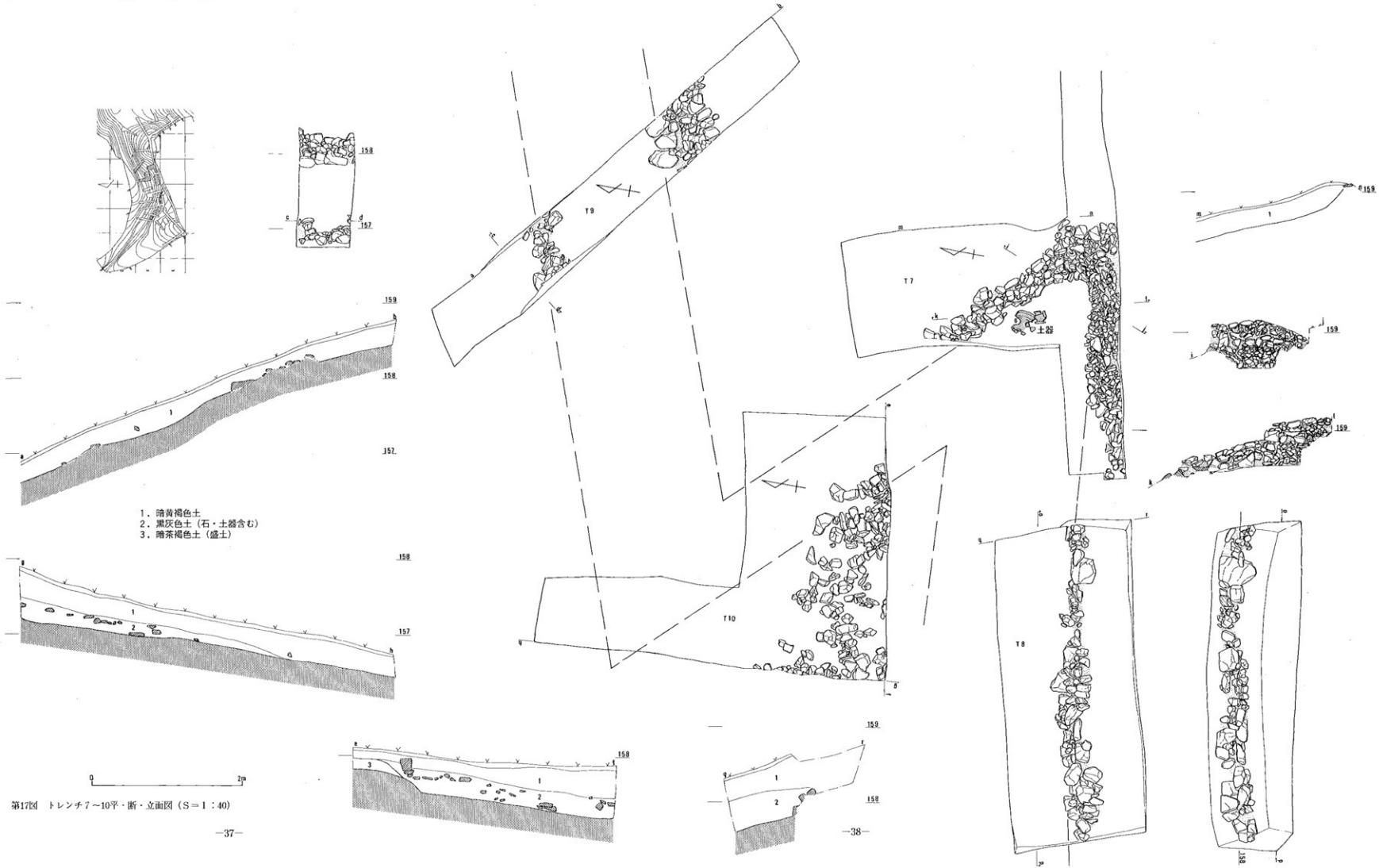
トレンチ7のくびれ部は非常に鋭角でありおよそ60°である。大部分の古墳は直角に近いが本墳のような形態は非常に珍しい。くびれ部の上段は大きい石を基底に置かず、比較的小さい石を細かく積んでいる。前方部はトレンチ8に続いているが、この部分では立石風に立てている箇所がある。特に東端の石はかなり大きいものである。この上段くびれ部の基底付近で上師器二重口縁の壺がまとまって出土している。トレンチ10はほとんどが転落石ではあるが土層面（e-f）の観察から、地山面を削り出している箇所があり、その上に若干の盛土を行っている。この辺りが下段のくびれ部付近と考えられる。そのため、下段の石はすでに転落しているものと推測される。西側の土層面（g-h）では明瞭な埴端部分は確認できない。ただ埋土に石を含んだ層（第17図？）が広範囲に見られる。

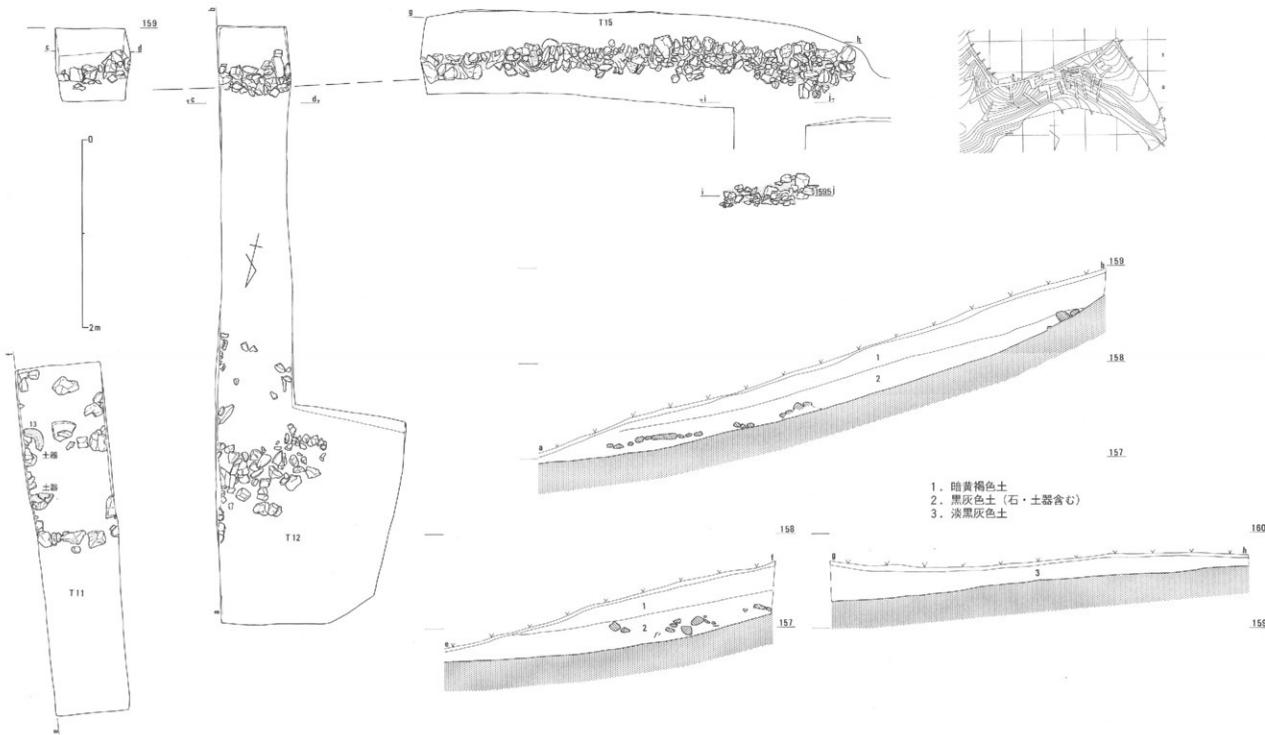
前方部側面（トレンチ11・12・15、第18図）

くびれ部の上段の葺石の続きがトレンチ12・15で検出された。12では下段の葺石は無いが若干の転落石が存在する。そのため上層面（a-b）の観察では下段の埴端らしき部分は明瞭でない。トレンチ11でも転落石や上師器が存在するものの、同様に土層面（e-f）の観察でも明瞭でない。そのため下段の葺石は明瞭に作られていないためにほとんどが転落したか、最初から省略されていたかのどちらかであろう。上段の葺石はトレンチ15の西端で消滅してしまい、それから西には存在しない。

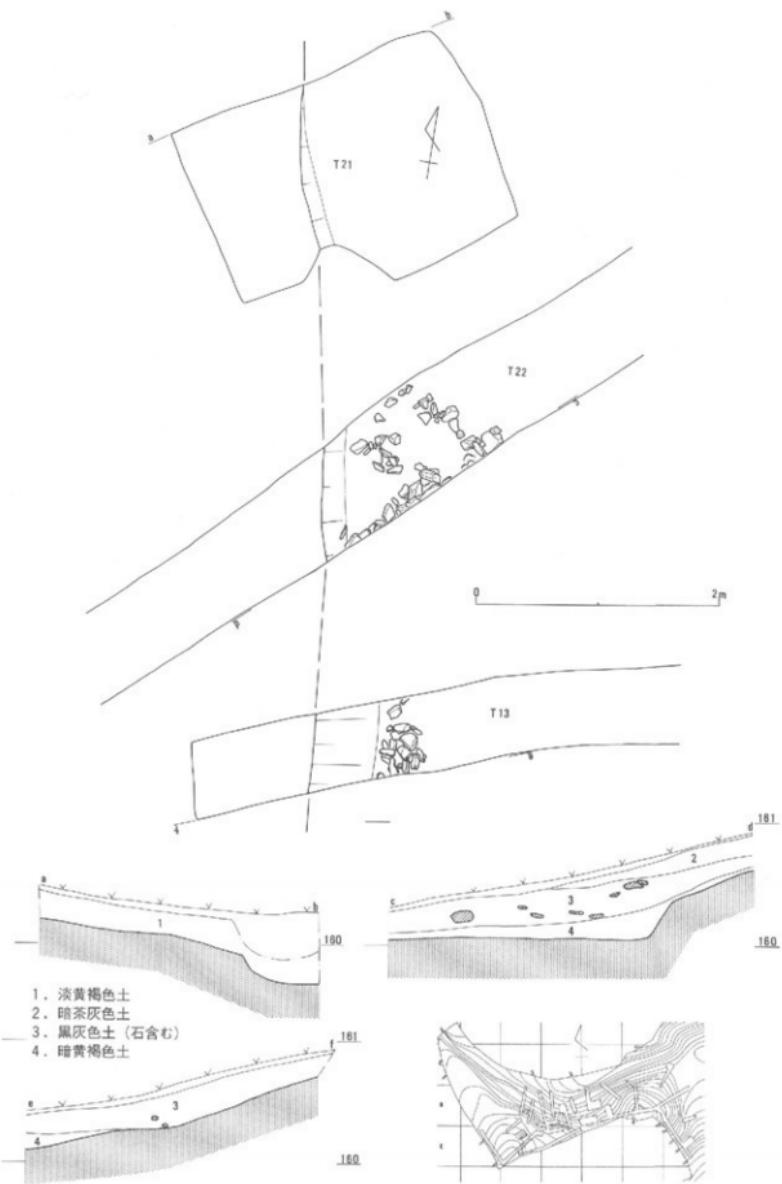


第16図 トレンチ1～4 平・断・立面図 (S=1:40)

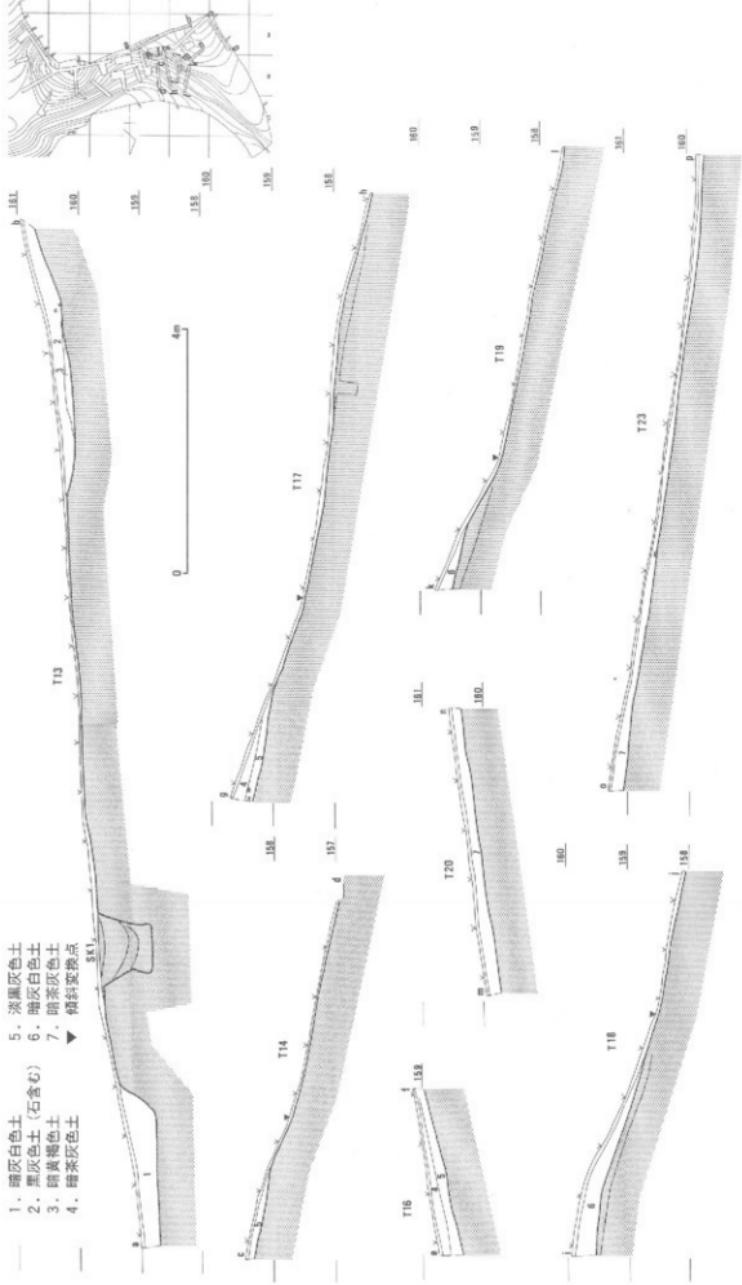




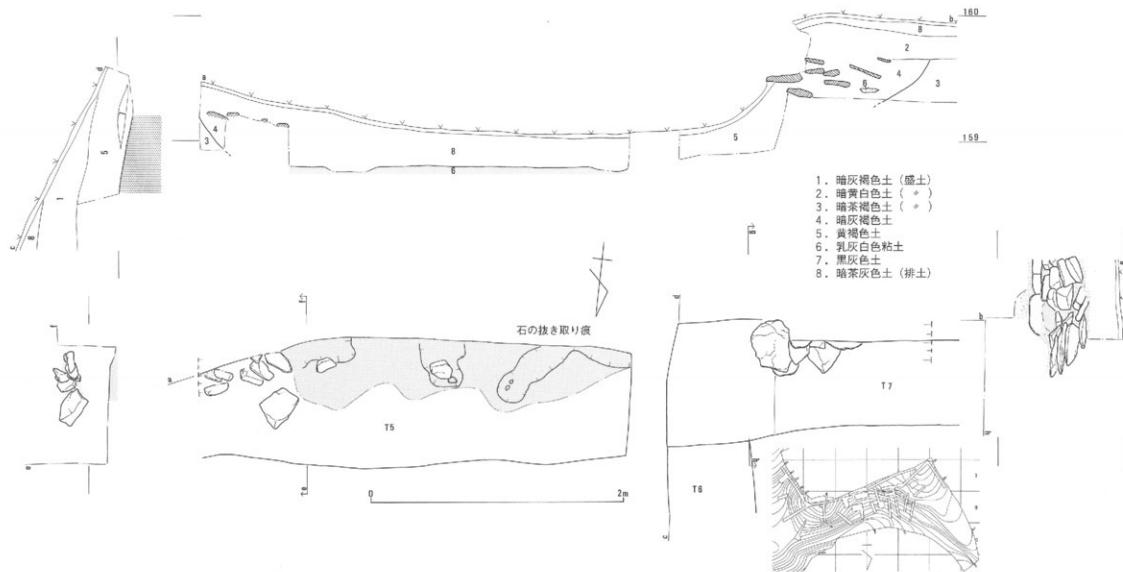
第18図 トレンチ11・12・15平・断・立面図 ($S = 1:40$)



第19図 トレンチ13・21・22平・断面図 ($S = 1 : 40$)



第20図 トレーナー13・14・16~20・23土層図 (S = 1 : 80)



第21図 トレンチ5（埋葬施設）平・断・立面図 ($S = 1 : 30$)

前方部前端（トレンチ13・21・22、第19図）

西側の丘陵と切断するための落ち込みが検出された。高い位置にあるトレンチ13や22では明瞭な落ち込みとなっているが、斜面に近い21ではそこで解消している。少なくとも20には落ち込みは存在しない。これら落ち込みはほぼ直線的に存在する。13・21には石が存在するが、埋土の中間辺りからの出土が多く転落石の可能性が大きい。この落ち込みを西側の丘陵のものとしてとらえる事も可能だが、前述のごとく西側の丘陵は盛上などは存在せず自然地形と判断した。そのためやや不自然ではあるがこの斜面の途中にある落ち込みが前方部前端部分と考える。その場合前方部の高さなどが問題となる。この事はトレンチ13の土層面（第20図a-b）から明らかとなる。これによると13の東側に落ち込みがありこれと前端の落ち込みの間が前方部と考えられる。ただ高さの面から言えば前端部の落ち込みからは0.2m程度でほとんどなく、下段の葺石面からはおよそ2m程度と推測される。

また、前方部の形態を知るために多くのトレンチを設定した。現地は竹林となっているためかなり搅乱を受けている。例えば第20図のトレンチ14・17-19ではかろうじて地山の傾斜変換点らしき部分が見られるが、この部分にはいっさい葺石らしき石は存在しない。そのため墻端はとらえにくい。土層面を見る限りでは、トレンチ18・19には旧表土面の上に盛土と考えられる堆積（第20図6）が見られ、これらが墻丘の一部と考えられる。これらを基に墻形を復元すると、葺石の下段ラインは少なくともやや開きぎみの形態となる。ただ前述のごとく葺石が存在しないため、省略され簡単な地山整形のみで構築されていたとすると、今回の調査では明確なラインを決める事はかなり難しい。そのため平野部に面している未買収地の部分の方が、明瞭に構築されている可能性が大きいので、詳細は今後の調査に期待したい。

c. 埋葬施設

従来から後方部の墳頂に埋葬施設の存在が知られ、盗掘された際に1面の鏡が出土した事が知られている。ただこれが一ヵ所から出土したものか、複数の埋葬施設から出土したものかは明瞭でない。未買収地内に掘り込まれた落ち込みが複数確認できる。また、昭和40年に1号墳の竪穴式石槨を清掃調査した際に、2号墳の調査も行なわれた。その結果、竪穴式石槨の石はほとんどが抜き取られており、出土遺物も無かったとの事である。また今回の調査ではそのほとんどが未買収地の範囲内であるため、その他の部分については調査を行っていない。そのため埋葬施設の正確な数などについては、今後の調査に期待したい。今回調査した埋葬施設は清掃調査されたものの一部で、墳頂部の中央に主軸に平行に存在する。ここではこれを第1主体と呼称する。

第1主体（第21図）

調査前の段階で長さ4.5m、深さ0.9m程度の大きな落ち込みが存在する。また、その西側には小口部分と思われる石積みがすでに露出していた。調査は未買収地との境界の関係もあり、幅1m程度のトレンチを入れた。その結果、竪穴式石槨の北壁部分にあたったがほとんどすべての石が取り除かれていた。床面には乳灰白色粘土が敷かれ、この中には玉砂利が多く含まれておりこれが床面に近い位置と推測される。また、この粘土内に石を抜き取った痕跡が數ヶ所見られる。また、西小口はかろうじて石積みの状況が観察できた。未買収地との関係もあり、小口部分すべての調査はしていないので全容は不明である。現状では、板石状の石などを小口積みにしているもののやや乱雑な積み方である。現状で5段程が確認できる。石の間に粘土を充填している箇所もある。石の積み方などは1号墳第1主体とよく似ている。また、東小口はほとんどが未買収地ではあるが、現状を見る限りではほとんどの石が

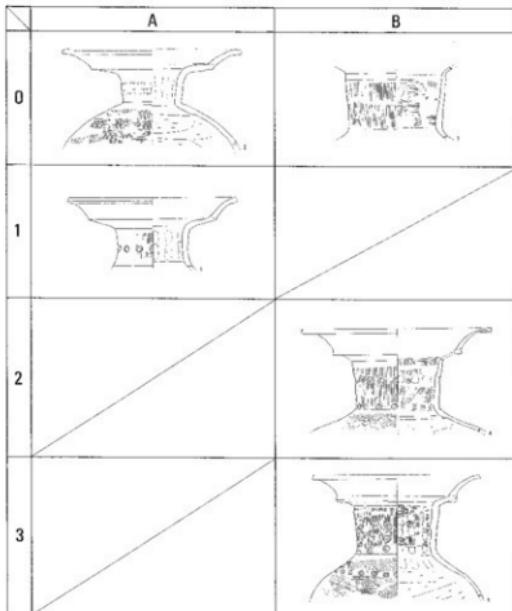
抜き取られている様である。現状では小さな石が散在している。これら石は裏ごめに使用されていたものであろう。土層観察（a-b）から掘り方の一部が確認できた。西小口は盛土内から掘り込まれ裏ごめにかなりの石材を使用している。東小口も部分的に確認したが、西小口同様盛土内から掘り込まれている。また、c-dラインでは明瞭な掘り方は検出できていない。この埋土（5）は掘り方内の埋土と考えられる。

以上から、埋葬施設の規模などを推測すれば、掘り方の長さおよそ5.8m以上、内法長3m以上と推測され、ほぼ1号墳の第1主体と同規模クラスである。内部及び排土からも副葬品は出土していない。
d. 出土遺物（第23図、図版30-34）

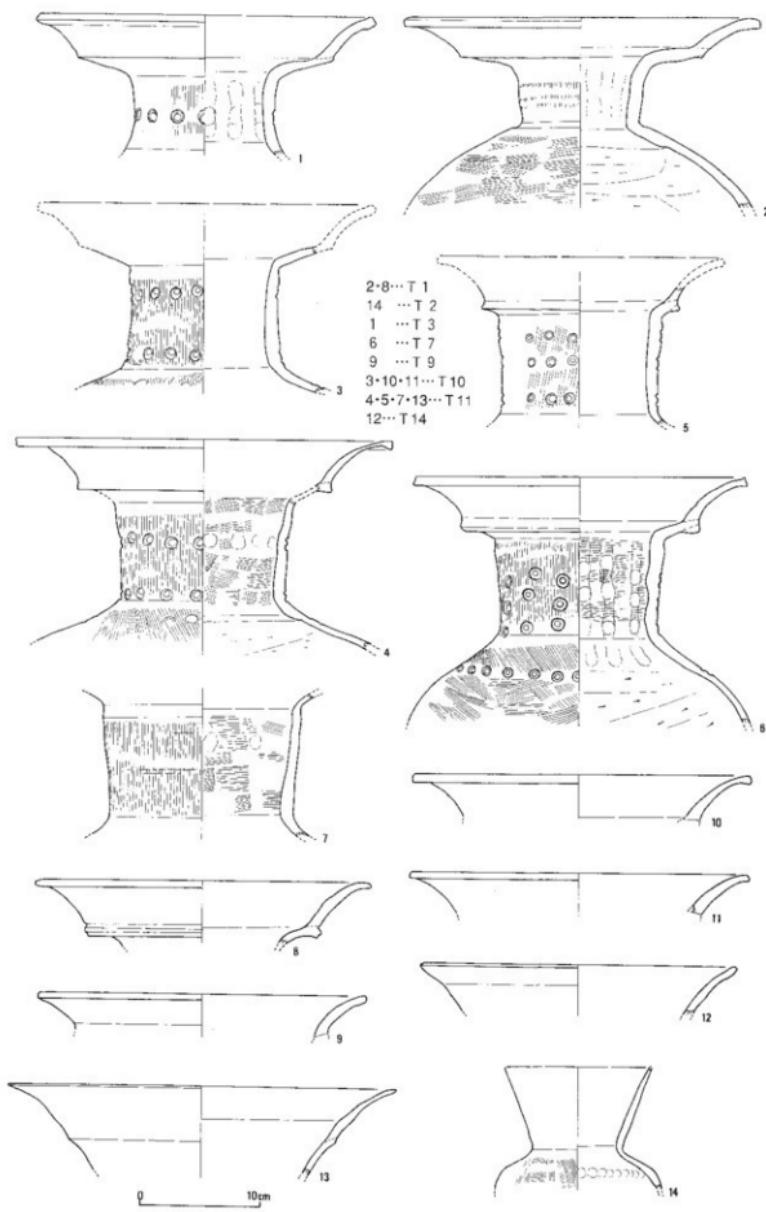
昭和34~35年に墳穴式石棺が破壊され4面の鏡が出土したとの事である。その内の1面は三角縁神獸鏡である事がわかっている。その他の3面の鏡の中に大形鏡が1面含まれていたとされるが、いずれも型式名、所在など詳細は不明である。

三角縁神獸鏡（図版34-1）は波文帯三神二獸博山か鏡と呼ばれるもので、径21.3cmを測り、内区には6個の縦形座乳をおき、その間に神像と獸像を交互に配し、その内の獸像の一つが山形状の博山炉となっている。銘文帯には複線の波文帯を描き、そこから縦にむかって櫛齒文、鉢巻文、複線波文、銘文帯が配されている。銘文帯付近が一部円形に欠損している。同型鏡は6面ある。

今回の調査では副葬品は出土していないが、埴丘斜面及び埴端付近から上師器の蓋が出土している。上師器の出土したトレンチは1~3、7、9~11、14である。およそ前方部前端~コーナー付近を除



第22図 竹管文等による二重II縁塗分類図



第23図 2号出土物 (S = 1 : 4)

いて出土している。土師器は二重口縁壺と直口壺の2種類があり前者が大半で後者は1点のみである。実測可能な土師器は第23図に載せている。二重口縁の壺は頸部～胴部にかけて竹管文を施すもの（1～3類）と施さないもの（0類）があり、施すもの1～3段とバリエーションがある。また、頸部の長さは短いもの（5cm程度、A類）と長いもの（8cm程度、B類）がある。以上から現状で5種類に分類できる（第22図）。また、胴部下半から底部については破片がほとんど無く形態は明瞭でない。

A 0類

第23図の2がそれでトレンチ1から出土している。頸部はやや開きぎみで、そこからほぼ水平に屈曲して口縁部は外反する。口縁端部は面をもつ。外面調整は頸部はタテハケ、胴部はヨコないしはナナメ方向のハケを施している。胴部内面はヘラケズリを施している。外面に竹管文による装飾は無い。

A 1類

1がそれで、トレンチ3から出土し、A 0類（2）と同様な作りである。頸部はほぼ垂直でそこからほぼ水平に屈曲して口縁部は外反する。口縁端部は面をもつ。頸部外面に竹管文が1段巡る。頸部外面の調整はタテハケ、内面はナデである。

B 0類

7がそれでトレンチ11から出土している。頸部のみであるので全容は明瞭でない。頸部はやや開きぎみでやや上方に屈曲している。口縁部の形態は不明である。頸部外面の調整はタテハケ、内面はヨコハケである。頸部外面に竹管文による装飾は無い。

B 2類

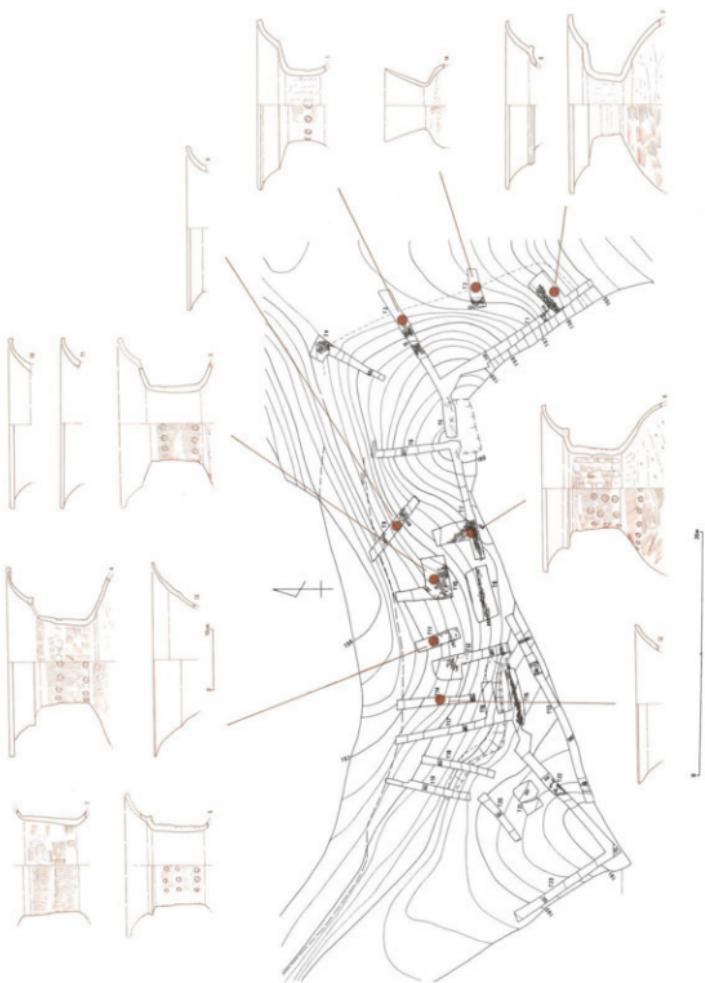
3・4がそれで3はトレンチ10から出土し口縁部が欠損し、4はトレンチ11から出土し破片からの推定復元である。頸部は垂直に近いものとやや開きぎみになるものがあり、そこから水平でなくやや上方に屈曲して口縁部が外反する。頸部の外面調整はタテハケ、胴部外面はややナナメ方向のハケである。頸部の内面はヨコハケを施しているものがあり、竹管文の際に内面を指でおさえている。胴部内面はヘラケズリである。頸部には竹管文が2段に巡り、胴部にも巡っているようである。

B 3類

5・6がそれではほぼ胴部より上の全容が解る。5はトレンチ11、6はトレンチ7から出土している。頸部は垂直かやや開きぎみで、そこからやや上方に屈曲し口縁部が外反する。この屈曲部の長さがA類に比べ短いようである。頸部外面にはタテハケ、胴部外面にはナナメ方向のハケ、頸部内面はヨコハケ、胴部内面にはヘラケズリが施されている。頸部から胴部にかけては肩が張らずややなで肩の形態である。頸部には3段に竹管文が巡り、胴部にも1段巡っている。

8～12は口縁部の破片で、推定復元しているため口縁径は正確な数値ではないがおよそ26～27.5cmである。8は屈曲部が短いためB類と考えられ、9～11は外反部分の接続面で剥落している。端部は面をもつものと丸くしあげるものとがある。13は非常に薄くラッパ状に開く形態からA・B類どちらでもなさそうで、全容は明瞭でない。14は直口壺で胴部下半は明瞭でない。トレンチ2から出土し口縁は逆ハの字にほぼ直線的に開き、胴部外面にはタテハケを施し、内面には指頭圧痕が見られる。

次にこれらの出土位置を示したのが第24図である。トレンチ調査のため、現状での把握ではあるが、前方部北側トレンチ11でB 0、B 2、B 3類が出土しA類は見られない。くびれ部でも、A類は見られずB 2、B 3類が出土している。特に上段の葺石の所である程度復元できるB 3類が出土しており元位置を保っているものと考えられる。後方部では、逆にB類は少なく、A類が多い。図示していな



第24図 土師器出土位置図 (埴丘…S = 1 : 400、土器…S = 1 : 8)

いが、トレンチ2でB類の破片が出土している。また、唯一トレンチ2で直口壺が出土している。これらの土器のほとんどが転落したもので元位置を示しているのは少なく、前述したくびれ部上段葺石部分が唯一である。そのため、即断はできないがこれら土器は埴丘上、少なくとも上段の葺石付近に置かれていたものと推測される。その場合A類は比較的後方部に使用されているようである。これら土器の違いが時期的なものか製作工人の違いによるものかは再考する必要がある。

(3) 5号墳

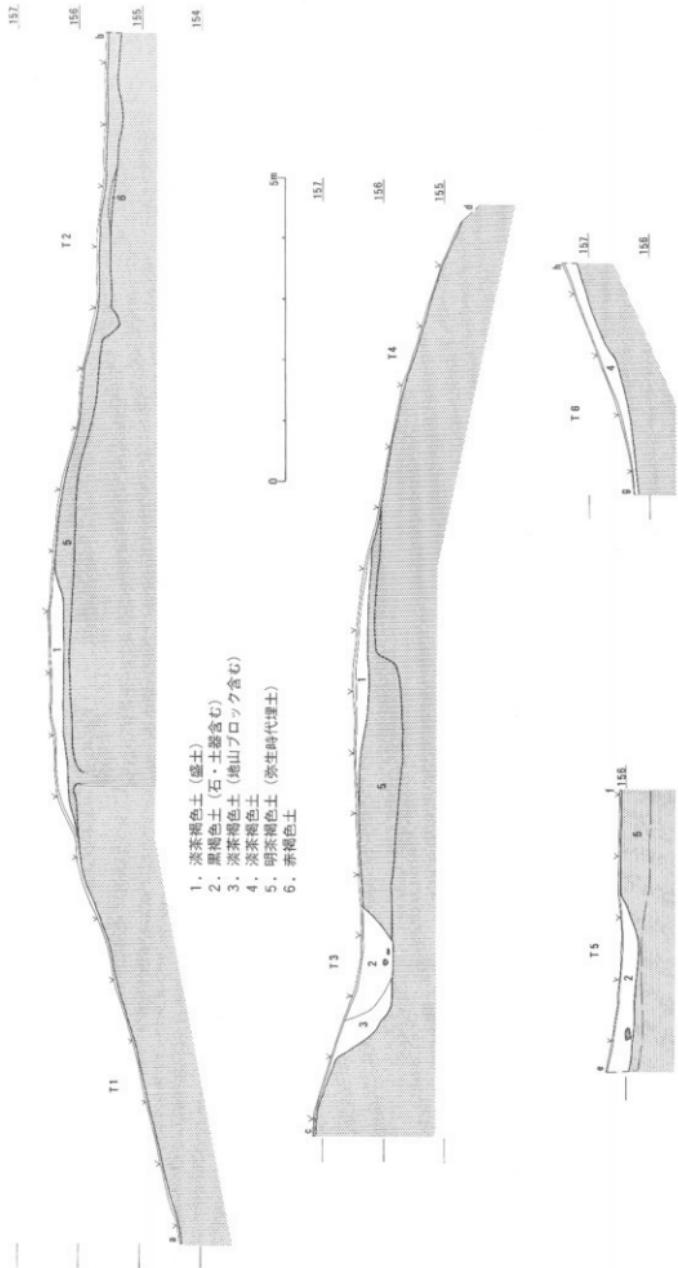
調査前の墳丘測量時に円形状の墳丘の存在と若干の高まりが存在していたため、その墳丘を十字に切る形でトレンチを設定した。また、山側については補助的にトレンチを設定した。各トレンチは1～6の番号をついている。

a. 墳形及び規模 (第25～26図)

トレンチ 1・2



第25図 田邑丸山5号墳トレンチ配置図 (S = 1 : 200)



第26図 田辺丸山5号墳埴丘上断面図 ($S = 1:80$)

ほぼ南北方向に墳丘を縦断した。第26図の土層図（a-b）によると墳丘には盛土が若干存在し、ほぼ1層（1）である。この盛土についてはやや落ち込む形で堆積しているため、当初埋葬施設と考えて精査したが、結局埋葬施設では無く、旧表土そのものがこのように落ち込んでいたものと考えられる。この盛土は最大で20cm程である。このように墳丘の中心を調査したにもかかわらず埋葬施設の痕跡すら無いため、埋葬施設はすでに流失してしまっているものと考えられる。次に墳端であるが、トレンチ1では明瞭な傾斜変換点は見られないが、しいて言えば154.75~155mの辺りで等高線の間隔が広くなっているので、この辺りが墳端ラインであろう。トレンチ2でも同様に155.25~155.5m辺りで等高線の間隔がかなり広くなっている。そのためこの辺りが墳端と考えられる。この下層には弥生時代の住居跡（S II 3）が存在する。

トレンチ3・4

山側から谷部にかけてトレンチを設定した。その結果トレンチ3の山側に幅2.5m程の溝が確認できた。溝は山側は2段に掘り込まれ、深さ0.9m、埋土は2層である。内部から石が出土している。盛土は中心部分に厚さ20cm程で存在する。この下層には弥生時代の遺構が存在するが住居であるかは明瞭でない。トレンチ4は斜面が削られているため明瞭な墳端は確認できていない。

トレンチ5

トレンチ2と3の間に設定した。3同様溝を確認したが、山側の溝の上端はトレンチ外に続くものと考えられる。そのため溝の幅は3m以上となる。内部から石が数点出土した。下層に弥生時代の落ち込みがある。

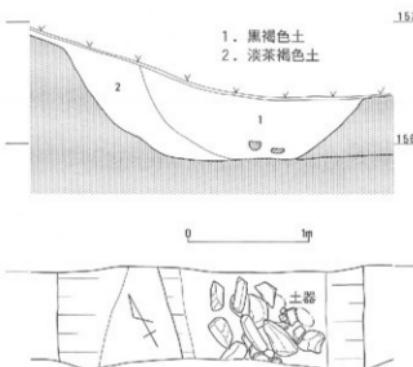
トレンチ6

トレンチ3の西に設定した。このトレンチの北側に若干の高まりがあるために設定したが、土層図（g-h）から地山整形らしきラインもあるが自然地形の可能性が大きい。

以上から、5号墳は山側に周溝を巡らす円墳と推測される。規模は直径およそ14m、墳丘のほとんどが流失しているため埋葬施設は存在しない。高さはトレンチ3の周溝底から0.7m程である。

b. 外表施設（第27図）

外表施設として山側に周溝が存在する。
トレンチ3の平・断面図が第27図である。周溝は幅2.5m、深さ0.9m、周溝の底付近にはかなり大きめの石がまとまって出土している。これら石はやや乱雑に存在する。また、葺石の転落石の可能性もあるが、トレンチ5の状況からそれらしき石が存在しないので、葺石ではなさそうである。そのため、これら石の性格については明瞭でない。もしかすると周溝内に埋葬施設が存在している可能性も考えられる。この石の隙間から上器片が出土しているが、細片のため器種や時期などはわからない。



第27図 トレンチ3周溝内石出土状況（S=1:40）

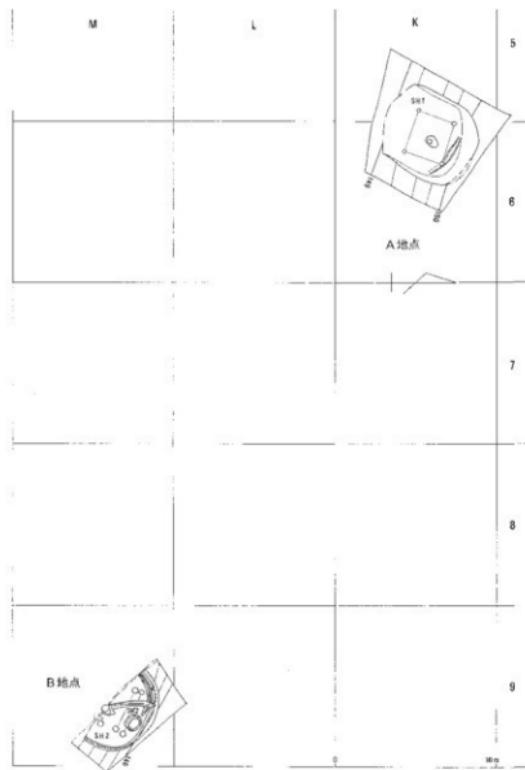
2. 田邑丸山遺跡（第28~31図）

田邑丸山古墳群の下層に弥生時代の遺構が存在する。1号墳の下層からは明瞭な遺構は検出していないが、トレンチ1~5から弥生土器片が出土している。2号墳の下層もトレンチ1には弥生土器片をかなり含む包含層が存在し、トレンチ1以外に4・6・7・9・17などから土器片が出土している。また、トレンチ13には土塙1（第20図参照）が存在する。5号墳のトレンチ2の下層に住居跡3が存在し、トレンチ3や5の下層に住居に良く似た落ち込みがある。これについては全掘していない部分もあるので詳細は不明である。以上から古墳群の下層には弥生時代の集落がかなり広範囲に存在するものと考えられる。また、本古墳群の南側で造成中に住居跡が2軒（A・B地点）が新たに検出された。

以下、これらの遺構や遺物について述べる。

（1）住居跡

住居跡とし確認できたのは3軒である。これ以外にも5号墳の下層に住居らしきものはある。これについては不明な部分も多いので詳細は述べない。

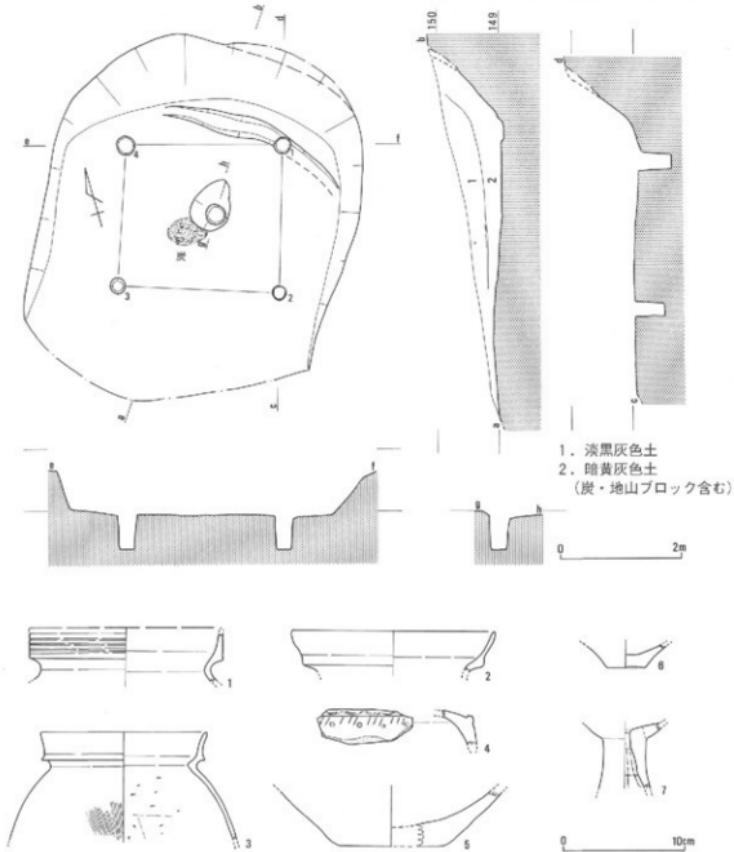


第28図 田邑丸山遺跡A・B地点位置図 (S = 1:300)

住居跡1 (S H 1、第28・29図)

A地点のK-5・6区に位置し、一辺5.2m程の隅丸方形に近い住居跡である。埋土は2層で上層から多くの土器片が出土している。深さは最大で1.2mを測り、壁溝は山側にのみ部分的に存在し全局ではない。柱穴は4本(1~4)で中央に楕円形の穴が1個存在する。この中央穴は1段浅めに掘られ、中央が柱穴のようにかなり深めに掘られている。この周囲には炭の散布が1カ所見られる。柱穴3から土器片が少量出土している。出土遺物とし土器片がかなりの量出土しているが、図示できたのは7点である。

1~3は甕である。2以外は口縁部が屈曲してほぼ垂直に立ち上がり、1の外面には櫛状の沈線が巡る。2の側面外にはタテハケ、内面はヘラケズリを施している。2はやや開く口縁である。4は壺などの口縁部細片である。端部が下に垂れ下がるタイプで、外面には小さな凹形の文様がありその

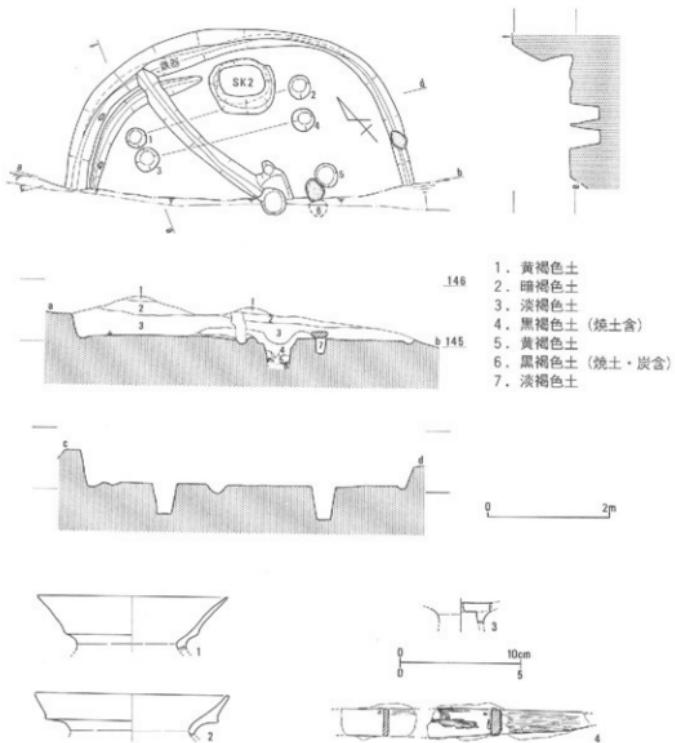


第29図 住居跡1 平・断面図 (S = 1 : 80) 及び出土遺物 (S = 1 : 4)

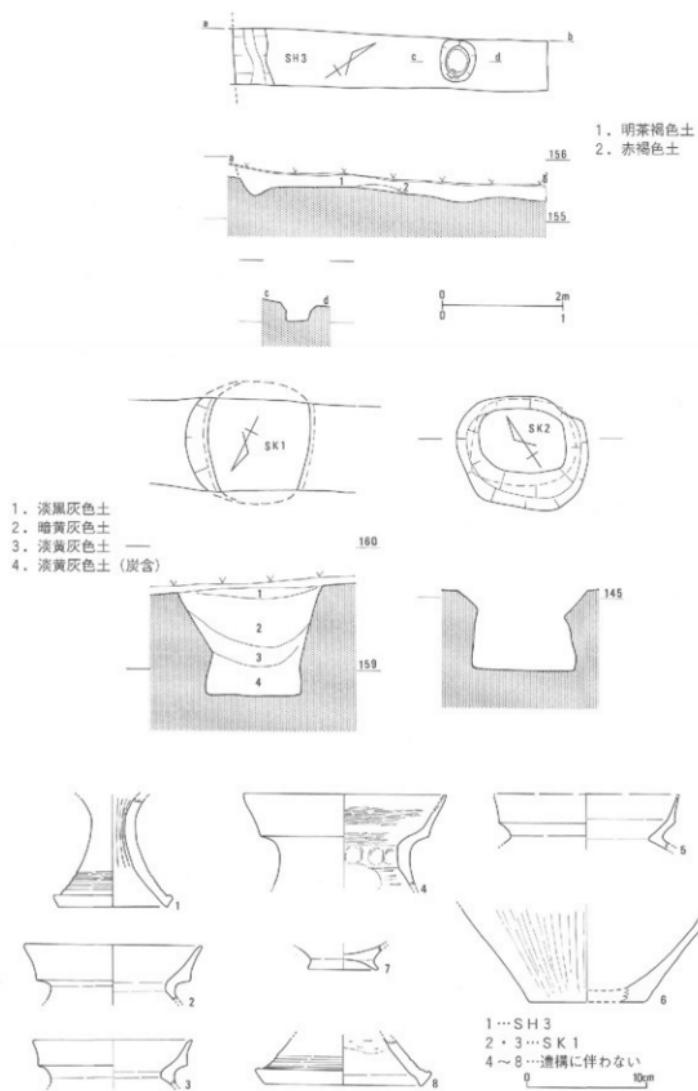
間にヘラ状工具による刻み目文がほぼ3本ずつ施され、上面には波状文が巡っている。5・6は底部であるが調整は明瞭でない。7は高杯で脚部の破片である。内部にはしづりの痕跡があり杯部とは別造りである。

住居跡2 (SH2, 第28・30図)

B地点のM-9区、造成によってすでに半分が削平している。円形住居と考えられ、壁溝は現状では全周し、さらに内側に部分的ではあるがもう1本存在する。そのため建て替えが1回行われ、住居を拡張している。最初は直径5m程、拡張して直径5.8m程となる。柱は6本検出したが、最初の住居に伴うのは3・4、最終段階に伴うのは1・2と考えられる。その他の5・6についてはどれかは明瞭でない。中央にも穴がありこれは中央穴と考えられ、これから壁溝へも溝のがびている。住居の埋土は3層が基本であるが、中央穴の周囲には焼土を含む土があり、全掘していないが埋土は炭などを含む互層である。この埋土内から大きめの石（砥石状）が1点出土している。この住居の床面には土壤2が存在する。これは貯蔵用の穴と考えられ、その位置からこの住居に付随していた可能性が大きい。壁溝内から鉄器片2点（4）と石が出土している。埋土からは上器片がかなり出土している。



第30図 住居跡2 平・断面図 (S=1:80) 及び出土遺物 (1~3 S=1:4, 4 S=1:2)



第31図 住居跡3、土壤1・2平・断面図及び出土遺物 (S=1:4)

るが図示できたのは3点である。

1・2は甕などの口縁部である。1は屈曲して逆ハの字状に開いて立ち上がる。2はその立ち上がり具合が小さい。いずれも外側の調整は明瞭でない。3は高杯の脚部片である。4は鉄器であるが2片になっているが接合はしない。左片は断面の厚さ2mmほど、右片は断面が4mm程の長方形で、表面には木質が見られる。そのため柄の部分と考えられ、刀子ないしはヤリガンナの可能性が考えられる。

住居跡3（SH3、第31図）

5号墳のトレンチ2の下層に存在する。住居の形は不明だが壁溝の一部と柱穴が1個検出された。壁溝は幅56cm程で、埋土はほぼ1層である。また、検出した柱穴は2段に掘り込まれ比較的浅い事から中央穴の可能性がある。この内部から高杯片（1）が出土している。出土遺物はこの土器片のみである。

1は高杯の脚部で裾はハの字に開き、外面には4条程の凹線が巡る。内面はしばり痕がある。

（2）土壤

2号墳のトレンチ13に土壤1、住居跡2の内部に土壤2が存在する。

土壤1（SK1、第31図）

トレンチで検出したため全掘はしていない。おそらく直径1m程の円形の掘り方で、内部は北側が大きくなっている。深さは0.9m、埋土は4層でその状況からほぼ自然堆積と考えられる。埋土から多量の土器片と炭などが出土しているが、図示できたのは2点である。第31図2・3がそれでいずれも甕の口縁部で、屈曲してやや開きぎみに立ち上がる口縁であるが、表面摩滅のため調整は明瞭でない。この土壤は貯蔵穴と考えられる。

土壤2（SK2、第31図）

住居跡2の床面に検出した、直径0.9~1.1m程の楕円形の土壤で、住居に付随するものと考えられる。内部は全体にえぐれていて深さは最大で0.66mを測る。埋土内からの出土遺物は皆無である。貯蔵穴と考えられる。

（3）その他

その他遺構に伴わない上器として5点図示している。第31図4は壺、5は甕、6・7は底部、8は高杯の脚部である。4の口縁部は屈曲して外反し、内面にはヘラミガキを施している。6の外面にはヘラミガキを施し、7は底部端を外方につまんだ形態である。8は外面に5条程の凹線を巡らしている。

（4）小結

最後に弥生時代の遺構について簡単にまとめたい。田邑丸山古墳群の下層及び南側斜面には弥生時代の集落が存在している。その内の後者についてはすでに造成によって削平されていたため、住居跡2軒を検出したにとどまった。そのため集落の構造までは検討できないが、時期については出土した土器からある程度推測できる。住居跡1・2、土壤1は後期の後半頃、住居跡3はやや古く後期の前半頃の所産と考えられる。すでに津山総合流通センター内の弥生時代後期の集落構成については述べている（註1）ので、ここでは簡単にまとめる。鞍部を挟んで近接して存在する有本遺跡A地区（計2）は後期後半頃の集落で、住居跡4軒、建物跡7軒、貯蔵穴などが検出されている。住居は大形（直径7m以上）1軒と小形数軒で構成され、これら住居には若干の時間幅があるものの、これらが集落を構成する一単位と考えられる。今回検出した住居跡1・2はほぼ同時期であり、先の分類ではと

にも小形の部類に入る。そのため、周辺に大形の住居が存在していた可能性が大きく、有本遺跡A地区のような単位集落が、本遺跡にも存在していたものと考えられる。また、住居跡3は後期前半に位譲付けられ、同時期の集落としてはやや離れるが、荒神峪遺跡（註1）などがある。

今回の津山総合流通センターの調査では、集落遺跡は弥生時代の中期の後半から後期の全般にわたって検出された。例えば中期後半の集落としては男戸嶋遺跡（註3）や葡萄田頭遺跡（註4）があり後期の前半では他に有元遺跡（註3）がある。これら集落の墳墓を求めるに中期に限って言えばほとんどの知られていない。逆に本集落など後期の墳墓を求めれば有本遺跡B地区（註2）などが考えられる。また、中期の墳墓が発見されていない事から、これを求めれば流通センター敷地内（93ha）のすでに削平されている所に存在していたか、あるいはこの敷地外のどこか別の場所に存在しているものと推測される。

（註1）小郷利幸「荒神峪遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第64集』津山市教育委員会 1999

（註2）小郷利幸「有本遺跡ほか」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第62集』津山市教育委員会 1998

（註3）安川豈史「男戸嶋遺跡・有元遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第65集』津山市教育委員会 1999

（註4）立石盛訓「葡萄田頭遺跡・槇之木峪古墳」『綿野町埋蔵文化財発掘調査報告第4集』岡山県芳田郡綿野町教育委員会 1999

V 自然科学的分析

田邑丸山2号墳出土土師器の胎土分析

岡山理科大学自然科学研究所

白石 純

1. 分析の目的

この分析では、田邑丸山2号墳の墳丘から出土した弥生・土師器壺に、蛍光X線分析法による胎土分析を実施し、同古墳出土土器のあいだで胎土に差異がみられるか。また津山市内の各遺跡出土土器との比較を行い、小地域での胎土の差異について検討した。

2. 分析結果

分析方法は、蛍光X線分析装置（波長分散型：リガク製KG-4型）を使用し、試料作製、測定条件などは従来の方法に従って分析した。

分析試料は、第1表に示した6点の弥生上器・土師器の二重口縁壺と直口壺である。津山市内出土土器の現在までの分析から、K、Ca、Sr、Rbの4元素に顯著な差がみられることから、この元素を用いてX-Y散布図を作製し、胎土の比較を行った。

この結果、第1回K-Ca散布図および第2回Sr-Rb散布図から検討すると、1（弥生時代後期）と2、3、4、5、6（古墳時代前期の壺）の二つに別れる。

また、津山市内の有本古墳群、近長丸山古墳および所領時期は異なるが弥生時代後期の京免遺跡、大田十二社遺跡との比較では、1の弥生土器が有本古墳群や近長丸山古墳の分布域に入るが2、3、4、5、6の土器は、京免遺跡や大田十二社遺跡の分布範囲に分布した。

以上のように、この胎土分析で判明したことについて述べたが、簡単にまとめる

(1) 田邑丸山2号墳から出土した弥生土器と土師器が、胎土分析で二つに分類されたが、これは土器の時期差による胎土の違いであることが推測された。

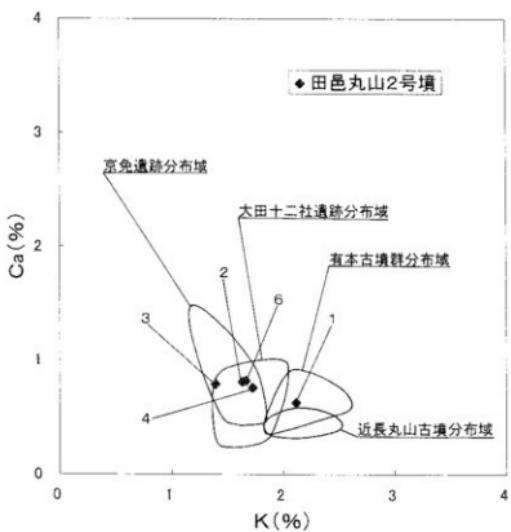
(2) 二つに分類された上器を他の遺跡と比較すると、1の弥生上器は有本古墳群、近長丸山古墳の分布域に、2、3、4、5、6の土器は、京免遺跡、大田十二社遺跡の分布範囲に分布することがわかった。同古墳は有本古墳群の北側に位置することから、1の弥生土器は有本古墳群出土の上器と胎土的に類似していることが推測されるが、その他の古墳時代の土器は弥生後期の京免遺跡、大田十二社遺跡と胎土的に似ていることがわかった。

このように、田邑丸山古墳から出土した弥生土器、土師器の胎土分析を実施したところ、時期差により胎土に違いがあることが明らかになった。しかし、土師器は京免遺跡、大田十二社遺跡と胎土的に似ており、今後津山市内の土師器類の試料を蓄積し再度検討する必要がある。

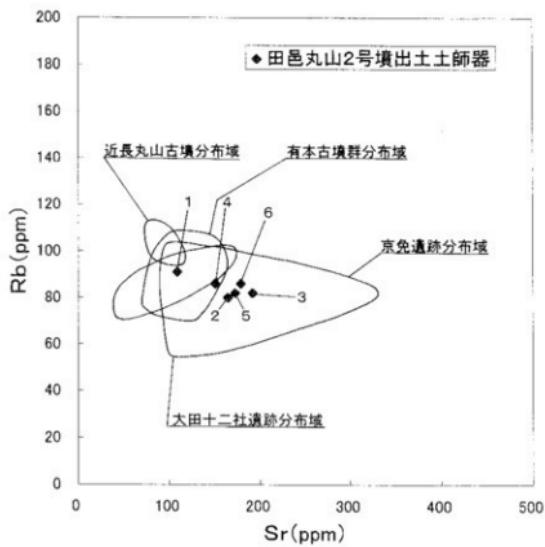
この分析の機会を与えていただいた津山市教育委員会の職員の方々には、いろいろとお世話になりました。末筆ではあります記して感謝いたします。

番号	出土地区	器種	K	Fe	Si	Ti	Al	Ca	Sr	Rb
1	トレンチ1	弥生土器	2.12	7.96	64.24	1.07	15.72	0.63	109	91
2	トレンチ3	壺	1.64	4.45	66.16	1.06	17.72	0.81	165	80
3	トレンチ11	壺	1.40	4.44	63.59	1.05	22.01	0.79	192	82
4	トレンチ7	壺	1.73	4.15	66.37	1.05	17.79	0.76	151	86
5	トレンチ4	壺	1.67	4.43	65.50	1.10	18.04	0.82	173	82
6	トレンチ2	直口壺	1.64	4.25	64.60	1.08	17.01	0.81	179	86

第1表 田邑丸山2号墳出土土師器の胎土分析 (%) ただし、Sr, Rbはppm



第1図 K-Ca散布図 田邑丸山2号墳と津山市内の各遺跡出土器との比較



第2図 Sr-Rb散布図 田邑丸山2号墳と津山市内の各遺跡出土土器との比較

山邑丸山1号、2号墳出土の赤色顔料

岡山理科大学自然科学研究所

白 石 純

1. はじめに

田邑丸山1号墳第1主体部、第2主体部および2号墳第1主体部から出土した赤色顔料（ベンガラ、朱）の種類について同定を実施した。

分析試料は、タンクスチレンカーバイト製の乳鉢で粉末にしたものと、蛍光X線分析法とX線回折法の2種類の装置を用いて分析した。

2. 分析結果

分析試料は第1表に示した11点で、このうち試料番号4、5、6が赤色顔料で、その他の試料は主体部内の床面、天井部、小口部などから採取された粘土である。

第1表のように蛍光X線分析では、すべての試料に鉄が認められたが、水銀は6の1号墳第2主体部から採取した赤色顔料からのみ検出された。またX線回折法では、4と5から赤鉄鉱が、6からは辰砂がそれぞれ同定された。また、蛍光X線分析では4、5以外の試料に、鉄が含まれていたが、鉄分ピークの比較より、量的に少ないとから、粘土中に含まれるものであると考えられる。

以上のように、1号墳の第1主体部の赤色顔料はベンガラで、第2主体部のものは、朱と同定された。

番号	遺跡・遺構名	出土地点	蛍光X線		X線解析
			鉄	水銀	
1	1号墳第1主体部	天井部粘土	+	-	
2	1号墳第1主体部	床面粘土	+	-	
3	1号墳第1主体部	排土粘土	+	-	
4	1号墳第1主体部	赤色顔料	+	-	+
5	1号墳第1主体部	赤色顔料	+	-	+
6	1号墳第2主体部	木棺赤色顔料	+	+	+
7	1号墳第2主体部	木棺床面粘土	+	-	
8	1号墳第2主体部	木棺北側粘土	+	-	
9	1号墳第2主体部	木棺東小口粘土	+	-	
10	1号墳第2主体部	木棺西小口粘土	+	-	
11	2号墳第1主体部	床面粘土	+	-	

第1表 分析試料一覧と蛍光X線分析およびX線回折分析結果

有本遺跡出土ガラス遺物の科学的調査

—非破壊手法による調査—

奈良国立文化財研究所

肥塚 隆保

はじめに

最近、ガラス遺物の分析調査や構造調査におけるデータが蓄積され、古代ガラスの種類やその歴史的な変遷が明らかになりつつある。しかし、日本の各地域についての詳細なデータがそろっているわけではなく、地域間における交流・流通を論じるにはデータがありにも不足している。今回は岡山県津市有本遺跡などから出土したガラス玉類の調査を実施したので、その概要についてまとめ、古代ガラスの基礎的なデータとした。

調査資料

今回、調査した資料は、有本遺跡B地区出土の管玉No 4、5、14の3点と有本1号墳第一主体出土の灰緑色不透明勾玉1点、有本3号墳中心主体から出土したNo14（淡青色）の小玉1点と、六ツ塚古墳群出土の小玉類である。

有本遺跡B地区出土の管玉は青と白色が平行するねじり文様をもつ。これらの管玉は透明感はまったく失われており、かなり風化が進んでいる様相を呈し、物理的強度は極端に低下していた。それ以外の小玉資料は、透明感はやや失われて半透明状を呈するが、強度的にはそれほど劣化が進んでいることはない。

測定方法

(1) ガラスの化学組成を知るため、微小領域エネルギー分散型蛍光X線分析装置をもちいて、真空中にて測定をおこなった。今回、測定した資料は、有本遺跡B地区出土管玉No 4、5、14の3点と有本3号墳中心主体から出土したNo14（淡青色）の小玉1点である。なお、今回の測定は一部の資料をのぞいて、すべて非破壊測定でおこなったため、本来のガラスの定量値を測定したものではなく、風化部分の値である。ガラスは見かけ上風化していないように見えても、その表面の化学組成は大きく変化しており、X線的に無限層厚資料でかつ均一な物質ではないので、その解釈には注意を要する。ここでは単にガラスの種類の判別ができる程度に解釈してほしい。

蛍光X線測定条件は励起電圧20~40kV、電流4~0.5mA、コリメーター1mm ϕ 、計測時間500秒である。なお、定量値の計算にはSGTをはじめとする

標準試料を使用して、検出された各元素の合計が100%になるように規格化し、酸化物重量百分率で表示した。また、一部の資料についてはX線回折による測定をおこない、風化生成物などについて調べた。

(2) ガラスの加工方法などを調べるために、内部の孔部分の構造調査をX線透過撮影法により調査した。

今回の資料は比較的小型であるため、ソフトX線による撮影をおこなった。撮影フィルム：F P、電



図1 蛍光X線分析装置

压：60 Kv±、電流：最大5 mA、照射時間：3分、フィルムー焦点間距離：1.2mである。

(3) 今回の管玉は分析の結果、鉛バリウムガラスであることが判明した段階で、管玉No17片を使用して鉛同位体比の測定をおこない、従来のデータと比較検討した。測定は斎藤 務による高周波過熱分離—鉛同位体比迅速法によった。

測定結果

蛍光X線分析

蛍光X線分析法により非破壊測定した結果、有本遺跡B地区出土管玉No4、5、11の3点はいずれも鉛バリウムガラス(PbO-BaO-SiO₂系)であった。青色の着色はコバルトイオンによっていると推定されたが、風化が著しいため明確なことは不明で、さらに白色部分についても風化による成分の変動が大きく、顕著な差異を示すことはできなかった。有本1号墳第一主体出土の灰緑色不透明勾玉1点も同様に鉛バリウムガラスで、緑色の着色は銅イオンによると推定されたが、やはり風化が大きくて推定の域をでるものではない。また、有本3号墳中心主体から出土したNo14(淡青色、透明～半透明)の小玉1点は、前述のものとはまったく異なるカリガラス(K₂O-SiO₂系)であった。淡青色は蛍光X線ピークから判断して明らかに銅イオンの着色によると推定できる。

なお、今回は六ツ塚古墳群出土の小玉類については測定していない。

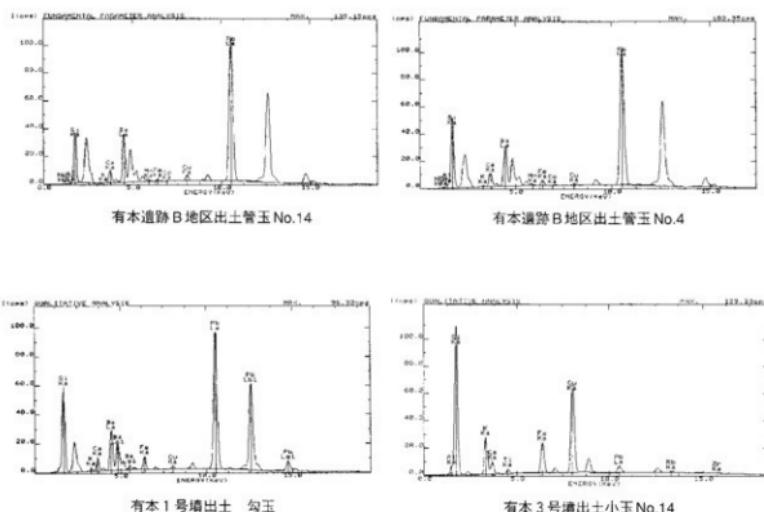


図2 各資料の蛍光X線スペクトル図

X線回折による風化による生成物の同定

有本遺跡B地区出土管玉No17 (SG49) の風化によって剥落した微小片をもちいて、X線回折粉末法により結晶成分の同定をおこなったので、併せて報告しておく。風化によって生じた物質は白色粉状で、モースの硬度で言えばほぼ1ないし2に相当するものであるが、微小な硬い粒子も存在しているようである。

測定の結果、図3に示すように全体が非品質を示すブロードな回折線が得られているが、 SiO_4 (石英)と $\text{CuO} \cdot \text{BaO} \cdot 4\text{SiO}_2$ (Barium Copper Silicate) いわゆる「漢青」が検出された。石英は表面に付着する上に由来するものなのか、ガラス中に含有する未溶解の石英なのかは不明である。いっぽう、「漢青-Han blue」として検出された「顔料」は、漢代に人工的につくられた青色顔料で、ファイアンスなどの着色材料として使用されたもので、鉛バリウムガラスから検出されたのは日本において初めてのことである。以上のことを考えると、管玉の青は「漢青」顔料が混合されて作られた可能性が大きく、ファイアンスからガラスへと移行する技術段階でつくられたガラスの可能性もあり、今後再検討を要する重要な遺物である。

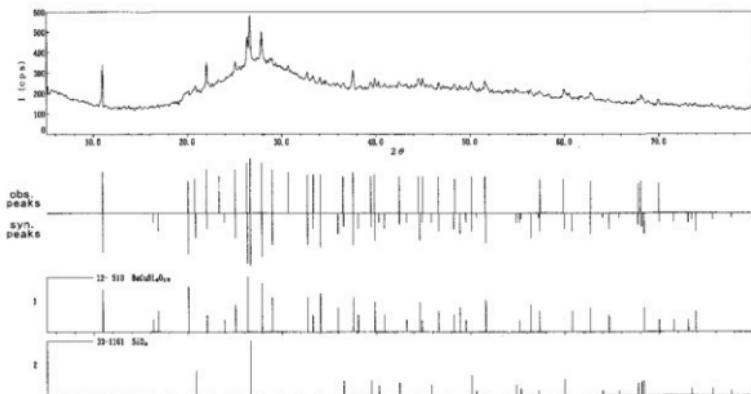


図3 有本遺跡B地区から出土した青色鉛バリウムガラスに含有する「漢青」

人工的に合成された古代の顔料としてはエジプトブルーは有名なものである。これは銅・カルシウムの珪酸塩鉱物であり、中国においても非常に類似した顔料が存在することが近年の研究で明らかにされた。これが、今回検出した銅・バリウムの珪酸塩鉱物であり、中国では戦国時代から漢代にかけて製造されたとされている。

X線透過撮影

ガラスの内部構造を観察して加工方法を推定するため、X線透過撮影を実施した結果については図4に示した。平面的な投影であり詳細についてはX線CT等により詳しい調査が必要である。また、六ツ塚古墳群出土の小玉類についても参考のため撮影したので、併せて図に示しておく。これらの小玉類については、詳細な顕微鏡観察と併せて考察する必要がある。

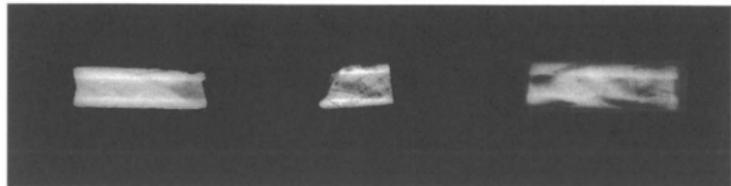


図4 有本遺跡B地区出土鉛バリウムガラス管玉、左からNo.5、No.14、No.4

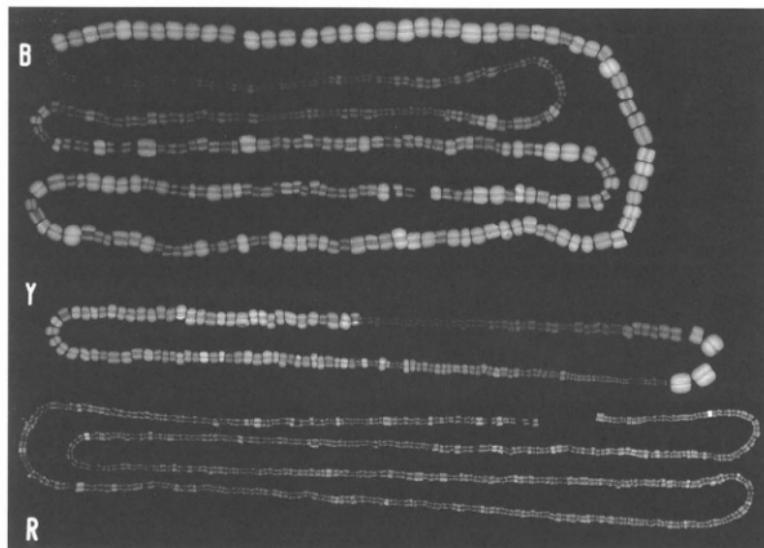


図5 六ツ塚古墳群出土の小玉類のX線透過写真、B：青色系、Y：黄色系、R：赤茶系

鉛同位体比測定結果

有本遺跡B地区出土管玉の剥落片を用いて鉛同位体比の測定をおこなった結果、表1に示す結果を得た。これらの結果は、従来から指摘されているように中国で出土する鉛バリウムガラスと同じ同位体比を示しており、中国産の鉛バリウムガラスが材料として使用されていることを示している。しかし、この製品がどこで作られたのかは明らかではない。なお、参考のためこれまで公表された鉛バリウムガラスでつくられた遺物の鉛同位体比を中国出土、日本出土、韓国出土、有本遺跡出土管玉に分けて図6に示した。

表1 岡山県津市有本遺跡B地区出土 鉛バリウムガラス管玉の同位体比

$207\text{Pb} / 206\text{Pb}$	$208\text{Pb} / 206\text{Pb}$	$206\text{Pb} / 204\text{Pb}$	$207\text{Pb} / 204\text{Pb}$
0.8559	2.1178	18.374	15.725

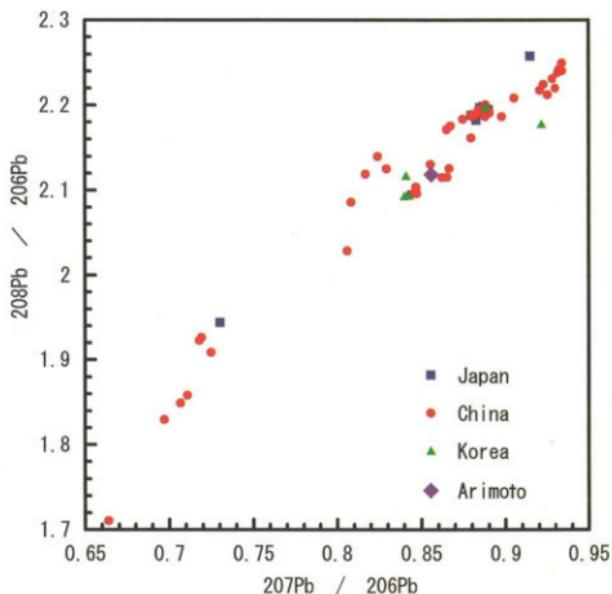


図6 日本・中国・韓国で出土した鉛バリウムガラスの鉛同位体比と有本遺跡出土の
鉛バリウムガラス管玉

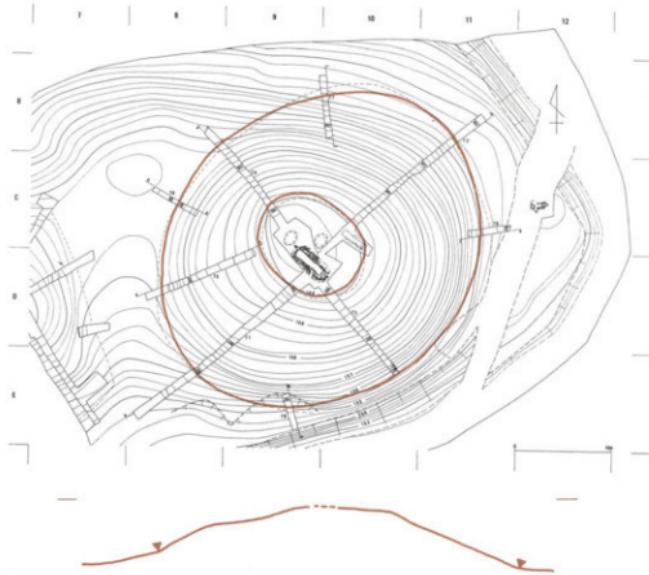
VII まとめ

1. 田邑丸山古墳群の評価

(1) 墳形の復元について

(1号墳)

1号墳は東南隅のトレンチ3を除くすべてのトレンチで墳端が確認できた。これを基に復元したのが第32図である。およそ長辺36m、短辺30mの楕円形を呈している。北西側には丘陵との切斷による幅5m程の周溝が巡る。葺石は存在しない。墳丘の大部分は自然地形を利用しているが、およそ標高158~159mより上は盛土によって構築されている。特に西側では断面図を見るとよくわかるが、この盛土の西側がやや平らになっており、ここにテラス状のものが存在していた可能性を指摘した。これについてはこの西側のみに存在する事から、現状では付随するものと判断しにくい。可能性として、この平坦面より上部は盛土である事からすると、このテラスは墳丘構築時の整形面で、この上には盛土をもともとしなかったか、すでに盛土は流失しているか、あるいは盛土をせずテラス状にみせるための工夫であったのいずれかであろう。山側での墳端のレベルは157m、平野部側154~156mで、両者には1~3mの差がある。この事から墳丘はかなり平野部側を意識している事が伺える。また、墳頂平坦面は直径9~11mの楕円形で、墳丘の主軸とは同一方向ではなく、直交している。また、第1・2主体がやや南側によっている事から、北側に他の埋葬施設が存在する可能性は十分あるが、今回の調査では確認できていない。



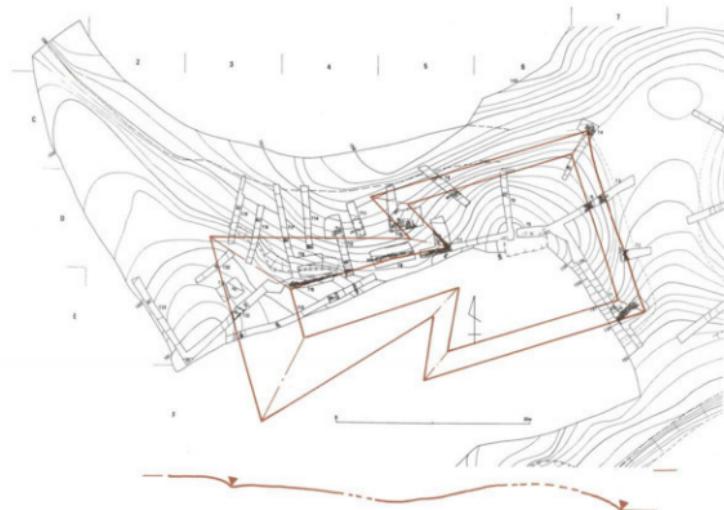
第32図 田邑丸山1号墳復元図 (S = 1 : 500)

美作地域の円墳でほぼ同規模なものとしては津山市美和山2・3号墳がある（註1）。2号墳は直径34m、3号墳は36mでいずれも正円に近い。これらは丘陵の稜線上の比較的平坦部の広い所に築かれているので高さの差がほとんどない。また、現状では段築なども存在しないが、葺石と埴輪を伴う。本1号墳のように高さに差があり、明らかに平野部を意識していると考えられる円墳として、津山市近長丸山1号墳（註2）がある。この古墳は稜線の斜面部に立地し、直径20m程で2段に葺石が巡っている。正円に近いが高さの差は最大で3m以上はある。

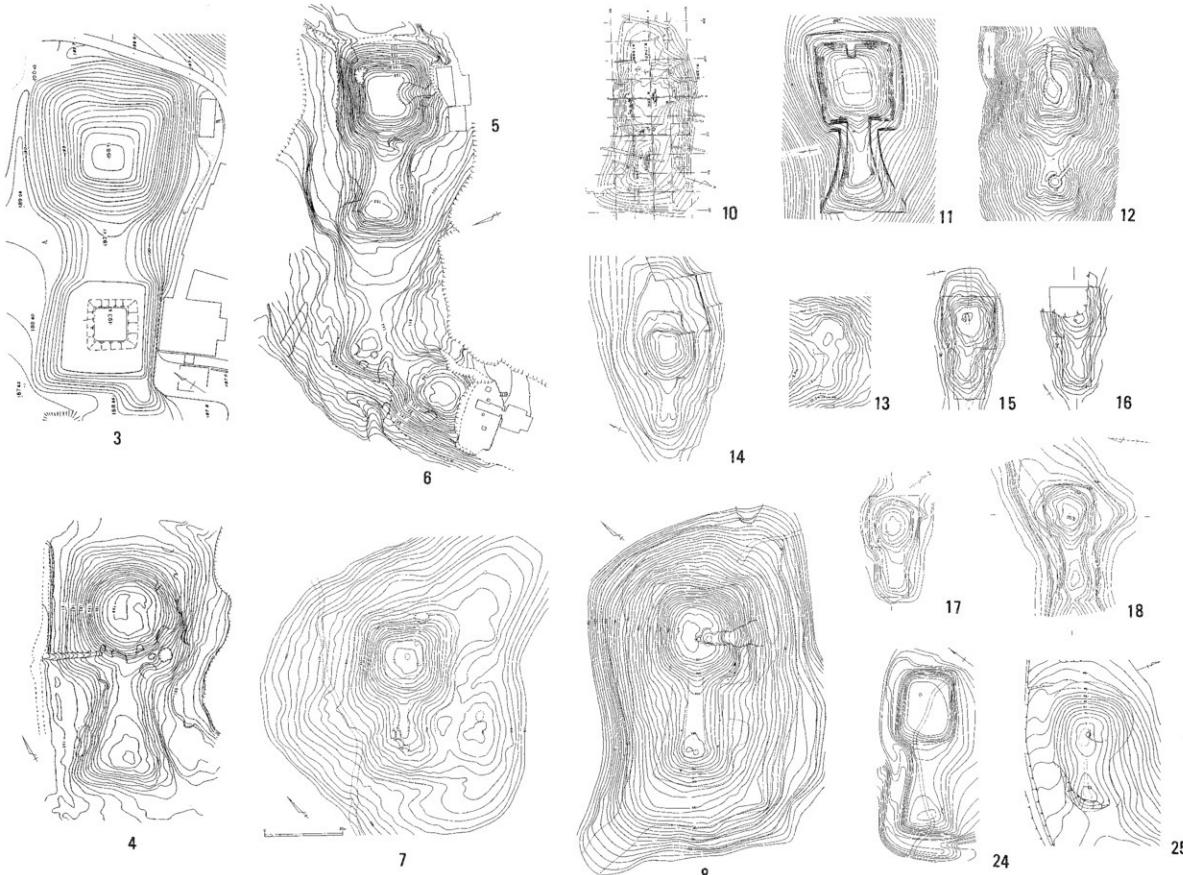
以上から少なくとも古墳の立地する場所によって、墳丘の形態や高さの違いが関係しているようである。比較的高低差の少なく丘陵の平坦面の広い美和山2・3号墳に対し、田邑丸山1号墳や近長丸山1号墳は丘陵が瘦せ尾根に近い。特に本1号墳はやや無理な場所に直径36mもの円墳を築いたために、墳形は楕円形になり、さらには高かさに差の生まれる結果となったものと推測される。また、外表施設としては本1号墳は葺石を伴っていない。本2号墳は葺石を伴うのなぜ1号墳には存在しないのかは不思議である。ただ、美和山古墳群が前方後円墳を主とする古墳群に対し、本古墳群が前方後方墳、近長丸山古墳群が円・方墳で構成されている事、美和山古墳群のみ埴輪を伴う事からすると、祭祠形態や首長権継承の儀式形態などが異なっており、そこに古墳の墳形や規模、さらに立地にからむ政治的な関係が存在しているとの推測される。

（2号墳）

2号墳の復元図は第33図である。未調査地があるため非常に推測域の多い復元である。そのため詳細は未調査地の調査をまちたい。特に平野部を見渡せる所でない山側のみの調査であるため、墳丘構築にあたってはかなり省略された部分が存在する可能性がある。本2号墳は従来円墳として考えられてきた。今回の調査でぐびれ部の存在などから前方後方墳の可能性が大きい。また、2段に葺石が巡



第33図 田邑丸山2号墳復元図 (S = 1 : 500)



第34図 桧山県内前方後方堆集成 ($S = 1 : 1000$ 、番号は第2表に対応)

っているようであるが、後方部の両者間は比較的に狭く明瞭なテラス状にはなっていない。また、復元図にもあるように後方部の下段のラインは東側では直線にはならずやや湾曲している。また、くびれは直角ではなく非常に鋭角である。このような類例は県内には無く、島根県古志志大谷1号墳（註3）があるぐらいであり、この占墳は全長46mで須恵器を伴い6世紀頃の所産である。次に前方部の復元であるが、上段の葺石はあまり開かず直線的で途中で消滅する。下段についてはくびれ部を検出しておらず、転落石はあるものの明瞭な基底石は見られず埴輪ラインは明瞭でない。そのため各トレーンチの傾斜変換点と土層図から検討して復元した。前方部はやや直線的に開いているものと推測される。また、断面図にあるように、前方部前端については丘陵の途中を溝によって切断する形態である。もし仮に西側の丘陵部までが前方部とすると、前方部が異常に長いものとなり不自然である。また、この丘陵にトレーンチをいたが盛土ではなく自然地形と判断した。このように前方部端が丘陵斜面の途中にあるものは非常に珍しく、知見では類例は無い。この復元をもとに埴輪を復元すると全長は約40m、後方部長20×23m、同高さ1.5~3.5m、前方部長20m、同高さ最大で2m程、後方部と前方部との高さの差はほとんど無く若干後方部の方が高い。また、前方後方墳は津山市内では初例である。

岡山県内で前方後方墳は25例（第2表、第34図）あり、その内美作地方に本例を含め10例ある（本例以外は吉野川流域で7例、皿川流域で1例、久米川流域で1例）。調査例も少ないので比較検討は難しいが規模が最大なのが植木寺山古墳（第34図3、註4）で85m、その他は60m（1例）、50m（4例）、40m（8例）、30m（7例）、20m（4例）クラスにわかれる。その中でも美作地方の例はほとんどが40mクラス以上のもので、本2号墳は美作地方では一番下位のクラスに属する。葺石はほとんどの古墳に見られ、埴輪は美野高塚古墳（同4、註5）他4例のみで知られている。また、調査例が少ない

古 墳 名	所 在 地	規模(全長)	葺石	埴輪	基 石	理 森 施設	出 土 通 物	時 期	文 記
1 田島丸山2号墳	津山市下田島	40	○	×	○	堅六式石梯	鏡1、	前期	①
2 堀原山古墳	佐伯町堀原下	54	○	?	?	堅六式石梯	鏡1、鐵劍、刀、鐵劍、鐵劍、铁斧、土師器、勾玉	~	②
3 植木寺山古墳	植木町植木	85	○	?	?			~	③
4 美野高塚古墳	勝央町美野	65	○	○	?			~	④
5 美野中塚古墳	勝央町美野	51	○	?	?			~	⑤
6 西ノ宮古墳	勝央町美野	44	○	?	?			~	⑥
7 丹井高塚古墳	勝央町丹井	42	?	?	?			~	⑦
8 四面塚古墳	勝央町西	56	○	?	?	堅六式石梯	鏡1、攝影銅器	~	⑧
9 調諭神社古墳	中央町原田	51	○	?	?			~	⑨
10 久米・成4号墳	久米町中北下	35	○	×	○	堅式石梯5	鏡1、劍、矛、勾玉	中期	⑩
11 假前車塚古墳	岡山市御幸御	48.3	○	○	○	堅六式石梯	鏡13、劍、刀、鏡、銅鏡、斧、ヤリガナ	前周	⑪
12 七つ塚1号墳	岡山市津守町々瀬	45.1	○	○	?	堅六式石梯3	鏡3、劍、刀、鐵劍、斧、刀子、鏡、ヤリガナ	~	⑫
13 七つ塚5号墳	~	25	○	×	?	堅式石梯	刀子、鍔先、小刀、ヤリガナ	~	⑬
14 郁月坂1号墳	岡山市津守本町	33	○	○	?	堅六式石梯	劍、矛、管	~	⑭
15 上土田4号墳	岡山市上土田	27	○	?	?			~	⑮
16 上土田1号墳	~	26.5	?	?	?			~	⑯
17 大崎西2号墳	岡山市大崎	26.6	?	?	?			~	⑰
18 大崎西4号墳	~	30	?	?	?	堅六式石梯		~	⑱
19 津意古墳	岡山市京山	38.5	1	?	?			~	⑲
20 黒住山古墳	岡山市津守	30	○	?	?			~	⑳
21 黄2号墳	御津町高津菅	44	○	?	?			~	㉑
22 西坂山古墳	達部町西原	40	○	?	?			~	㉒
23 久米10号墳	緑社町緑社	32.9	○	○	?	堅式石梯		~	㉓
24 茄木山東坂古墳	北原町上木田惣木	43	?	?	?			前期	㉔
25 小田幕古墳	北原町上翁部	32	?	○	?			~	㉕

第2表 岡山県内前方後方墳一覧表

が土師器を伴うものは本例も含め4例ある。埋葬施設は、知られているのは竪穴式石槨が多く、その他箱式石棺や木棺がある。また、時期別ではほとんどが前期である。この中で、特筆すべきは備前中塚古墳（同11、註6）である。全長は48.3mで備前地域では一番大きな前方後方墳で、副葬品として三角縁神獸鏡11面を含む鏡13面が出土している。鏡の多さ、特殊器台形埴輪を作わず土師器壺を伴う事などから畿内地方との関係が考えられる古墳である。本2号墳は規模のクラスはやや異なるが三角縁神獸鏡を含む4面の鏡が出土しており、複数の鏡の副葬の面、土師器壺を伴う事から関連性が伺える。

次に余談だが、前方後方墳集成（註7）によると、前方後方墳は全国で459例（1995年現在）知られており、長崎県から宮城県に分布し、島根県・石川県・群馬県に30基以上が知られている。墳丘規模では20~30mクラスが多く、最大規模は奈良県の西山古墳（註8）で全長180mである。上位3基はいずれも奈良県に存在する。ちなみに勝央町の植月寺山古墳は19位ぐらいにランクされる。時期別では前期から後期に見られ、後期のものは少ないようである。

（3～8号墳）

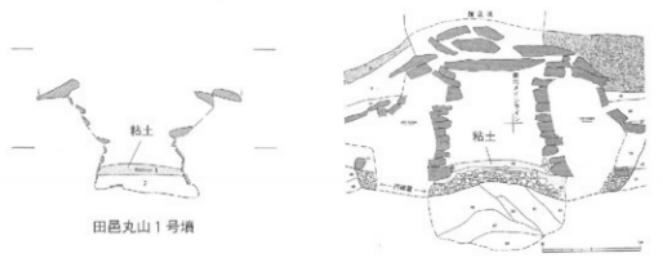
今回調査した5号墳以外にも未調査地に3号・4号墳が存在する。3号墳は直径12m程の円墳、4号墳は直径10m程の円墳と考えられる。ただ3号墳は2号墳の前方部や西側の残丘と接する形となり現状を見る限りでは高さはき程ない。もしかすると2号墳を整形したときの残丘の続きの可能性もある。逆に4号墳は高さが2m程あり、しっかりとした墳丘をもつ。5号墳は今回の調査で直径14m程の円墳と推測されるが、墳丘はかなり流失していて、埋葬施設は現存しない。また、かつて2号墳の南に続く丘陵上などに円墳3基（6～8号墳、第2図参照）が存在していたが、昭和49年の開発によってすべて消滅した。6号墳は直径20m程で葺石があり、8号墳は直径17~18mであったとされる（註9）。今回これらの古墳についてその痕跡があるかもしれない、トレンチ調査を行ったがその痕跡は発見されなかった。

（2）埋葬施設について

1号墳の墳丘上から竪穴式石槨1基、木棺1基、墳丘外から小形の竪穴式石槨？1基、2号墳から竪穴式石槨1基の一部を検出した。

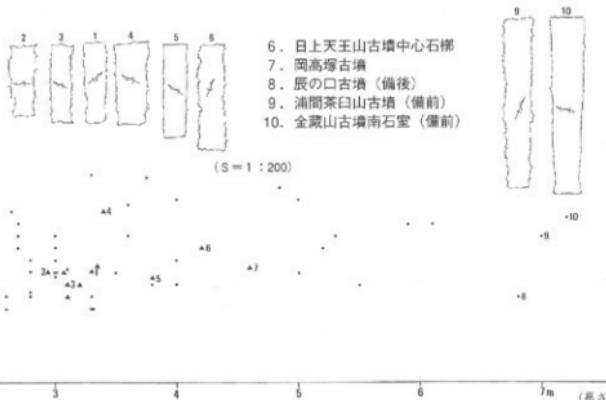
（竪穴式石槨について）

まず1号墳の竪穴式石槨について述べる。これは内法全長3.3mと比較的小形の石槨である。石の積み方は割り石や河原石をやや乱雜に積んでいる。床面は粘土で作られているが、平らではなくやや逆U字形である。美作地方の竪穴式石槨の床面構造を比較したのが第35図である。津市日上天王山古墳（註10）の中心石槨（第35図右上）は、円錐層の上に粘土を置き断面は同様な逆U字形である。報告者はさらにこの周囲に基礎の石を置きその上に箱形の木棺を置くといった復元をしている。本例はこれ程しっかりした円錐層はないが、下層に疊が含まれる事から同様な構造あるいはやや簡略化した構造であった可能性が大きい。また、日上天王山古墳第2石槨（同右下）は床面が平らであり、この上に箱形木棺を置いているようである。周囲には粘土がありそのため断面は山の字形となっている。美作町横原寺山古墳（同左下、註11）は疊層の上に粘土を置く構造は一緒だが、その断面がU字形のため内部の木棺が箱形ではなく、割り竹形である可能性が大きく、その場合木棺の形態そのものが他とは異なっている。また、本2号墳の石槨については現状で大きく破壊されており、今回の部分的な調査でも基底石までとされていた。昭和34～35年の盗掘の後、1号墳と2号墳の竪穴式石槨について



第35図 竪穴式石室床面構造比較図 ($S = 1 : 50$)

- ▲ 美作地方の古墳
1. 田邑丸山1号墳
 2. 近長丸山1号墳
 3. 日上天王山古墳第2石室
 4. 王子中古墳
 5. 植原寺山古墳
 6. 日上天王山古墳中心石室
 7. 岡高塚古墳
 8. 辰の口古墳（備後）
 9. 浦間茶臼山古墳（備前）
 10. 金蔵山古墳南石室（備前）



第36図 古備地方竪穴式石室の規模の比較と美作地方等主要石室床面平面図

は消掃調査がなされたが、特に2号墳についてはほとんどの石が抜き取られ、出土遺物も無かったとの事である（註12）。

次に吉備地方（美作、備前、備中、備後）の石棺で、現在知られているものの内法の長さと幅で比較したのが第36図である。これによると、長さが7m越えるものが最大で、岡山市浦間茶臼山古墳（第36図9、前方後円墳、全長140m、註13）、金蔵山古墳南石室（同10、前方後円墳、全長165m、註14）があり、美作地方は5mを越えるものはほとんどない（註15）。特に2~4m前後に集中する。石の積み方は割り石を丁寧に積むものは、恵原寺山古墳（同5）など4m前後のものまで、本1号墳の第1主体など3mクラスのものは、河原石を一部に使用するなど比較的簡略化した積み方である。また、主軸方向は南北軸に近いものは日上天王山古墳中心石棺（同6）があるのみで、その他は大きく振っており東西方向に近いものが多い。さらに、これら河原石を使用する石棺は5世紀末から6世紀初頭の長戸山北5号墳（註16）、日上戸山6号墳（註17）などの石棺にも見られる。ただ、これらが前期のものと同一の系譜によるものかは明瞭でないが、少なくとも5世紀前半頃の類例がほとんどなく、この5世紀末~6世紀初頭頃は須恵器が多量に副葬され、外来文化が多く受容されている時期でもある。そのため規模などは前期の類例と良く似てはいるが、系譜については異なる可能性が考えられる。これについては、これら全長2.2~4.5m、幅0.6~1.8mのこの時期の竪穴式石棺を「渡来系」竪穴式石棺としてとらえ、被葬者を新米の生産活動（須恵器・鉄生産など）に関与する有力層とする考え方（註18）があり、これには賛同するものの、これ以外に例えば櫛櫛（註19）はこの時期に新しく登場し短期間で使用されなくなる埋葬施設である。余談ではあるが美作地方ではこの分布がある程度かたまっているため、これらについても検討する必要がある。

（木棺について）

本1号墳の木棺は、床面と周囲に粘土を使用している。床面が平らである事から、棺痕跡は無いが割り竹形ではなく組み合せ式の箱形木棺と推測される。この事は小口の一部がくぼんでいる事からも推測できる。床面に粘土を敷く例は、近接する有本1号墳第1主体（註20）にある。ただ粘土を床に敷く木棺は有本古墳群の中で一番大きな古墳の中心に使用されるなど使用は限られている。さらに本例と比べた場合、副葬品には鉄剣（本1号墳）と刀子（有本1号墳）といった違いが見られる。頭位を比べると本例は剣の方向や赤色顔料の位置から西枕とも推測され、その場合有本古墳群が東枕を主とする（東西両方に埋葬された形跡があるものがあるが、その中でも東側の方が副葬品などから主たる人物と推測される）事とは異なっている。

（3）出土遺物について

出土遺物として、1号墳から鏡（乳文鏡）1面、中輪石形銅器2点、鉄剣、鉄斧、2号墳から上師器皿があり、かつて鏡が4面出土したとの事である。その内の1面は三角縁神獸鏡である。

（鏡について）

鏡としては1号墳の乳文鏡1面と2号墳の三角縁神獸鏡1面（他の3面は不明）が知られている。

乳文鏡とは、図文と図文とを画する役割の乳を主とするもので、仿製鏡のみである（註21）。1993年の集成では宮城県から宮崎県に158例（註22）程出土しており、時期別では前期~後期でその中でも前期のものは少なく中~後期のものが多いようである。古墳の墳形では円墳が多く、前方後円墳も21例あり、そのほとんどが横穴式石室の後期古墳である。埋葬施設では、横穴式石室が多く、木棺、箱式石棺、竪穴式石棺の順になる。本1号墳は円墳で竪穴式石棺からの出土である。円墳からの出土は

ある程度普遍的ではあるが、竪穴式石槨からの出土は比較的めずらしいと言える。また、これら仿製鏡を作った畿内の前方後円墳の編年基準によると4期（註23）からとなる。本例は実見していないため乳の数など詳細は不明である。

また、三角縁神獸鏡（図版34-1）は、波文帶三神二獸博山炉鏡と呼ばれているもので、径21.3cmを測り、同型鏡は本例以外に6面が知られている（註24）。

○掛迫第6号墳（広島県、円墳？（25m）、径21.6cm、註25）

○阿保親王塚古墳（兵庫県、現状は円墳（36m）、径21.3cm、註26）

○佐味田宝塚古墳（奈良県、前方後円墳（111.5m）、径21.8cm、註27）

○佐味田貝吹山古墳（奈良県、現状は円墳（30m）、径21.6cm、図版34-2、註28）

○円満寺山古墳（岐阜県、前方後円墳（60m）、径21.4cm、註29）

○不明（径21.6cm、京都国立博物館蔵、註24）

また、この鏡式は岸本直文氏（註30）の5段階区分の第V段階、福永伸哉氏（註31）の1段階×分のD段階に位置付けられやや新しい段階のものである。同型鏡の出土した古墳のほとんどが複数の鏡と共にし、円満寺山古墳は岸本氏の第IV段階、佐味田宝塚古墳は第I～IV段階の三角縁神獸鏡と共にしている。本例も全部で4面出土したとされるので、鏡式は不明だがこの中に他の三角縁神獸鏡が含まれていた可能性もある。これら古墳の埴形は掛迫第6号墳や阿保親王塚古墳、佐味田貝吹山古墳が現状で円墳（前方後円墳の可能性がある）である以外は前方後方墳で、本例は唯一前方後方墳と言う事となる。

（車輪石形銅器について）

車輪石形銅器は字のごとく車輪石の形をした銅製品である。2点出土しており同范と考えられている。現物を実見していないので、詳細は不明であるが、同類の銅製品が数点知られているのみである。そのため本資料については、まず石製品である車輪石の分類で検討してみる。平面形が卵形をし、蒲原宏行氏の分類でII-a類（註32）に酷似する。これは時期×分では1期（4世紀前葉）の段階から出現しその後は少なくなる。この1期の共伴する三角縁神獸鏡はすべて舶載品とされる。比較はできないが本例は共伴するのは仿製鏡の乳文鏡で、2号墳からは舶載品が出土しているので両者の関係を検討する必要もある。以上は石製品の場合であり、次に銅製品の類例についても若干検討する。良く似た銅製品が奈良県新沢500号墳（第37図2、註33）から出土している。この古墳は全長62mの前方後円墳で、複数の埋葬施設があり、銅製品の出土した副櫛から、鏡（三角縁神獸鏡他4面）、筒形銅器、石製品（車輪石、鏡形石、石劍など）、武器（銅鏃、鐵劍など）、武具（短甲）、T具（鉄斧、刀子など）が多数出土している。この外形は卵形で長径9.7cm、短径8.7cm、孔の長径6.2cm、短径5.1cmで突線は94



第37図 車輪石形銅器比較図 (S=1:4)

条（本例は長径10.6cm、短径9.4cm、孔の長径6.4cm、短径5cm、穴線91条）で、本例よりは一回り小さく、さらに環状部の幅がやや狭いが、断面の厚さや形状は本例と良く似ている。この例では共伴して車輪石も出土しているが、これと比べると明らかに断面の形態などが異なっている。先の車輪石の分類ではⅡa類の範疇である。また、京都府芝ケ原古墳（第37図1、註24）からも出土している。この墳墓は、前方後方形をし木棺の内部から鏡（四帆鏡）や勾玉、管玉、小玉、鉄器などが出土し、出土した土器から弥生時代から古墳時代の過渡期の古墳とされる。この銅製品は2点あり同范で、平面形は円形で外周にはとげ状のものがつき、外径12.1cm、孔の径5.7cmを測り、穴線は72条である。本例とは平面形及び規模などが大きく異なるが、断面形は薄く良く似ている。またこの平面形は車輪石で言えば先のI類に属し、さらに外周がとげ状になっている平面形から、且輪を忠実に模した銅製品と考えられている。この時期の製品とすると、早い段階にこれら銅製品が作られていた事となる。その意味では本例も石製品出現以前に存在していた可能性もある。ただ、逆に石製品を模して銅製品が作られた可能性もある。この事は、本例については備前市丸山古墳出土と同じ形式の車輪石を模したものであるといった指摘（註35）もあり、これに従えばやや時期は新しくなる。いずれにしても類例（註36）が少ないため即断はできないのが現状であるが、新沢500号墳と本例などの観察から平面の形態は、芝ケ原古墳のものとは明らかに異なり、どちらかと言えば車輪石を模した可能性の方が大きいのではないかと思われる。また、断面については古い時期の芝ケ原古墳と良く似ているため、系譜を同じくする工房で作られた可能性も考えられる。これら銅製品については時期的な問題以外に、製作地の問題や、流通経路など今後の類例増加が待たれる。尚、本古墳群周辺の弥生時代後期の集落から銅鋤が1点出土している（註37）。

（鉄器について）

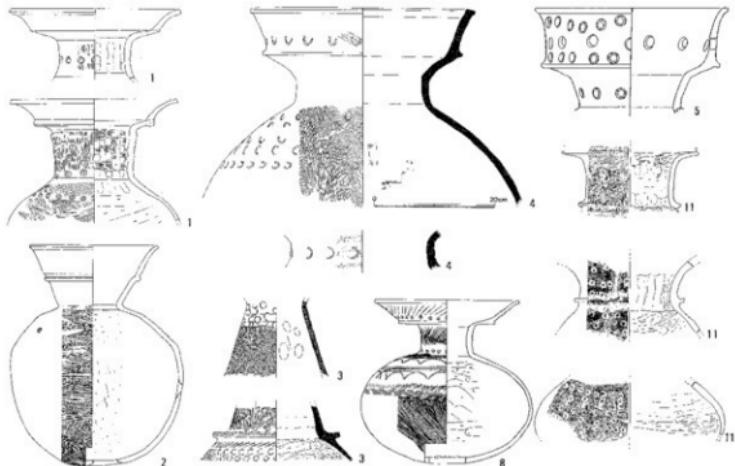
鉄器としては、1号墳第1主体の剣、斧、ヤリガンナ、第2主体の剣がある。その中で今回出土した第2主体の剣について述べる。剣は全長28cm、闊は直角ではなく茎は短く目釘穴は1カ所ある。この種類の鉄剣は、池淵俊一氏の分類（註38）ではナデ角剣b・直茎bグループに属し、時期的には4世紀後葉に出現し比較的短期間に消滅するものとされる。これに従えば時期がある程度決まってくる。また、表面には布の痕跡があり木質が見られない事から難には入っていなかったものと考えられる。刀剣については副葬の地域性についての研究がある（註39）。これによると古備地方の前期古墳は布巻きが基本で木質のものはほとんどない。これは弥生時代の伝統的な儀礼を引き継いだものとされる。また、畿内地方では鞘に収めた状態で副葬するのが一般的のため、古備地方で木質が見られるものは畿内と密接な関係が考えられる。吉備地方で木質が見られるものは、前述した前方後方墳の備前車塚古墳（註6）のみである。また、美作地方で布巻のものは日上天王山古墳（註10）中心石槨出土の刀、第2石槨出土の剣にある。そのため、美作地方の古墳の多くは古備南部地方との政治的関係が強いものと考えられる。

（竹管文を施す土器について）

2号墳の二重口縁の土師器壺には頸部から胴部にかけて竹管文（スタンプ文）が施されている。現状では1～3列のものがあり、頸部の長さと合わせて分類した。このような竹管文の類例は、周辺地域では鳥取県や島根県、兵庫県にある（第3表、第38図）。この竹管文も円形の他、半さいされたものとそれを組み合わせS字にしたものとがある。ここではこれらスタンプ文を円形、半円形、S字形（逆S字形）として述べる。兵庫県では西求女塚古墳（第38図4、註40）で壺の口縁部と頸部、胴部に

	古墳名	所在地	器種	スタンプ文	備考	文献
1	田舎丸山2号墳	岡山県津市	壺	円	前方後方墳(40m)	①
2	殿山8号墳	同 総社市	壺	円	方墳(12×13)	②
3	丁瓢塚古墳	兵庫県姫路市	壺	円 半円	前方後円墳(104m)	③
4	西求女塚古墳	同 阿戸市	壺	半円	前方後方墳(95m)	④
5	処女塚古墳	同 神戸市	壺	円 S	前方後方墳?	⑤
6	伊和中山4号墳	同 宮町	壺	円		⑥
7	北浦18号墳	同 豊岡市	壺	円	円墳(20m)	⑦
8	面影山74号墳	鳥取県鳥取市	壺	円	方墳(20×16m)	⑧
9	面影山46号墳	同 "	壺	半円	円墳(11m)	⑨
10	桂見2号墳	同 "	壺	半円 S	方墳(28×22m)	⑩
11	徳楽方墳	同 大山町	器台・壺	円 半円	方墳(24×21m)	⑪
12	上神鶴山第3号墳	同 倉吉市	壺	円	方墳?	⑫
13	イザ原1号墳	同 "	壺	円	円墳(20m)	⑬
14	松本1号墳	島根県三刀屋町	壺	円 S	前方後方墳(50m)	⑭
15	塙津山1号墳	同 安来市	器台	半円	方墳(25×20m)	⑮
16	大成古墳	同 "	器台	透S	方墳(60m)	⑯

第3表 竹管文を施す土器出土古墳一覧表



第38図 竹管文を施す土器 (S=1:8 番号は第3表に対応)

半円形のスタンプ文が見られ、鉢形器台など山陰系の土器が多く共存している。この古墳は全長95m程の前方後方墳である。処女塚古墳(同5、註41)も前方後方墳の可能性が高く、壺の口縁や頭部に円形スタンプ文が見られ特に口縁部では3段巡っているが、真ん中の段は円形に穿孔している。丁瓢塚古墳(同3、註42)は全長104mの前方後円墳で、壺の頭部や胴部に円形や半円形のスタンプ文が密集して見られる。また、山陰地方では鳥取県徳楽方墳(同11、註43)で、採集資料だが、器台や壺に円形、半円形のスタンプ文がかなり密に見られる。一辺20m程の方墳、面影山74号墳(同8、註44)は底部が穿孔された壺の口縁部と頭部に円形スタンプ文が1列ずつ巡っている。その他、岡山県内の

例としては、総社市の殿山8号墳（同2、註45）がある。辺13m程の方墳で壺の底部などが穿孔され、胴部上半に等間隔に巡っている。

以上から、本例のように頭部から胴部にかけての類例では徳楽方墳が良く似ている。また、全体にバラエティーにとんでもいるため共通性は中々見いだせないが、しいて言えば巡る場所はちがっても、ある程度規則的に巡らされているようである。これら竹管文による装飾は、弥生時代の後期に逆上の例が山陰地方や美作地方（註46）などでも知られており、その系譜が考えられている。特に鳥取県内では円形、半円形のスタンプ文は弥生時代後期後葉から古墳時代前期に盛行したものとされる（註47）。まとめると現状での分布は鳥取県地方から美作、播磨、根津地方に見られ、特に山陰地方に多く、他の地方でも山陰系の土器が共存する事例が多く見られる事から、これら分布域は山陰地方を中心とした同一の祭祀形態の範囲を示している可能性が考えられる。また、これらスタンプ文を施す伝統は、鳥取県内の弥生時代の土器棺に多く見られる事から、葬送用として意味をもって発達し、その後墳墓への供獻土器として展開していったとする見解（註42 岸本直文論文）もある。いずれにせよ、山陰地方以外では墳形が前方後方墳など方形を主体とする古墳が多い事も注目される。

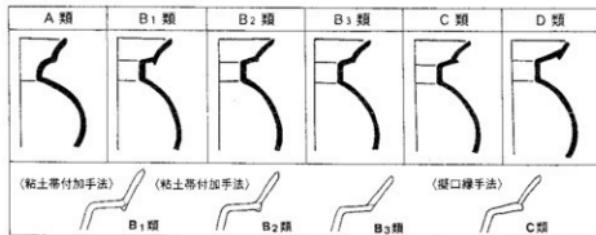
（4）古墳群の形成と時期について

これら古墳群の時期などについて副葬品や出土遺物から検討したい。

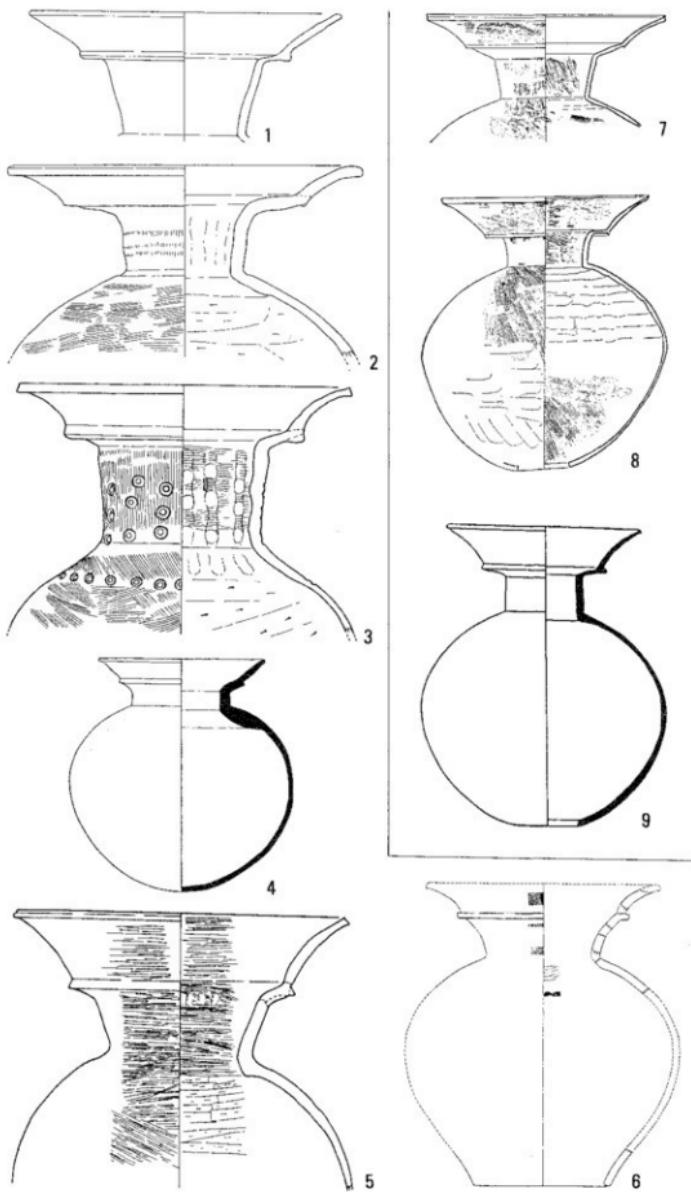
1号墳からは土器の出土はないので、鏡などの副葬品から考へるしかない。鏡は乳文鏡で古墳時代全般に見られるもので即時期決定と言ふ訳にはいかないが、概ね前後半頃から見られるものである。また、車輪形銅器も類例が少なく時期は決めかねるが、車輪石などの石製品の出現がある程度時期決定の日安となっているので、この銅製品が、芝ヶ原古墳のように古墳の出現期に存在していたとする、古い特徴を示すものとなる。ただ、逆に前述のように石製品を模したものであれば、新しくなる。また、鉄劍は前述のようにその型式からおおよそ4世紀後葉頃を中心に短期間に見られるものとされる。以上から本1号墳の年代は前期の後半頃、編年（註23）では4期頃と推測される。

土師器の出土したのは、現状では2号墳のみである。器種は二重口縁の壺と直口壺とがあり、いずれも底部の形態は不明である。特に前者は頭部の形態から分類（A・B類、第40図2・3）できる。同様な二重口縁の壺は日上大王山古墳（同1、註10）からも出土している。頭部が逆ハ字形になっており、本例のA類とB類の中間的な形態である。

これら二重口縁壺の口縁の接合形態で分類した野々口陽子氏によると、口縁の接合形態から6種類に分類できる（第39図、註48）。これによると本例はB₁・B₂類がほとんどで、これらは時期的には布留式古段階から中段階を中心とし、新段階（古）まで見られるものとされる。畿内の古墳では、奈良



第39図 「畿内系」二重口縁壺の基本型式（註48より引用）



1. 日上天王山古墳 4. 金藏山古墳
2・3. 田邑丸山2号墳 5. 川東塚原古墳 6. 久米三成4号墳
7・8. 箸墓古墳 9. 桜井茶臼山古墳

第40図 藩内と國山県内出土二重口綠壺 (1~5…S=1:4、6~9…S=1:8)

県善葉古墳（同7・8、註49）でB類、桜井茶臼山古墳（同9、註50）でB₁～B₂類とC類が存在している。このC類はB類の後出の型式とされる。本例にはC類は1点（第23図8）見られるが、ほとんどはB類である。ただ、これは畿内の古墳による編年であるため、これをそのまま地方の編年で採用するには慎重を要する。そのため、古備地方の類例についても若干検討してみたい。日上天王山古墳（同1）のものはB類であり、岡山市金蔵山古墳（同4、註14）のものは小形だが、その形態からC類に近いようである。また、頭部の形態は異なるが落合町川東車塚古墳（同5、註51）はB類であり、時期的に新しい久米町久米二成4分墳（同6、註52）はC類である。以上から古備地方についてもC類が後出する要素として、大筋は畿内の変遷にほぼ対応するものと考えられる。その意味では、本例は日上天王山古墳と金蔵山古墳の間の時期と推測できる。また、本例の分類のB類（同3）は頭部が長い形態であるが、このようなものは京都府元福柄古墳（註53）などに類例があるため、ある程度普遍的、あるいは地域的に見られる器形と解釈できる。

これら土器は日常的な土器から祭祀専用の土器として変化しているものと考えられる。また、小規模な円墳や方墳から出土した土器はこれら祭祀的なものと日常的なものとが使用されている。例えば津市市有本7号墳（註20）から出土した土器棺の内、土器棺1は祭祀専用に作られたと推測される大形なものを使用し、土器棺2は日常的な壺を使用している。その中で少なくとも祭祀的な二重口縁の壺はすべての古墳に使用されるものではない。前方後円墳や前方後方墳など中心的な古墳に限られている。また、の中でも美作地方では、前期の段階で埴輪を使用する美和山古墳群（註1）はこれら壺を使用していない。逆に壺を使用する古墳からは埴輪は出土しない。明らかに埴輪と壺では祭祀形態が異なっているものと推測される。この事は畿内的な二重口縁の壺を使用する古墳と古備的な特殊器台形埴輪の系譜を引く埴輪を使用する古墳とがあり、つまりこの違いは祭祀形態そのものより、首長權の繼承儀礼の系譜そのものが異なるものと考えたい。美作地方では、少なくとも埴輪を使用する美和山古墳群と壺を使用する日上天王山古墳の2系列が存在する。その中で前者は調査例も少なく現段階では系譜をたどる事が難しい（註54）。後者は今回の例などからその系譜をある程度たどる事が可能で、少なくとも日上天王山古墳-田邑丸山2号墳や鏡野町赤崎古墳（註55）と続く。これ以外にも幾つかの系列が存在しているものと考えられる。ただ、本例は竹管文を施しており、これについては山陰地方の祭祀形態との関連性を述べた。そのため、一元的には解釈できず、かなり他方面の影響を受け、これらが相互に作用している複雑な社会構造がそこには存在している。そのため竹管文からのみのアプローチであったが、今後はこれも含め再検討する必要はある。

次に2号墳出土の波文帶三神三獸鏡の同型鏡出土古墳について時期を検討すると、阿保親王塚古墳は前期の後半頃（註56）、佐味田宝塚古墳は3期後半（註57）、円満寺山古墳も3期（註58）、掛迫第6号古墳はやや新しく5世紀初頭頃（註25 緯原文獻）また本2号墳は3～4期（註59）とされている。

以上から木古墳の時期をまとめると1号墳は前述のごとくほぼ1期頃で、2号墳については同型鏡の出土した古墳のほとんど3期以降である事、先の土器の検討などから推測して、3期頃の所産で1号墳に先行して築かれているものと考えられる。また、これら1・2号墳の時期が正しいとすると立地面では、高所に2号墳の前方後方墳が先に造られ、その後先端に1号墳の円墳が造られている。いずれも複数尾根であるため埴丘の構築には苦労している。2号墳は規模が規制されていたためか、墳端が斜面の途中になってしまっている。また、1号墳もかなり大きめの円墳を無理に瘦せ尾根に作つたため、梢円形となっている。このように構築にあたりかなり制約されていたのは確かであり、そこ

に政治的な力関係が関与しているものと考えられる。さらに、続きの尾根に円墳（6～8号墳）が作られている事からすると、高所の2号墳が先行して作られ、その後1号墳などの円墳が隨時作られていったと理解するほうがよいであろう。また、2号墳が3期で1号墳が4期頃とすると、この時期に墳形そのものが前方後方墳から円墳へと大きく変化している。この事は從来から指摘があるように5世紀前半に畿内政権の移動に伴う変化に、地方においても連動していた事（註60）の傍証となり、本地域において日上天王山古墳から続く前方後円（方）墳の系譜がここで一度途絶えてしまう。これは本地域が都出比呂志氏の言う4世紀優位類型（註61）である事を示している。今回はこれら系譜について詳細は検討していないが、その後美作地方において前方後円墳が窓かれるのは5世紀の後半～末頃（註62）になってからであり、ふたたび畿内の要素が多く見受けられる古墳が登場するのである。

- （註1）中山俊紀「史跡美和山古墳群」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第42集』津山市教育委員会 1992
（註2）小郷利幸「近長丸山古墳群」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第41集』津山市教育委員会 1992
（註3）足立克己他「古曾志遺跡群発掘調査報告書」島根県教育委員会 1989
（註4）光永真一「植木寺山古墳」『岡山県史 考古資料』岡山県史編纂委員会 1986
（註5）倉林慎祐他「美作高塚古墳」『美作地方における前方後円墳群の構造的研究』 1998
（註6）鎌本義昌「備前草坂古墳」『岡山市史古代編』 1962
（註7）第3回東海考古学フォーラム「前方後方墳を考える」第3回考古学フォーラム三重実行委員会 1995
（註8）西田雅昭「大和の前方後方墳」「考古学雑誌第59巻第4号」日本考古学会 1974
（註9）十居衛「田邑丸山古墳群」『津山市文化財年報1』津山市教育委員会 1975
（註10）近藤義邦他「日上天王山古墳」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第60集』津山市教育委員会・日上天王山古墳発掘調査委員会 1997
（註11）近藤義郎「橋原寺山古墳」『岡山県史 考古資料』岡山県史編纂委員会 1986
　　河本清「美作町橋原寺山古墳出土の土器壺について」『古代古備 第10集』古代吉備研究会 1988
（註12）調査を担当した今井堯氏にご教示を得た。
（註13）近藤義郎編『浦間茶臼山古墳』浦間茶臼山古墳発掘調査団 1991
（註14）鎌本義昌・西谷寅治「金蔵山古墳」倉敷考古館 1989
（註15）关作町金焼山古墳第1・2主体が全長5m、鏡野町郷饒音山古墳の主体が全長5m強とされるが、詳細は不明である。
　　今井亮「原始・古代社会」『美作町史編纂中間報告』关作町史編纂委員会 1964
　　今井亮「美作の前方後方墳四題」『古代古備第9集』古代吉備研究会 1987
（註16）行田裕美「長歛山北古墳群」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第45集』津山市教育委員会 1992
（註17）安川豊史「日上歛山古墳群」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第63集』津山市教育委員会 1998
（註18）高田賀太「瀬戸内における渡来文化の受容と展開」『第46回 埋蔵文化財研究集会 渡来文化の受容と展開』埋蔵文化財研究会 1999
（註19）津山市河辺上原1号墳、川崎六塚5号墳、日上和田古墳など加茂川流域に分布する。
　　小郷利幸「河辺上原遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第54集』津山市教育委員会 1994
　　河本清「六ツ塚古墳群」『岡山県史 考古資料』岡山県史編纂委員会 1986
　　行田裕美「日上和田古墳贈補」『年報 津山弥生の里第3号』津山弥生の里文化財センター 1996
（註20）小郷利幸「有本古墳群」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第59集』津山市教育委員会 1997
（註21）雄口隆康「古鏡」『新潮社』1979
（註22）白石太一郎・渡楽博巳編「日本出土鏡データ集成2」『国立歴史民俗博物館研究報告第56集』国々歴史民俗博物館 1994
（註23）広瀬和雄「前方後円墳の畿内編年」『前方後円墳集成 中國四国編』山川出版社 1991
（註24）岡村秀典他「椿井大塚山古墳と三角縁神獸鏡」京都大学文学部 1989
（註25）掛追古墳調査団「備後掛追古墳」「芸備文化5・6合併号」1956
　　齋原芳秀「掛追6号古墳」「探訪広島の古墳」芸備友の会 1991
　　植田千徳「ひろしまの青銅器」広島県立歴史民俗資料館 1993

- (註26) 村川行弘「親王塚・親王寺所蔵遺物の再検討」『考古学雑誌第65巻第3号』日本考古学会 1979
- (註27) 梅原末治『佐味田宝塚古墳(範囲確認調査報告)』『河合町文化財調査報告第1集』河合町教育委員会 1986
- (註28) 「古鏡目録」宮内庁書陵部 1976
千賀久『馬見丘陵の古墳』奈良県立橿原考古学研究所附属博物館編 河合町・河合町教育委員会 1988
- (註29) 綱千善教他『岐阜県海津郡南濃町庭田円溝寺山古墳調査報告』『関西大学考古学研究年報2号』関西大学考古学研究室 1968
- (註30) 岸本直文「三角縁神獸鏡の編年と前期古墳の新古」『展望考古学』考古学研究会 1995
- (註31) 福永伸哉「三角縁神獸鏡の歴史的意義」『第36回埋蔵文化財研究集会懇人と鏡その2』埋蔵文化財研究会 1994
- (註32) 藤原弘行「鞍輪形石製品」「古墳時代の研究8 古墳Ⅱ副葬品」雄山閣 1991
- (註33) 伊達宗泰他『新沢千塚古墳群』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第39則』奈良県教育委員会 1981
- (註34) 近藤義行他「芝ヶ原古墳」『城陽市埋蔵文化財調査報告書第16集』城陽市教育委員会 1987
- (註35) 鎌木義昌『岡山文庫④岡山の古墳』日本文教出版 1964
- (註36) その他、芝ヶ原古墳の類似例が和歌山県阪東丘1号墳にある。形状は橢円形で復元径14.2×12.7cm、孔径7.5×5.8cmで5世紀中頃の古墳である。
糸三郎「考古国録編」『御坊市史 第3巻史料編I』御坊市史編さん委員会 1981
- (註37) 津山市荒神船遺跡の住居跡12の柱穴から破片が出土している。
小郷利幸「荒神船遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第64集』津山市教育委員会 1999
- (註38) 池瀬後一「鉄製武器に関する一考察」『古代文化研究第1号』島根県古代文化センター 1993
- (註39) 宇垣平雅「前期古墳における刀劍附葬の地域性」『考古学研究第44巻第1号』考古学研究会 1997
- (註40) 安田滋他『西求友塚古墳』神戸市教育委員会 1995
- (註41) 丁種浩「史跡処女塚古墳」「昭和56年神戸市埋蔵文化財年報」神戸市教育委員会 1983
千種浩「処女塚古墳」「第25回埋蔵文化財研究集会 古墳時代前半期の古墳出土上器の検討 第Ⅲ分冊」埋蔵文化財研究会 1989
- (註42) 岸本道昭「前方後円墳成立期の攝幡・攝保川流域」『考古学研究第33巻第3号』考古学研究会 1986
岸本直文「丁瓢塚古墳測量調査報告」『史林71巻6号』史学研究会 1988
岸本道昭他『有年考古鏡品目録』(財)有年考古館 1991
- (註43) 東森市良「徳楽方塚出土の土器」『松江考古古第6号』松江考古学講話会 1985
- (註44) 船井武彦・平川誠「面影山古墳群・古門遺跡発掘調査概要報告書」「鳥取市文化財報告書22」鳥取市教育委員会 1987
- (註45) 平井勝「殿山遺跡・殿山古墳群」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告47』岡山県教育委員会 1982
- (註46) 津山市有本遺跡の満3出土の壺や蓋台に見られる。時期は後期の後半である。
小郷利幸「有本遺跡他」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第62集』津山市教育委員会 1998
- (註47) 高尾浩司「鳥取県におけるスタンプ文について」「天萬七升前遺跡」鳥取県教育文化財印調査報告書 53(財)鳥取県教育文化財局 1997
- (註48) 野々口陽子「いわゆる畿内系二重口縁壺の展開」『京都府埋蔵文化財論集第3集』(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1996
- (註49) 中村一郎・笠野毅「大市墓の出土品」『書陵部紀要27』宮内庁書陵部 1975
- (註50) 上田宏範・中村春寿「桜井茶臼山古墳・兩階山古墳ー」奈良県教育委員会 1961
- (註51) 吉林真砂斗他「川東車塚古墳の発掘調査報告」『美作地方における前方後円墳秩序の構造的研究』1998
- (註52) 河本清・柳瀬昭彦「久米二成4号墳」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告30』岡山県教育委員会 1979
- (註53) 郡出比呂志「第3章古墳時代」『向日市史上巻』 1983
- (註54) 候補として埴輪片の採集されている勝央町美野高塚古墳や久米町奥の前1号墳(全長65mの前方後円墳)が考えられる。註5文献参照

- (註55) 近藤義郎「赤崎古墳」『岡山県史 考古資料』岡山県史編纂委員会 1986
　　済智大「美作の鏡と古墳」津幡郷土博物館 1990
- (註56) 福永伸哉「古墳時代の首長系譜変動と墳墓要素の変化『古墳時代首長系譜変動パターンの比較研究』」大阪大学文学部 1999
- (註57) 今尾文昭「大和第1章1期～4期」「前方後円墳集成 近畿編」山川出版社 1992
- (註58) 中井正幸「東海の前期古墳と鏡」「第36回埋蔵文化財研究集会 優人と鏡 その2」埋蔵文化財研究会 1994
- (註59) 今井亮「古備における鏡配布体系」「古備の考古学的研究(下)」山陽新聞社 1992
- (註60) 都出比呂志「古墳時代首長系譜の継続と断絶」「待兼山論叢22号」大阪大学文学部 1988
- (註61) 都出比呂志「首長系譜変動パターン論序説」「古墳時代首長系譜変動パターンの比較研究」大阪大学文学部 1999
- (註62) 津市十六夜山古墳がある。全長60m。二重に周溝が巡り、多量の埴輪を伴う。
　　古市秀治「十六夜山古墳の測量調査」「紀要第1号」岡山県立津山高等学校 1994
　　尾上元規他「十六夜山古墳・十六夜山遺跡」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告130」岡山県教育委員会 1998

表文献

第2表

- ①本書
- ②註11
- ③註4
- ④～⑧註5
- ⑩註52
- ⑪註6
- ⑫・⑬近藤義郎・高井健司編「七つ塙古墳群」七つ塙古墳群発掘調査団 1987
- ⑭近藤義郎「月板1号墳」「岡山県史 考古資料」岡山県史編纂委員会 1986
- ⑮～⑯草原孝典他「岡山市足守地域の地域史研究(1)・(3)」「古代古墳第12・17集」古代吉備研究会1990・1995
- ⑰・⑯・⑰・⑱・⑲近藤義郎編「前方後円墳集成 中国・四国編」山川出版社 1991
- ⑳葛原克人「総社市久米古墳群とその周辺」「岡山県埋蔵文化財報告1」岡山県教育委員会 1971

第3表

- ①本書
- ②註45
- ③註42
- ④註40
- ⑤註41
- ⑥註42岸本直文論文
- ⑦瀬戸谷啓他「北浦古墳群」「豊岡市教育委員会 1980
- ⑧・⑨註44
- ⑩平川誠他「桂見古墳群」「鳥取市文化財報告書18」「鳥取市教育委員会・鳥取市遺跡調査団 1984
- ⑪註43
- ⑫真田弘幸「上神猫山遺跡発掘調査報告」「倉吉市教育委員会 1979
- ⑬根鈴輝雄「イザ原古墳群・小林古墳群発掘調査報告書」「倉吉市文化財調査報告書第25集」「倉吉市教育委員会 1982
- ⑭山本清「松本古墳調査報告」「島根県教育委員会 1963
- ⑮勝瀬利栄編「塩津山古墳群」「建設省松江国道工事事務所・島根県教育委員会 1997
- ⑯金山尚志他「荒島古墳群発掘調査報告書」「安来市埋蔵文化財発掘調査報告書第27集」「安来市教育委員会 1999」

図 版



1号墳調査風景（脇山康さん撮影）

図版 1



1. 田邑丸山古墳群
遠景（東から）



2. 田邑丸山古墳群
遠景（北から）



3. 田邑丸山古墳群
全景

図版 2



1. 田邑丸山1号墳
(南から)



2. 田邑丸山1号墳



3. 1号墳調査風景

図版 3



1. 1号墳トレンチ 1
調査風景



2. トレンチ 5土層



3. 墓葬施設全景

図版 4



1. 第1主体



2. 第1主体東小口

図版 5



1. 第1主体西小口

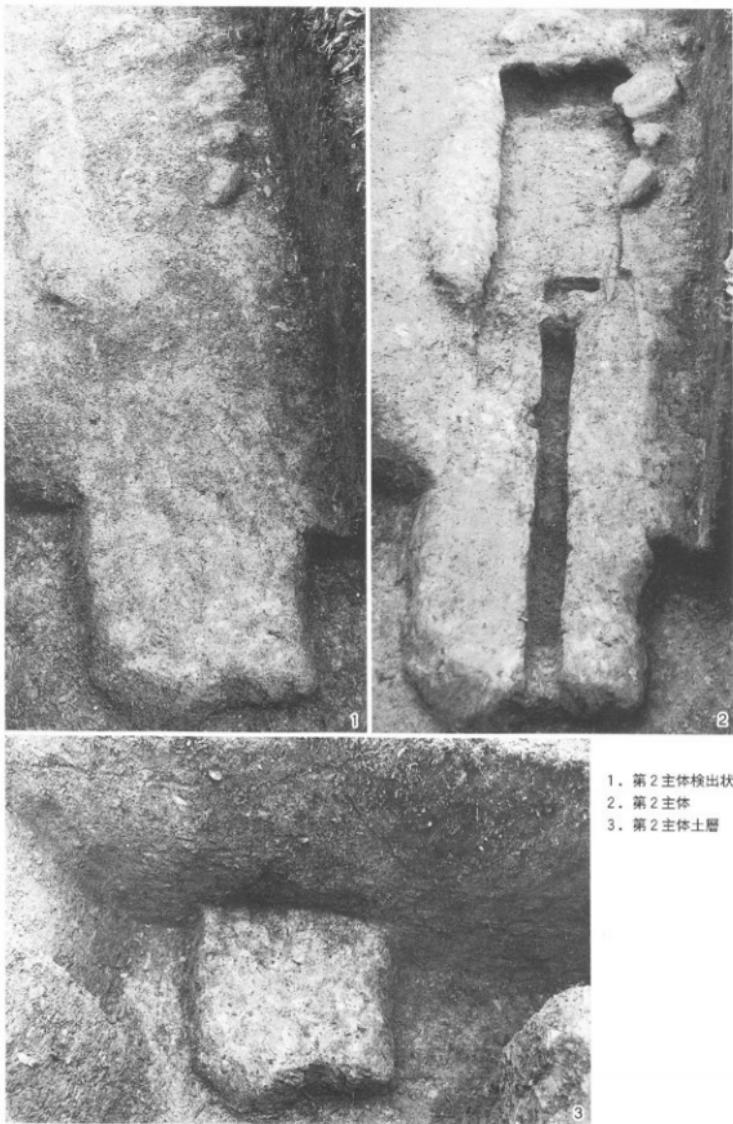


2. 第1主体北側壁



3. 第1主体下部構造

図版 6

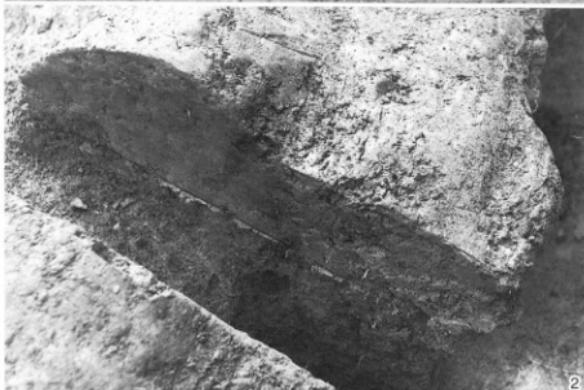


1. 第2主体検出状況
2. 第2主体
3. 第2主体土層

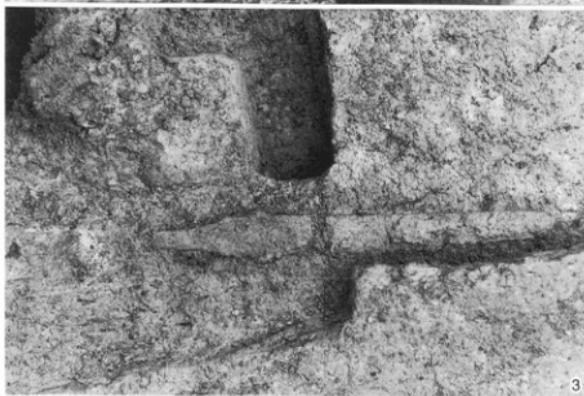
図版 7



1. 第2主体東小口



2. 第2主体粘土断面



3. 第2主体
遺物出土状況

図版 8



1. 填丘外埋葬施設
検出状況



2. 填丘外埋葬施設



1. 田邑丸山 2号墳
(北西から)



2. 田邑丸山 2号墳



3. 2号墳トレンチ 3
調査風景

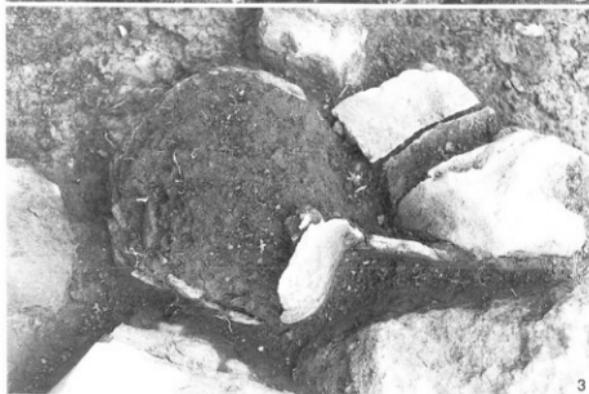
図版10



1. トレンチ1



2. トレンチ2



3. トレンチ2
遺物出土状況

図版11



1. トレンチ3



2. トレンチ3
遺物出土状況